

---

MG 『I』 S ~ 蛇を継ぐ者 ~ 《IS × MGS》

ポチ甲乙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M G 『I』 S へ蛇を継ぐ者へ 《I S x M G S》

### 【Nコード】

N 4 4 1 9 T

### 【作者名】

ポチ甲乙

### 【あらすじ】

戦争経済の時代は終わり、世界には平和が訪れたかに思われた。しかしそこに出現した、最強のバトルスーツ、I S インフィニット・ストラトス。女性にしか扱えないI Sを動かせる男は、実はもう一人いた。彼の名は、ステイード・スネーク。謎の機関から脱出した彼は、命を追われながらもI S学園へ逃げ……。自分の正体・過去・I Sの謎……。そして自分の生き方を探っていくお話。

今更ながら始めた二次創作。メタルギア知識が無くてもOK。気軽に遊びに来て下さい^^

設定はMGS4の後、大体2040年くらいの話。8話以降、ス  
ネークらしさが全開になります。そしてオリ展開+MGSキャラも！  
なお、この二次創作はフィクションであり、実在する人物・団体・  
組織とは関係ありません。

## 主人公設定（ネタバレ無し、挿絵あり）

オリ主設定

名前：ステイードゥスネーク

年齢：15歳

性別：男

容姿：屈強な体付き。茶髪。たくましい系。（眼帯、バンダナは未装備です）

性格：冷静

言語：英語、日本語（改善の余地あり）

IS

・名称：アード-Metal Gear

・容姿：戦車のような機体（メタルギアREX・RAY・RAXAのちぐはぐ）

・武器：右腕アンカー

左腕ガトリング砲 M134改

全方位ミサイル 9M14S

近接ナイフ ナイフ・S仕様

サブマシンガン パトリオット・対IS戦用弾

アサルトライフル M4・対IS戦用弾

ハンドガン Mk-23・対IS戦用弾

レーザー砲 FEL（自由電子レーザー）

+ 謎の、拡張領域を取った武器

・特徴：設計は第二世代型ISを基本にされており、そこに独自の改良がされている。後付け装備の積載量を増やすため、機体は重めであり、クセが強い機体。

> i 2 4 4 2 6 — 3 2 2 2 <

## 作者の追記

イメージを固めるために描いた絵。……拙いorz

そして、スネークの面影も無し。

あくまで、参考程度に留めていただけると嬉しい限りです。

これ、著作権に引っかからないかな(汗

……さて、セカンダリ・ソフト第二形態移行はどうしよう。

感想に、IS装備の意見も募集してます！

## プロローグ

『隊長、エリアAからHまで陣地構築終了。抱囲完了しました』

無線から、くぐもった男性隊員の報告が入った。

それを受けた屈強な男は、思わず顔を弛める。

最高国家機密がターゲットの今回の任務。成功させて本国に帰れば、指揮官の彼は間違いなく昇進だろう。いけ好かない女の上官に、彼はもうヘコヘコしないで済むわけだ。

「総員、民間人に気を配りつつ警戒を怠るな。『蛇』を発見次第確保。抵抗すれば」

ここで詰めを誤るわけにはいかない。わざわざ辺鄙な極東の島国に出向いているのだ。さらに、ターゲット、『蛇』の存在。

「射殺の後、死体とISを回収しろ。IS学園への侵入は、絶対に許すな」

IS学園。

次世代の戦略兵器。IS インフィニット・ストラトスを駆るパイロットの育成学校。ここは、国家による如何なる干渉も許されない。つまり、目標の『蛇』は、必ずここで身を潜めるはずだ。その情報を、彼は掴んでいる。

故に、IS学園を取り囲むように潜入部隊を配置させている。臨

海地域のため、当然船による監視も怠っていない。

二つある問題は、民間人への配慮。考えると舌打ちが出るが、こればかりはどうしようもない。平和ボケ日和見主義の国民にとって、覆面を被ってアサルトライフルを担いだ強兵は、一発で卒倒物だ。

もう一つは、『蛇』自身の戦闘力。

詳細は一切不明。かなり不気味だが、最終防衛ラインに、第二世代型ISを配備している。杞憂に終わる出来事に気を揉むよりも、帰国後の昇進した自分の姿を想像してみようか。

『……え、エリアE、第二ライン突破されました!』

馬鹿な。

「最前線は何をやっていた!」

『異常はなかったと報告を受けています!』

無能共が。握り締める無線機が悲鳴を上げるが、構わず指示を飛ばす。

「ISをエリアEに飛ばせ。俺も行く。最終ラインで必ず食い止める」

無線を切り、幾つもの悪態を吐く。真つ暗な道を疾走するワゴン車からは、闇が支配する都会の摩天楼が見て取れた。飛び交う無線が鬱陶しい。モノレールの線路やビルを、これ程忌まわしいと思ったことは無かった。身を隠せる物陰が多すぎだ。

刹那。

銃声。

「んなっ！」

金属が擦れる不快音が耳を打つ。急速回転する車体が、方向感覚を奪っていった。

電柱にぶつかり、車はようやく停止した。額に血を流し、ハンドルにもたれかかっている部下。運転手もまともに務まらないのかと、軽蔑の眼差しを送る。

込み上げる吐き気を抑え、とりあえず車外へと足を踏み出し。

世界がひっくり返った。

「ぐはっ」

(何だ、何が起こった)

何者かに引きずり倒され、彼は組み伏せられる。

こめかみに、金属が押し当てられた。

「……答える。『蛇』とは何だ」

子供の声だ。が、かなりの手練れだと彼は戦慄する。特殊部隊隊長に上り詰めた彼の實力は、並の格闘家では太刀打ちできないほど。そんな彼が、身動き一つとれずにいた。



(何なんだ、コイツ)

冷や汗が彼の頬を伝う。

背後で息を吸う音がし、思わず身体を硬直させる。

しかし、直後背中から圧力が消えた。

乾いた破裂音。

アサルトライフル、XM177が、闇の先で火を噴いた。弾着と同時にアサルトが抉れ、鈍い金属音が辺りを満たす。しかし、取り付けられた減音器サブレッサーによって、銃声が響くことはない。

複数の足音が接近し、彼は顔を上げた。

「隊長、ご無事ですか？」

危つく、威厳などそっちのけで礼を言いそうになった彼。しかし、咄嗟に飲み込む。代わりに、部下には罵倒を叩き付けた。

「早く追え！ あれが『蛇』だ！」

「は、はっ。しかし、ISですら、もう不可能であります」

「っ！」

彼は周囲を見渡す。気が付き、表情は絶望の色に染まった。

IS学園は、目と鼻の先だ。

「た、隊長！ 戻って下さい！ 深追いは危険です」

彼は走った。

彼の手から、金鶴が飛び立とうとしている。女尊男卑のこのご時世、念願の出世チャンスを逃すわけにはいかない。

ビルの間を縫い、広い道路を跨ぐ。

息を切らし、額に汗が滲んだ。

追いかける。

金の、『蛇』を。

「止まれ」

宵闇を、凜とした女性の声が貫いた。低めの凄みが利いた美声に、彼はたたらを踏む。

青白い月明かりに照らされた端正な顔立ちに、彼は見覚えがあった。

「……ブリュンヒルデ」

「その呼び名は好かんのだがな」

鬱陶しげに溜息を漏らす。

彼は懇願するように、黒髪の美女に声を掛けた。

「『蛇』を引き渡してくれ。アレは、我々の国の問題だ」  
「ISS学園特記事項、第二十一」

冷酷な対応に、彼は言葉を詰まらせる。

「……本学園の生徒は、あらゆる国家機関に干渉されない。貴様らの言う『蛇』は、既に学園の生徒だ」

何も。何も、言い返せない。

野望も、夢も、出世も。全てが崩壊していく音が、彼には聞こえた。

「お引き取り願おう」

引き下がるしかない。だが、言わずには居られなかった。

「聞いているだろう、『蛇』。我々は、必ず貴様を確保する。それまで、せいぜい三年間を怯えながら過ごすんだな」

つばを吐き捨て、踵を返す。

闇に溶けていく彼の背中、何処までも小さかった。

「……さて、『蛇』。鷹は帰ったぞ」

「助かりました」

僕は校門の影に置かれている段ボールから這い出る。

本当に危なかった。まさか空港に到着してから追ってくるとは。全身冷や汗で気持ち悪い。後でシャワーを使わせてもらおう。

「貴様のことは『アイツ』から聞いている。詳しいことは、明日話す」

「分かりました。ありがとうございます」

頭を下げた。うん、数年前見たまま、格好いい女性だ。気迫というか、重さが違う。

そして暗闇に行く彼女を、僕は期待と、不安を抱えて追いかけた。

## 001話 転校生？（前書き）

設定は、『一夏vsセシリア、クラス代表争奪戦』前日。

少々、女子生徒の騒ぎ方が足りなかったので、一部加筆します。

## 001話 転校生？

『今日は転校生を紹介する。入れ』

足を踏み出し、僕はIS学園一年一組の教室へ入室。

うあ。

女、女、女。

止めてくれ。僕は人見知りなんだよ。だからそんな期待するよう  
な目で見ないでくれ頼むから。

キヤーーーーー。

「男前っ、たくましい系の！」

「ブラウンの髪も良い！」

「ああ、守って欲しい！」

「それよりも、抱き締めて貰いたくなるう〜〜！」

今《ウーパーパー》が居たら、バーで一杯やれるな。こっつ、  
「苦労してますね」「お前もな」みたいな。未成年だけど。

唯一の頼みの綱は、織斑千冬おしじまちふゆさんぐらい何だが。駄目だ、完全に  
他人の振りだな、これは。

「転校生、ステイードIIスネークだ」

やっぱり、同年代の子供というのは慣れないな。これなら、目の

死んだ研究員に囲まれていた方が、よっぽどマシだよ。

呼吸を整え、唇を舐める。

馬鹿みたいに震え始める膝を押さえ、口を開いた。

「ステイード」スネークと言います。よろしく」

一応、当たり障りのないテンプレだろ。問題無い問題な……。

なんだその、『え、コイツもそれで終わり？』的な視線は。拷問地獄か、ここは。

でも、そんなに喋ることなんか無い。考える、僕。そっだ、確かこういう時は大抵「好きな物」とかで親密感を出すんだ。うん。

さて。

「えー、好きな物は」

うおっ。視線が、更に強烈に。だが、負けるか。

ん？ 一人だけ目線の種類が違うような……。

あ、織斑おりむらいちか一夏いちかだな。

ISを使える、世界で唯一の男「だった」人物。何故過去形か。当然だ、僕が男だから。

一人、最前列でとても温かい目を向けて来る一夏。

うん、きつと……いや、確実に心細かったのだろう。あれだ。白鳥の中に、一羽だけカラスがいるような、何とも言えない明らかな場違い感。

しかし、同じクラスの男同士、友好的な関係を築いていきたい。その為にも、まずこのファーストコンタクトを乗り越えなければ。

「好きな物は 『段ボール』 です！」

何故だろう。空気が凍った。

スパコーン。

ぐあ。入った。何かが綺麗に後頭部に入りましたよ。

「まったく、最近の男共は満足に自己紹介も出来んのか」

厳酷・げんこく 非常に厳しいこと。むごいこと。また、その様。と言つ意。

流石、鬼教官の異名を勝ち取るだけある。どうやってたら出席簿でゴム弾以上の威力が出せるんだよ、ちくしょう。

「貴様の席は窓際の最後尾だ。ほら、さっさと席に着け。SHRを始める」



指された席へ、とぼとぼと歩く僕に向けられた、慈愛に満ちた瞳。

ああ、君達にもアレを振るってるんだね。うん、みんな、御愁傷様です。

クラスメイトと傷を嘗めあつた後、真っ白な椅子を引いて着席する。

「……そうだ、スネークは専用機持ちだからな。頼りにするように」「ええええええっ！！」「」

ぎゃあ。高い、高いよ、女子の奇声。耳がイかれたらどうするんだ。

皆の視線が僕の胸元 エメラルドのペンダントに注ぎ込まれる。

「うわー、あのエメラルド、おつきー」

「……欲しい」

「そうね、専用機もエメラルドも。あー、私も欲しー」

「良いわね、あの渋めの声。織斑君とは別の魅力が……」

「質問？ 誰が行くの？ 抜け駆けは許さないよ！」

わいわい、がやがや。

ビックリだ。話には聞いていたが、現代の高校生とはこういう物か。活発で、生き生きとしてる。少し……羨ましいかもしれない。

でも。

「黙れガキ共。時間がない、授業を始めるからテキストを開け。では、山田先生お願いします」

「……はっ、はいい！」

山田と呼ばれた先生が、おどおどしながら教壇に立つ。サイズの合っていない眼鏡にディスプレイの光を宿し、電子黒板に情報を表示させた。

僕の目的。

僕は何者で。

昨日の『ヤツら』は何なのか。

あの人は何かを掴んでるようだったが、三ヶ月間何も教えてくれなかったし。

でもきつと、ここIS学園では見つかるはずだ。

世界各国の代表候補生が集まるこの学園。

僕は知らぬ間に、ペンダントを固く、固く握りしめていた。

「頼むステイドっ！俺にISを教えてください！」

授業後、僕に掛けられた第一声は彼　織斑一夏のものだった。

いや、な。初対面の相手にいきなり拝み倒されても対応に困るわけ。必死さは伝わるんだが　如何せん周りの女子の視線が痛すぎる。

「待って下さい織斑。落ち着いて下さい」

「……あれ？　何で俺の名前知ってんの？」

「それはそうでしょう。あなた有名人ですから」

何故そんなにキョトンとしているのだろうか。ISが動かせるのは女性と言う常識を覆すイレギュラー。女尊男卑社会において、一夏は男性陣の希望の星だ。自覚、足りていないんじゃないか？

「俺は織斑一夏。一夏、で良いぜ。よろしくな」

「ステイードゥスネークです。こちらこそ」

二カツと笑う一夏に、僕は右手を差し出す。がっちり、男の握手を交わした。

「ねえねえ、あの二人、良い感じじゃない？」

「やっぱり織斑君、男の趣味が」

「微妙にステイード君の方が背が低い……やっぱり」

「いえ、その考えは軽率よ。重要なのは雰囲気だわ」

「……と、なると」

『『『織斑君が、受けね！』』』

どうしよう。気まずい。

「……一夏、まさか」

「無いからな！ 健全だからな！」

一夏必死（笑）。

それにしても、『必死』って『必ず死ぬ』って書くよな。全力を出す死ぬのだろうか。あ、死ぬか。日本語は面白い。

「それは置いておいて。一夏、どうしてそのような？」

「ああ、実はな……」

「一夏っ！ ISは私が教えてやると言っただろう！」

唐突な怒鳴り声。

驚いて振り向く。

目の前には、長い黒髪をポニーテールに纏めた美少女。彼女の仁王立ちは様になっていて、目力が凄い。むしろ怖い。千冬さんと良い勝負だ。

見る、一夏が引き攣った顔で震えてる。

「だってな筈。お前、剣道ばっかで全然教えてくれないじゃないか」「っ！ だ、だから、IS以前の問題が片付いていないと言っている！」

「いや、でもな。試合は明日なんだぞ。流石に」

「う、五月蠅いぞ一夏！ 基礎体力が無くて、実戦が出来るか」

篤さん、相手の目を見て言わないと、説得力無いよ。

「えつとお二人とも？ とりあえず状況を教えてくれませんか？」

僕の指摘に、二人はぼつが悪そうに押し黙る。

一夏に目線で問いかけると、ぼつぼつと語り出した。

「……つまり、クラス代表をかけてイギリスの代表候補生とサシで決闘する。けれど一夏はISの基礎知識は殆ど無く、実戦経験どころか専用機すら届いていない、と」

「そうだ」

「馬鹿なんですか？」

ぐはっ、と机に突っ伏した。

しまった、言い過ぎたか……。と、篤さんが一夏に軽蔑の眼差しを送ってる。ま、いいか。だってさ。無謀にも程がある。ISとパイロットは、時間を掛けて馴染んでいくのだ。一夜漬けでどうにかなる物じゃない。

「せめて、ハンデ位貰いましょうよ」

「男が一度言ったことを覆せるか」

「難儀ですねえ」

どうしようか。これから一緒に授業を受けて行く身。力になってあげたいと思う。けど、ISも無しでどうすれば……。

「……実際に見せるしかないですかね。一夏」

「お、おう」

「アリーナの使用許可は取れますか？」

「しかし、練習機は申請に一日はかかるのだぞ」

「仕方ないので、IS無しで行きましょう。箒さんもどうですか」「え、あ、うむ。と、当然私も行くぞ」

何故そんなに赤くなっているんだろう。特におかしなことを言った覚えもないし。それにしても、さつきからずっと一夏のことを眺め。

ああ。成る程。

「何だステイード。その生暖かい目は」

「いえ、別に。では、申請お願いします」

一夏と箒さんを送り出す。

危ない危ない。あそこではれたら刺れるところだった。そんな雰  
囲気でてるし。

さて。

イギリスの代表候補生か。

もしかしたら、知ってるかもしれない。

「あゝ！ ステイード君！ 質問タイム！」

「済みません、今日は勘弁して下さい」

やんわりと女子勢の追撃をかわし、目的の人物　であろう人影  
に近づく。

金髪、色白の肌。間違いない。資料で見たことはある。

「失礼、セシリア＝オルコットさんですね？」

「あら、転校生さんですか。直々に挨拶に来るとは、良い心がけですわね」

成る程、この高圧的な態度が一夏を刺激したんだろう。

だがこの程度の挑発に乗るとは、一夏も子供だな。

しかし、手を腰に当てている偉そうな態度が、妙に様になってる。  
天性の才能って奴か。そんな才能、いらないだろうが。

「代表候補生であるあなたに、聞きたいことがあります」

「このセシリア＝オルコット。下々の要求に応えるのも、貴族の義務ですからね」

「……………」

大丈夫だ、問題無い。

ここからは真面目な話だ。さて、イギリス代表候補はどれほど情報通か。

「『蛇』、『メタルギア』、『ザ・ボス』。この単語に、聞き覚えは？」

「……知りませんわ」

即答だった。

しかし、『知らない』と言う事実が、自信家であるセシリアを不機嫌にさせたようだ。

そして、僕は聞き捨てならない台詞を聞いてしまう。

「まあ。妙な言葉を並べて私の気を引こうだなんて。流石は『段ボール』などと前時代の遺物について語り出す方ですわ」

かっちーん。

何かが、飛んだ。

「君は、『段ボール』の有用性を知っていますか？」

「はっ、あんな使い捨て包装紙。引越しの時位にしか必要なくつてよ……何ですの、笑ってないで言いなさい！」

「……残念です、イギリスの代表候補生。あの汎用性の利く便利ツールを蔑ろにするとは。戦闘の腕も、所詮その程度なのでしょうね」「んなっ！ 言うに事欠いて……！ いいですわ、あなたも日本の猿を蹴散らした後で蜂の巣にして差し上げます！」



「その言葉、後悔はしないで下さいね？」  
「……ふんっ！」

茹で上がったエビのように顔を真っ赤にさせ、セシリアは怒り心頭、と言った体で教室から出て行った。

まったく、『段ボール』の素晴らしさが分からんとは。けしからん奴め。

「……………」

やってまった。

「…………ステイド君まで。相手は代表候補生だよ」  
「ええ、問題ありません。僕がそう簡単に負けるはず、ありませんから」

幼い頃から受けた訓練。

改造に改造を重ねた専用機。

負ける要素が、何処にあるのか。

しかし…………。

「ステイド。第三アリーナが取れたぞ…………って、何だこの空気」  
「ええっ、とですね。気にしないで下さい。では、皆さん」  
「え、ええ。さよなら」  
「と、特訓、頑張っつてね」

気まずい空気の教室から逃げるように飛び出す。

一夏、頼む。頼むから僕にそんな、心配そうな目を向けなくてくれ。

……どうやら僕も、まだまだ子供だったらしい。

001話 転校生？（後書き）

早速誤字発見……修正しました。

## 002話 講義

「一夏、ISの戦闘時における死角はどこか、分かりますか？」

一夏は顎に手を当て、考え込む。

隣で篤さんも目を閉じていた。

僕たちは教室を出た後、第三アリーナに足を踏み入れていた。今は広大なグラウンドの脇に設置されたピットで、三人固まってISの講義中。

僕は当然ISスーツ。一夏と篤さんは、そのまま制服姿だ。

新学年始まったための煩雑さの所為か、先約もなくアリーナの使用許可もすぐ取れた。おまけに、試合会場を貸しきりである。

あとは一夏のISさえあれば……いや、無い物ねだりしても仕方ないか。

「……いくら考えても、死角はないとしか……」

「ええ、ありませんよ」

ずべしっ、とこける一夏と篤さん。

良い反応してくれるなあ。教え甲斐がある。僕も若干知識の偏りがあるから、不安もあるけども。

「ISは搭載されているハイパーセンサーのお陰で、パイロットの

視覚外も捉えることが出来ます。ここまでは、今日の授業でやりましたよね？」

「……あ、ああ。そうだな、確かにやった、うん」

「……一夏、本当に覚えているのか」

「んな、箒。……そりゃあ、もちろん！」

滅茶苦茶不安だ。でも、ならここで覚えて貰おう。

「ですが、ね。ハイパーセンサーはあくまで、『意識した遠距離、視視野の外も知覚できる』と言っただけです」

「……………うん？」

首をかしげる二名。

「こりゃ、相当長い教鞭になるかな。理論と実践は違っからな。はあ……………」

「……………なんか、その、ゴメンなステイド」

「何で謝るんですか？」

「いや、その……………」

「一夏の頭が悪くて済まない」

「箒っ！」

泣くな一夏。耐えるんだ。頑張るんだ。

僕だってそれなりに勉強して、訓練をしたからここで教えることも出来るんだ。うん。

「まあまあ、二人とも。で、つまりですね『ISの視覚と人間の視覚は一致しない』。簡単に言えば、『ISのみ知覚できる範囲は、

パイロットが知覚するまでタイムラグがある』と言うことです」

「つまり、後ろか？」

「そうですね、一夏。しかし、もっと効果的なのは上下ですね」

「何故なのだ？」

再び考え出す二人。

余り時間を食うわけにも行かないか。少しヒントを出そう。

「例えば、ジャングルジムがある公園で、鬼ごっこをしているとしましょう。皆さんは逃げる方で」

ふむふむ、と頷く二名。

「逃げていたら、いつの間にか鬼を見失ってしまった。鬼を探そう。では、どうする？」

「まずは当然、左右の確認だな」

と、篝さん。

「その後は……後ろを振り返るしかないんじゃないか？」

そして一夏が締めくくる。

よし。

上手く引っかった。

「しかし鬼は、ジャングルジムの上から飛び降りてきましたとさ」

「あああああつ！！！！」

おお、本当に良いリアクションをしてくれる。そんなに目を丸くして……って、篝さん顔が一段と怖い。まるで鬼みたいだ。いや、失礼か。

「鬼め、卑怯だぞ！」

「いや篝さん、そう言う話じゃなくてですな」

「ステイード、俺、一瞬お前が悪魔に見えたぞ……」

「気のせいですよ」

とりあえず二人　主に篝さんが落ち着くのを待つか。

目を三角にして、篝さんはペットボトルのスポーツドリンクを飲み干してしまった。ああ、それ僕のものに。蓋は開けてなかったし、ロッカールームにもう一本置いてあるから良いけど。

一夏は何やら真剣に考えている。

「……成る程、死角は上下にあるのか」

「一口にそうとは言えませんが。ただ、僕たちは地に立って生きているので、どうしても縦方向への意識が疎かになるんです。まあ、相手は代表候補生ですから、ある程度は改善しているでしょう。しかし、所詮は人間ですから」

唸る一夏。尚も考えるのは良い傾向だろう。

もちろん全て話してしまってもいいのだが、自分で気付くことも大切だから。ま、行き詰まったらまた相談に乗ってあげればいいしな。

「冷静な状態にあれば、様々な状況に対応できるように気を配りますが。下手に熱くなると、視野が狭くなって『自分の常識』で行動してしまいますからね」

「……うっ」

「まさに、一夏の欠点だな」

あちゃ、凶星だったか。どうも、そんな無鉄砲な気はあったからなあ。戦いの最中に、少しでも気に留めていてくれたら良いだろう。

さて。

「ではそろそろ、実演飛行を始めましょうか」

「おう、頑張ってくれステイード」

「お手並み拝見と行こう」

それぞれのエールを背に、二人から距離を取る。

眼前に四角く切り取られた茜色の空を見詰め、ペンダントを握りしめた。

目を閉じ、呼ぶ。



相棒を。

「来い、『アード』」

浮遊感。

直後の、一体感。

感じたのは、それだけ。

「ほお……」

「おお、なんか、男のロマンを感じるな」

その様は、やはり何度見ても『戦車』に近いと思う。

それを思わせるのは、特に脚。滑らかな曲線を描く装甲が多いI Sだが、『アード』はカクカクした、如何にもロボットを連想させる風体だ。

加え、肩口後方から伸びる、一對の装甲版。

装甲を展開させた内側には全方位ミサイルが内蔵されており、防御板と攻撃の両方を兼ね備える装備となっている。

背負っているのは、垂直尾翼を模したバーニア・システム。三角形に固められた三つのノズルで、爆発的な推進力を生み出せる。

若干重めの機体だけど、良い奴なんだよ。本当に。

ただ、無闇に拡張領域を取っている癖にプロテクトが掛かっていて呼び出せない武器があるのだが。取り外すことも出来ないし、どんな武器かも分からない。けど『段ボール』だったら許す。いや、それなら早く見てみたい。ま、いいか。

脳で、一夏と篝さんを見る。

ハイパーセンサーの感度は良好、一夏の目が輝いてるのまでしっかり見える。

「無線で実況しながら飛びます。モニターはアリーナ全域を映す物と機体をアップでホーミングする物二つありますので、適宜見分けて下さい」  
「お、おう」

何故一夏の方が緊張しているのだろうか。

緊張、と言うか、興奮か。微妙にだけ頬が紅潮してるし。流石ハイパーセンサー。

各部異常なし。オールグリーン。

シールドバリアー、展開。完了。

カタパルト、射出五秒前。三、二、一。

襲い来るG。

放り出された茜色の空。

一気に上昇する。

IS学園が見渡せた。

綺麗だった。

そびえる塔も。

佇む校舎も。

広がる海も。

正解、だったかな。

ここに来て。

「……一夏、今から基本的な戦闘機動を一通りするから。しっかり見てて下さい」  
『了解、ステイード』

正解だと思っただなら、楽しもう。

僕が、僕で居られる一時を。

「……すげえ」

「……………」

途中でステイードが『これが「インメルマントーン」』、『急停止からの反転上昇』『下方へ逃げる「バレル・ロール」』。戦闘機の機動の応用ですね』などと言っているが、一夏の耳にはまったく入ってこなかった。

初心者どころか、数度しかISに触れていない一夏にも分かる。

無駄が一切ない。

紅蓮の太陽を反射するグレーの機体は、神々しくすら見えた。

(俺にも、出来るのだろうか)

見せつけられ、圧倒され、一夏の持っていた自信が不安定になっていく。

大口を叩いて、セシリアと勝負になって。

(もし負けたら……)

どんどん思考が悪い方向へ向かっていく。自分らしくない、とは思うが、止められない。

(負けたら、千冬姉の顔に泥を塗っちまう。負けるわけにはいかない。けど)

「一夏」

「……わっ、どうした筈」

筈が心配そうに一夏を見詰める。

彼女の真っ直ぐな瞳を覗く内、だんだんと罰が悪くなって、目を逸らそうと。

「逃げるな、一夏」

「っ！」

凜とした声に、一夏は固まる。

冷たさの裏に優しさの色を覗かせ、筈は口を開いた。

「一夏、お前はお前だ。今の一夏に出来ること、その全力でぶつかるしかないだろう」

強く、胸を打たれた。

緩みかける涙腺を、一夏はやっとの事で引き締める。

(……流石篤、隠し事なんて出来ないな。それとも、俺が顔に出やすいのか?)

気に掛けてくれる幼なじみ。

転校初日から講義をしてくれる友人。

憧れ、追いつけてきた姉。

皆温かく、一夏を支えてくれる。

そんなかけがえのない人達を、守りたい。そう思った。

(そうだな。だからこそ、俺の出来る全力を出そう)

吹っ切れた。

新たな決意を、胸に抱く。

「もう大丈夫だ。ありがとうな、篤」

「……っ！ あ、ああ。礼には及ばんっ！」

とびきりの笑顔で礼を言う一夏。突然の切り返しに箒は顔を真っ赤にしてしどろもどろになる。

そんな、聞いている方が恥ずかしくなるやり取りを無線で聞いていたヒト型兵器は。

(……やれやれ)

と、ホバリング停止飛行しながら肩をすくめるのだった。

## 003話 決戦前夜(前書き)

試行錯誤の末、タイトルを変えました。

あと、原作名『IS インフィニット・ストラトス』でヒットするよう四苦八苦……

皆さんの感想より、《箒&鈴・現代男子高校生向き日本語講座》の開講を繰り上げることにしました^^  
それでも、あと二、三話後ですが。



## 003話 決戦前夜

「そうだ、可能な限り早く。……無理？ 何とかしてくれ、明日には使いたいだ。脅威は去ったから……分かった。せめて明日の正午までに。頼みます」

ふう……。と息を吐いて、千冬は受話器を戻す。

コトツ、と事務机にコーヒーが置かれ、千冬は振り向いた。

「……ありがとうございます、山田先生」  
「いえ、お疲れ様です」

真耶まやは副担任の責任感からか、何かと千冬のサポートまでしてくれる。申し訳なくは思うのだが、身辺整理もまともに出来ない自覚はあるので、千冬は甘えていた。

柔らかかそんな湯気を立てるカップを手に取り、ブラックに口を付ける。

苦すぎる安物ではあるが、痛む頭には良い緩衝材になった。

「……倉持技研の対応はどうでした？」

「こちらが安全策をとったのだから強くは言えませんでした。到着は明日の正午になりそうです」

「不穏な武装集団。白式じゃなくて、スネーク君が目的だったとは……」

真耶は顔を曇らせる。

白式の搬送が遅れに遅れた原因。

それは、ここ一週間IS学園の周りに潜伏していた武装集団の所為だった。

IS学園は各国家の最新技術が集まる場所。狙われる可能性はなきにしもあらずで、度々このような警戒態勢を敷くこともあった。それでも、あくまで警戒と言っただけで、特別スケジュールに影響を及ぼすほどではない。

しかし、今回は違った。

異常な物量、人員。

千冬が情報の真偽を疑ったほどに。

それも、展開されたという時期が、白式が輸送されるタイミングと見事に重なったのだ。

故に取った、安全マージン。

それなのに、まさか新型ISの白式ではなく、目標はたった一人の学生とは。

全く以て、迷惑な話である。

が。

(……あの規模を投入させるほどの人物。ステイード・スネークは

何者なんだ？)

知り合いの『彼女』からは、転校の書類と一言「そっちに男の子が行くから。よろしく」と受けただけ。数度連絡を取り直したが、毎回電波が届かなかった。

再び始まる偏頭痛に、千冬は顔をしかめる。

「織斑君、明日はオルコットさんと勝負ですのに。大丈夫でしょうか」

「……あれの腕に任せるしかないでしょうね」

加え、弟にいらぬ影響を与えてしまったことも気掛かりである千冬。

このままでは、動作確認はおろか、フォーマット初期化とフィッティング最適化すら完了するか怪しい。

「それにしても、スネーク君の資料、穴が多すぎます。名前と年齢以外、出身も住所も家族構成も、何一つ分からないなんて」

そう。ステイードの個人情報は、異常なまでに少ない。いやむしろ、非常に巧妙な隠蔽がされているのか。

それは、まだ良い。

重大な問題が一つ。

「山田先生。問題なのは、スネークのISです。コアが各国で管理されている以上、国付きのパイロットのはずなのですが」

ISのコア総数467個は、全て割り振られた国の管理下にある。

コアの個数が固定されているのは、唯一コアを製造できる技術者しののたほね篠ノ之束がコアを製作していないから。このことは教科書にも載っている。

つまり、ステイードのコアも、どこかの国が持っていた品のはずだ。

非常に考えづらい例外を除けば、だが。

「それも含め、本人に聞いてみるしかないで

コンコン。

噂をすれば、何とやらである。

「失礼します、ステイード」スネークです」

職員室の出入り口で、ステイードが千冬達を窺っていた。

千冬は一気にコーヒを飲み干すと、真耶に礼を言って腰を上げる。

「さて……スネーク、外で話そうか」

「分かりました」

うむ、と返事を確認し、二人は夜の中庭へ繰り出した。

夕食時も終わった所為か、真つ暗な所為か。中庭には人っ子一人見あたらない。

街灯の明かりしかないのは、やっぱり心細いな。

「……こんな所に呼び出して、済まなかったな」

「いえ。千冬さん、お久しぶりです。数年ぶりですか」

「やはり、貴様。あの時の……」

今となつては懐かしいか。

僕が研究所にいた頃、極秘で行われた二カ国間合同演習。

相手の教官は、あろう事が有名人、織斑千冬その人だったのだから。

あの時から厳しかったからなあ。初対面で罵倒されたし。

出席簿殴打はなかったけど。

「貴様はあれのように、仕事でも先生を付けないことはないだろうが。一応、忠告しておくぞ」

「……了解です」

そうか、一夏は「姉」と呼んで出席簿を喰らっているんだな。

合掌。

それは置いていて。講義中、小耳に挟んだんだけど、少し聞いたことがあるんだよな。

「千冬さん、一夏の専用機は間に合いそうですか？ 遅れてるって聞きましたか」

「……ああ、何とかな」

苦い顔。これは 嫌な予想が当たったかな。

「もしかして、僕が原因、とか？」

「………うあ。」

「い、いや、気にするな。向こうも調整に手間取っていたようだしな！」

そんなに狼狽しなくても。

余計傷つくじゃないツスか。

そうか、武装集団は長い間張ってたんだろっな。

一夏には謝りたいけど……謎の組織に追われていることも話さなきゃいけないし……どうしようか。心配掛けたくないし。

「んんっ！ さて、私も聞きたいことがあるのだが」

咳払いの後、千冬さんは切り出す。

絶対居心地悪くなったんだな。まあ、長引いたら僕も困るから良  
いか。

「貴様は、一体何処の国の出身だ？ ISのコアは何処で？」

……………。

そうか。

気になるだろうな、教職者としては。

でも。

「……それは、僕の方が知りたいですよ」

自分の過去。

正体。

IS。

何一つ、知らない。分からない。

無知なことに対する、虚無感と不安に襲われる。

自然と、笑みが洩れた。

きつとそれは、酷く自嘲的な物だろうが。

「……僕がステイード・スネークという名前だと言うこと。どこかの研究所か軍事施設で、兵士として育てられたこと。専用のISを持っていること。それが、僕の知ってる過去です」

千冬は、何も喋らない。

そうだな、慰められたりしたら、きつと惨めな気持ちになっただろう。

察してくれる大人の女性に感謝。

口から零れるままに、僕は語る。

「……丁度三ヶ月前。研究所で、母親『だと思っていた』人の会話を聞いてしまったんです」

彼は傑作よ。あのIS操縦センスは異常だわ！

落ち着け。……日常生活の方はどうだ？

そっちは駄目ね。子供らしさが無いわ。ま、アタシは『母親の振り』をしてるだけだ。

お前が母親じゃ、将来が心配だな。

将来も何も、ヒトゴロシの道具に明るい未来なんてあるはず



無いわよ。ふふっ。

違くない……。

「……………」

「僕は、恐ろしくなりましたね。僕の信じていた全てが、ひっくり返ったんです」

必死に耐えた訓練。

一生懸命叩き込んだ英語と、日本語。

ISを使いこなす為のトレーニング。

母が、研究所の皆が褒めてくれるから。

幼い頃から僕は、それだけを頼りに努力し続けた。

なのに。

出来たのは、殺人鬼。

「……………逃げました。外へ。今どこの国にいるのかなんて分かりませんでした。ISがありましたから。戦闘機やバギーを乗り継いで逃亡したんです。そして」

行き倒れた僕に、救いの手が差し伸べられた。

「『彼女』に出会ったんです」  
「……成る程な」

千冬さんの表情は、これでもかというほど暗い。

話しすぎたか。でも、押しつけるみたいだけど、話したら少し安心した気がする。

「嫌なことを聞いたな」  
「いえ、僕もスッキリしましたよ」  
「ならいいんだが」

軽く頬笑むと、千冬さんも口角をあげた。

そこに、一陣の風が吹き抜ける。まだ四月か、日本は肌寒い。

纏わり付く空気の奔流は、僕の憂いを持って行ってくれた。

「……ところで、貴様の日本語は何故丁寧語なのだ？」  
「……おかしいですか？」

勉強をしただけで、実際に話したのは三ヶ月前だったりする。

やっぱり、訛っているだろうか。

「そうではなくてだな。何時も丁寧語を使っているのだろう」

「……ああ、それはですね」

日本語は難しい。

英語よりボキャブラリーが多いし、文法も自由。

数ある話し方の内、一番無難で、相手に不快感を抱かせない話し方。

「だから丁寧語なんです。それ以外は、自信ないですね。そう

そう、逆に英語はがさつらしいんですが」

「……ふむ」

しまった。

千冬さんの目が、獲物を狩る鷹のそれに……！

「……話してみる」

なんだよ。弄る気満々じゃないか。

「……拒否権は？」

「ない」

即答ですか！？

はあ……。

英語、ね。

『ところで、ミス・チフユ。少し尋ねたいことがあるんだが……』

ぶっ……。

え、何その笑い？

「そうか、成る程。くくっ、語調が乱暴な所為で雰囲気が違うのだな……」

「うーん。遺伝、ですかね」

「違っだろう……」

やっぱり変なのか。……『段ボール』があつたら隠れたい。

これは改善の余地ありだな。

そつだ、日本の『ギャルゲ』とやらをやってみるか。

情報によれば、ギャルゲの主人公はなかなか男前らしいし。

「何というか、見た目のギャップだな。どちらかというところ、一夏みたいな語調の方がしっくり来るぞ……くくく」

いやいや、含み笑いが悪魔みたいなんです。

あ、睨まれた。何故こんな簡単にはれるのだろう。

「まだまだ、貴様も未熟者だからな」

「……精進します」

話し込む内、もう夜遅くだ。そろそろ寝ないと、明日に響く。

「さて、そろそろ時間だな。昨日に引き続いて、貴様には教職員用の部屋で寝て貰う。調整が終わったら寮に移動できる。我慢してくれ」

「分かりました。……それから」

そのまま立ち去ろうとする千冬さんを引き留める。

目的を忘れるところだった。危ない、危ない。

「『蛇』、『メタルギア』、『ザ・ボス』。何か知りませんか？」

「………濟まない、全く聞き覚えがないな。『アイツ』には聞かなかったのか？」

「いえ、ただ、何も教えてくれなかったんですよ」

思わず、肩をすくめる。

きっとあの人なら何か掴んでたんだろうけど。残念。

千冬さんに頭を下げ、帰ろうとした。

そこへ、千冬さんの声が割って入る。

「スネーク。おそらく、『蛇』と『BIG BOSS』はコードネームだろう。しかし、『メタルギア』とは何なんだ？」  
「……それも、詳しいことは知りませんが」

ぎゅっと、胸のペンダントを握りしめる。

振り返り、僕は口を開いた。

「『アード・Metal Gear』。それが、僕の相棒の正式名称です。では、おやすみなさい」

挨拶を交わし、踵を返す。

そうか、千冬さんでも知らなかったか。

と言うことは、少なくともドイツはお門違いと言うことだろう。

期待してたんだけどなあ。

ま、頑張るか。

……眠い。

### 003話 決戦前夜（後書き）

『何故白式の到着が遅れたか？』

原作でよく分からなかったので、使わせて貰いました^^

次回は一夏vsセシリア戦。

004話 クラス代表決定戦（前書き）

MGS4のプレイ動画を見ていたら……いつの間にか日付が変わっていた。



## 004話 クラス代表決定戦

パンツッ！

……山田先生をからかっていたのだから、仕方ないとは思っけど。

目尻に涙を浮かべる一夏を見ると、何故だろう。哀れ、一夏。

「千冬姉……」

パンツッ！

もう止めて！ 一夏の体力は……こほん。

結局正午になっても届かなかったISは、放課後になってようやく到着したらしい。

そして、たぶん今からお披露目。

どんな機体なんだろうか。

自分のと比べたくなるのは、専用機持ちの性かね。

「来ました！ 織斑君の専用IS！」

きょとる一夏。

「織斑、すぐに準備しろ。初期化の時間も取れん。ぶつつけ本番で物にしろ」

おろおろする一夏。

「この程度の障壁、乗り越えて見せろ、一夏」

目を白黒させる一夏。

「一夏、ISが梱包されていた『段ボール』僕に譲って」

パァンッ！

「ISが紙にくるまれて来るか、馬鹿者」  
「残念です」

呆気に取られる一夏。

……………ああ、もう。

「早く！」「早く！」「早く！」

「はいっ！」

一夏が振り向き、搬入口が音を立てて開き始める。

おお、斜めにスライドするのかこの扉。

先進的だな。

そして……。

『白』が居た。

眩しい位、真っ白だな。まるで小麦粉を被ったみたいだ。

あの時は大変だったなあ。くしゃみは出るし。シャワーを浴びても、小麦粉が濡れてどろどろに……。どうでもいいか。うん。

元来、兵器とはそういう物だが、ISでここまで単色なのは珍しいな。

「これが……」

一夏、声が震えてるぞ。気持ちは分かるけど。

「はい！ 織斑君の専用IS『白式』です…！」

吸い込まれるように一夏は歩を進め、白式に手を触れる。

そうそう、座るように。うん。この、「カシュッ」と空気が抜ける音が小気味良いんだよな。それが装甲のある各部位で出るから、リズムを刻んでるみたいで心地良いし。

みんな、緊張してるな。

千冬さんはいつも通り……少し、顔が強張ってる？

……あ、そうだ。

「一夏、こっちを向いて下さい」

「お、おう？」

もう装着は完了したかな。

光量は……ピットはいろんな所に照明があるから十分明るい。問題無し。

ポケットから取り出した携帯を弄って。

「はい、チーズ」

カシュッ。

ズダン！

「……………待って下さい。もはやそれは出席簿で出せる音では  
ありません」

「黙れ大馬鹿者。一夏、問題は無いな」

千冬さん、手厳しい。

見ろ、一夏も篤さんも山田先生も、みんな苦笑いだ。

……………けど、よし。

表情は柔らかくなった、かな。

「じゃ、行ってくる。ステイード、後で写真くれな」  
「もちろんです」

にかっ、と笑って、一夏は正面に向き直る。

……………直後、カタパルトが射出された。

「っ！」「っ！」

僕と篤さんの、声にならない悲鳴が重なる。

一夏は至近距離で放たれたミサイルの直撃を喰らっていた。これは、致命傷だろう。

出だしは機体に振り回されていて、本当どうしようかと思った。

じりじりとシールドエネルギーは削られていたが。

しかし、それだけで、済んでいた。

相手は代表候補生。それも射撃がメインのセシリアの銃撃は、正確無比な物だった。

それでも、致命打は受けていなかった。ギリギリでいなし続けている。

一夏の、ISのセンスだろう。真面目に訓練したらと思うと、恐ろしい。

驚いたことに、三十分も持ったんだ。善戦と言える。

一夏は、悔しがらうな。ふう……。

「ふん……機体に救われたな、馬鹿者め」

救われたって……千冬さん？

え……モニターの故障か？

新たな姿の白式が、五体満足で煙の中にいるんだが。

「ふあ、ファースト・シフト一次移行！？ あなた、今まで初期設定の機体で戦っていませんでしたの？」

セシリアが驚愕の声を上げる。

対して一夏は、上手く状況が飲み込めず、ただキョトンとしていた。

けれど、一つだけ確かなのは。

（まだ戦える……って事だよな）

銘が加わった近接特化ブレード 《雪片式型》を正中線に構える。

並々ならぬ力が、闘志が、一夏と白式を包んでいく。

(コイツとなら、出来るかもしれない……)

「俺は、世界で最高の姉さんを持ったよ」

(いや、違う。出来るかじゃない。俺がやるんだ。まずは家族  
姉さんの名を )

「俺も、守ってみせる!」

「っ!」

ドンッ。

一夏の意思に呼応するように、白式のバーニアノズルが唸りを上げる。

急速接近する倒したはずの敵機に、セシリアは驚愕の色を見せながらも、大型レーザーライフル《スターライトmk?》を構えて射撃体勢に入った。

おそらく、一撃でも喰らったら、負けだろう。

でも、不思議と恐ろしくはなかった。

一夏が無意識のうちに、笑っているくらい。

迫るエネルギーの奔流。

左方向へ急制動。



即座にロールを打って、次弾を躲す。

脚を思いっきり使い、姿勢制御を補助。

そして、突貫していく。

セシリアの顔色が、みるみる青色の機体に近付いていって。

バーニアを噴かした直後、眼前に二機のビットが飛び込んできた。

多角形機動を行うそれも、今の一夏になら

(見えるっ！)

《雪片式型》を腰に引きつけ。

同時に迫るビット。

横一閃。

一つは撃墜し、慣性に乗って、遙か後方で爆発。

もう一つは、刀を振る動作に合わせた一夏に躲されていた。

振り向きざまに、大上段から。

一刀、両断。

(……そうだ、確か「上下方向には隙が出来る」だっけ)

爆風をいなすと、昨日の講義の内容が一夏の頭を掠める。

接近するにつれ、徐々に回避が困難を極めた。

左右に大きく旋回し、一夏は隙を窺う。

(……あれだ、大型銃を使えば、行ける！)

閃きとともに、真っ直ぐセシリアへ飛び込んでいく。

「じっ、のっ、落ちなさい！」

掠めるビームが空気を振るわせるが、一夏は気にも留めない。

そして。

至近距離で、ビームが煌めいた。

二人の視界が、一瞬白で埋め尽くされ。

一夏は当たりを付け、軽く上方へ移動。

後を追うように、セシリアは一夏へ銃口を向けようと。

一瞬、一夏と銃本体が重なった。

ハイパーセンサーが、セシリアの目を盗んだことを、一夏に伝え。

一夏は思いっきり、セシリアの下方へ潜り込む。

セシリアはほんの数刻　しかし致命的なコンマ数秒、一夏を見失った。

「うおおおおおおおおおおおお！」

「しまっ　！」

降ろす銃口は、間に合わない。

雄叫びとともに。

一夏の切り上げが、大気を切り裂き。

(……………取った！)

逆袈裟払いが、ブルーティアーズの脚を捉え　。

ビイイイイイイイイ……………

斬撃が当たる直前、試合終了のブザーが、第三アリーナに木霊した。

『勝者、セシリア＝オルコット』

アリーナからの帰り道、僕、一夏、篝さんの順で、とぼとぼ歩いてきた。

一夏、絶賛ふてくされ中。

原因は、《雪片式型》ワンオフアビリティの単一仕様能力《零落白夜》は攻撃を行う度に、自身のシールドエネルギーを消費するのだとか。それで一夏の、残り少ないエネルギーが底をついた、それが今日の顛末。

つまり、白式は『近接特化短期決戦型』、という事が。

と言うか、千冬さんもアレだよな。曰く、「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこれが、大馬鹿者」……いや、いくら鬼教官だからって、これは身内に掛ける言葉じゃないだろ。

「……負け犬」

幼馴染みに掛ける言葉でもないだろ！

「……聞いたかステイード。あれは幼馴染みじゃなくて、きっと悪魔の手先なんだ。きっとそうだ」  
「ふう……」

まって、待て待て。

箒さん、見とれるような動作で竹刀を上段に構えて、一体全体どうする気で。。

待つんだ！ 一夏はこっちを向いてるから丁度

バシイイイイイン

頭の後ろは有効打突にはならないよ、箒さん。

可哀想な一夏、涙目。

しかし。痛ぞ。出席簿とどっちが痛いのだろう。一夏に聞いてみるか？ ……いや、酷だろ、いくら何でも。

「まあ、それくらいで。で、一夏」  
「うん？」

立ち直り早。

慣れって恐ろしいな。

それは置いといて。

最優先は、今日の反省だろう。

「……今日の敗因、ちゃんと纏めておいて下さいね」

「……ああ、分かったよ」

「よろしい」

大ざっぱに言えば《雪片式型》の能力を使いこなせていないって事なんだけど。

一夏本人にも、今日の試合は得るものはあっただろうな。

あとは、心。

「と、ところでな一夏」

「うん、どうしたんだ？ 篝」

おお、篝さんが話しかけたぞ。

一夏は驚いてるなあ。あ、僕もか。

「その、なんだ……負けて、悔しいか？」

「……そりゃ、悔しいさ」

「そっか。なら、いい」

……やっぱり幼馴染みなんだな。

冷たいって言うか、厳しい時もあるけど、思いやりの精神かな。

それに、流石は剣道をたしなんだけあって、分かってる。

心の、重要性を。

僕も訓練を受けた時は常に意識していた。

戦場で一番の不確定要素は、人間。それも、精神面である。

彼の合同演習でも、最後のブリーフィングで超有名教官の口から聞いたものだ。

「なあステイード。いいことなのか？」

「ええ、いいことです」

「……??？」

「いずれ、一夏にも分かりますよ。では、僕は一端自室に戻ります」

「そうか、ステイードは教職員室だったな。何でだろ、俺の部屋に来ればいいのに」

「何だと一夏！ 私とでは不服だというのか！」

あ、竹刀再び。

そうか。一夏は箒さんとルームシェアしてるんだった。

……不満なんて呟いたら、罰が当たるぞ。

「いや、そうとは言ってないだろ！　って、ステイード！　笑ってないで助けっ」

「では、夕食で」

「おう……じゃなくて」

「うむ、後ほどな。で、一夏。詳しく聞かせて……」

ギャー、ギャー。

思ったより、一夏が落ち込んでなくて良かったな。それは、安心けど。

セシリアさんは、どう出るかなあ。

明日は、僕が試合だし。

……アードの調整、しておいっ。



005話 全ては『段ボール』の為に！（前書き）

気合いの入りすぎで文章量が二倍になってしまった（笑）

そして。

あれ！ 足りない！

という事で、加筆しましたm（）（）m

深夜はいかな、集中力が……。済みません。

005話 全ては『段ボール』の為に！

なにが、起こったんだ。

「……大丈夫ですか、一夏さん。お怪我は？」

「ああ、大丈夫」

一体、何が起こったんだ！

ふう……。

落ち着け、僕。きっとアードのハーパーセンサーがイかれてるんだ。そうだ。

ちょっと混乱につき状況整理。

今現在、ISを使った授業中である。

けれど、一年生はそう簡単にISは使わせてもらえず、現在は専用機を持っている一夏、セシリアさん、僕で実演飛行をしている。

今はありがたい鬼教官による『急降下&完全停止』の、初心者である一夏にとっては鬼畜としか言えない命令を受け。

案の定、一夏は墜落してグラウンドに大穴を開けていた。

まあ、シールドバリアーのお陰で怪我はないだろうけど。  
で、だ。

セシリアさんが、おかしい。

「一夏さん、飛ぶのはこう、前方に角錐をイメージするんですわ」  
「よろしければ放課後　ISの訓練を、その、二人きりで」

先程の、飛行中の会話。うん、何だろうね。これは。

あれか……ツンの後にデレが来る、あの特性だろうか。

いやこれは、角が取れたところか、球体になって80、1000、  
3500、8000番のヤスリ掛けをした後洗剤で洗って磨いた上  
にコーティングを

『何をしているステイド。早く降りてこい』

あ、っとそつだ。

頭を下に向け、一直線に落下。

急速接近する地面に血の気が引くけど、慣れたもんだ。

ブランコのように脚を振り上げ、バーニアの噴射をグラウンドに叩き付ける。

程なくして、停止。

「ふむ、いいだろう。では次！ 織斑、《雪片》を展開しろ」

そう言えば、セシリアさんはクラス代表を辞退したんだよな。

……あの一昨日は、牛乳を飲まなかっただけなのか。いや、うーん。

最初は一夏に敵意剥き出しだったそうぞ。

昨日の一夏が、男らしく奮闘して。

セシリアさんが、一夏に優しくなった。

……理解。

「おいスネーク！ 今度は貴様の」

シュンッ

「番……よ、よし。いいな……」

……あれ、何時の間にサブマシンガン展開したんだろう。ま、い

いか。

うん？ 千冬さん。目頭抑えて、頭痛ですか？

けど、成る程。道理で篤さんが妙に不機嫌なわけだ。

大変だな、一夏も。

そして、終業のチャイムが鳴り響く。

「スネークさん。今日は試合ですけど、勝たせていただきますわよ」  
セシリアさんから話しかけてくるとは。勝負のこと、忘れてなかつたんだな。

「放課後に、第三アリーナですね」

「……一夏さんに私の勇姿を見せつけねばきつと……え、あ、はい」

セシリアさんは片手を頬に当て、ふう……と溜息を吐く。

なんだ。乙女か。いいけどさ、別に。

……いいこと思い付いた。

「セシリアさん、今日僕が勝ったら『段ボール』の価値を見直して下さいね」

「希望的観測は、外した時にショックが大きいですわよ？」

「で、僕が負けたら」

僕に対しては軟化しないんだな。

いや、これでも結構丸くなったか。

まあそれでも、恋にかまけてセシリアさんが全力を出せないといつ  
まんないし。

昨日出撃前に取っておいて正解だったな。

……よし、餌で釣ろう。

「一夏の写真をあげ……」

「っ！！」

釣れたー！ー！

「わ、分かりました。放課後、第三アリーナに。直ぐ！直ぐです  
わよー！」

「……了解です」

どうしよう。やり過ぎた感がひしひしと伝わってくる。

火に油どころか、爆薬を投下してしまった。

わっ。

「……面白い機体ですわね。まさか、初期設定、ではないでしょうね?」

「大丈夫です。長年の相棒ですよ」

と、言うほど年月は経ってないか。

ここは第三アリーナ上空。

観客席、満員じゃないか。しかも、女ばっか。当たり前だけど。

先生達も、今日は観客席にいるらしい。昨日は一夏の新型が配備されて直ぐだったから、ピットからの観戦になったんだろう。

試合開始のカウントダウンが、始まる。

セシリアさんは相変わらず、腰に手を当てた格好だ。

「では、私が華麗に踊らせて差し上げますわ」

「ステップを外さないよう、気を付けて下さい」

「ふんっ」

……あれ。

僕の機体が壊れたら、一体誰が修理するんだろう。

パーツは? 弾薬は? いや、あるわけないだろはっはっは。





出遅れた分、ペースは完全にセシリアだ。

迂闊に出ると、嵌められる。

セシリアのブルーティアーズは、《スターライトmk?》を撃ち続ける。

幾本のレーザーの槍を避け、躲す。

的確な先読み射撃。

でも、見える。

ハイパーセンサーの情報に加え、自らの第六感センスを頼りに、躍動を続ける。

「怖じ気づいたんですの？ かかってきなさい」

「では、お望み通りっ！」

左腕を伸ばし、意識を送る。

丸みを帯びた装甲版が斜め方向にスライドし、内側からガトリン  
グ砲 《M134改》を出現させる。

セシリアが僅か、距離を取った。

僕はバーニアノズルを噴かし、一斉射を行いながら急接近を試みる。

「くっ」

ブルーティアーズのスカート型装甲が分裂し、四機のビットが繰り出される。

ハイパーセンサーに意識を委ね、心を落ち着けた。

……自分の視点より、一步後ろから、見る。

昂ぶる闘志の所為だろう、段々、世界の動きが緩やかになっていく。

自分の身体を含め、場全体の空気を読み取る。

右上、左後方、真下、右斜め下。

腰から生えた機械的な二本の尻尾を使い、空中姿勢制御の補助をさせる。

各部のノズルを少しずつ噴射させ、機体を無駄なく操る。

脚を振り子のように振り回し、身体をくるくると空中回転させ。

同時に迫る、ビーム。

ビットから放たれるエネルギーは、全て、シールドバリアーの僅かに外を駆け抜けていった。

「なあ箒。ステイード、やばくないか？」  
「……………」

一夏の目には、ステイードが不利なようにしか見えない。  
昨日、セシリアに翻弄された自分と重なって見えた。  
しかし。

「……………違うぞ一夏」

箒は、真剣な眼差しで空を睨んでいる。

剣道の試合は、一瞬で決まる。

いや、正確には攻撃した瞬間から決着まで。

それまでは静かに相手を観察し、読み、平常心を保ち、有利な足運びをしていく。

その極意は、ISと何ら変わる所がない。

「……………特訓だ、一夏」

「へ？」

「いいか、お前も強くなるんだ」

「……そのつもりだよ。コーチ頼むぜ、篝」

「うむ、任された」

一夏と篝は、クラスメイトのダンスを、食い入るように眺めていた。

「……スネーク君、押されてますね」

山田先生がオロオロしながら、二人の試合を見詰めている。

しかし千冬は、踊り狂うステイドを見て、ほくそ笑んでいた。

(相変わらず、面白い戦い方をする)

安全圏から、敵の隙、パターン、弱点を見抜き。

戦いのリズムを自らに引き寄せ。

舞台が整ったら、一気に攻める。

(まるで、狡猾な蛇スネークのように、な)

セシリアの方が一見優勢に見えるが、それは間違い。

ステイードのシールドエネルギーは、まだ少しも削られていない。

逆にセシリアが、徐々に焦りの色を映し始めていた。

「……山田先生、これは、なかなか良いものが見られるかもしれません」

「え、どういう事ですか？」

「動きますよ。彼が」

次の瞬間。

蛇が、食らい付いた。

来た。

ビットの全方位攻撃。

エネルギーの鳥籠に、一点、隙間が現れた。

この機会、逃がすかよ。

イゲンリッシュン・ブースト  
『瞬時加速』

「なっ、速い！」

後部スラスターからのエネルギーを一端取り込み、圧縮して放出する。

背中で小爆発が起きるようなもんだ。

速いに決まってる。

セシリアはライフルを構え直し、僕に狙いを定める。

閃光。

ロールを打って、光の矢をくぐり抜ける。

左腕を突き出し。

撃つ。

軽い反動。

足下を狙われたセシリアは、上昇して放火から逃れる。

弾丸をばらまき、上昇を続けるセシリアを追い立てる。

接近。

「むざむざ飛び込んでっ！ 落ちなさい」

目と鼻の先に、向けられる銃口。

合金の先端が光り出した。

この距離で、音速を超える弾丸は躲せない。

が。

予想道理。

右腕を突き出し。

「そこっ！」

《アンカー》を放った。

蛇のように躍動し、先端がセシリアに襲いかかる。

そして、《スターライトmk?》の側面を。

打った。

銃口が僅かに逸れる。

発射。

右横を、ソニックブームが駆け抜けた。

あつぶな！ すれすれじゃんか。

逸れた銃弾は、果たして 。

ビットを打ち落とす。

「一つつ！」

「何ですって!?!」

爆発の光で輝くセシリアの目が、驚愕に見開かれる。

何とか引き剥がそうとしたのか、セシリアが指令を送った。

「なかなかやりますわね。ですが！ ビット！」

お褒めいただき、光悦至極。

けれど、甘い。

「 挟撃する時は、射線を考えましょう」

空中で、バック転を繰り返す。

「 ふんっ」



「そんな！」

弾丸は僕の腹を掠め、ブルーティアーズのエネルギーシールドへ吸い込まれた。

よろめくセシリア。

そのまま彼女の下をくぐり抜ける。

頭を下に向けた、逆立ち状態。

そのまま右足を振り上げ、回し蹴りを決めた。

「　　っっ！」

見事なまでに背中 of 蒼いバックパックへ決まり、破片が吹き飛ぶ。

体勢を崩したセシリアは銃口を後ろへ向ける、が。

遅い。

逆立ちのまま僕は上昇する。

つまり、一気に高度を下げた。

虚しく空を切るエネルギー。

そしてこれも読み通り、いつの間にか射出されたミサイル誘導型ビットが追従している。

やっぱり一夏との戦闘を見ていた所為で、僕側のアドバンテージは大きいな。

『急降下&完全停止』

今日の授業での機動を、地面すれすれで行う。

軽く地面に手を突き、一気に地を蹴った。

僕を追って曲がりきれなかったビットが、地面に墜落。

爆破。

巻き上げた土埃が、辺り一面を覆い尽くす。

当然僕自身も、煙に紛れてセシリアさんを視認できない。

「出てきなさい！ スネークさん！」

いや、流石にないだろ。

土煙もシールドバリアーが守ってくれるんだよな。喉を痛めないで済む。便利便利。

さて。

仕上げと行きますか。

僕は右手にサブマシンガン 《パトリオット》<sup>オープン</sup>を展開。

本体下部にドラムマガジンが『』のように取り付けられているのが特徴的なサブマシンガン。

いちいちリロードする必要がないから、気に入ってるんだよな。  
で。

僕は黒光りするそれを、大きく振りかぶって。

(ああ、もう！ 失敗でしたわ！)

セシリアは上空でほぞを噛んでいた。

こちらからはステイードを視認できず、何処から飛び出すかわからない。

すかさず上空へ退避し、出来るだけ距離を稼ぐ。

(……ここからなら、十分時間が稼げますわ。さあ、覚悟なさい)

乾いた唇を嘗め、セシリアは心を落ち着かせる。

ここで姿勢を崩せば、ビットでかなりのエネルギーを削れるはず。

高速で、煙が切り裂かれた。

「貰いましたわ！」

勝利の確信とともに、引き金を。

「え、違う!？」

スコープ越しに捉えたのは、黒光りする特異形の銃。

(では? では、スネークさんは何処に?)

直後。

背中に蛇の毒牙を見た。

切り裂かれた煙から、セシリアの位置を確認。

気付かれないようにバーニアを噴かし、射撃姿勢を取るセシリアの背後に回り込む。

静かに、ナイフを抜いた。

銀色の刃が、陽光を反射して煌めく。

あ、気付いたか？

セシリアが、驚愕の表情とともに振り返った。

「はぁぁぁあつ！」

一気に距離を詰め、突きを放つ。

「え、い、《インターセプター》！」

なにっ！ 近接武器もあったのか。

横薙ぎに振るわれるショートソードで、ナイフがはじかれた。

「私に近接武器を使わせるなんて！」

でも、駄目だ。太刀筋が通っていない。明らかに剣に振られている。

「「てやあああああつ」「

雄叫びとともに、刃を叩き付ける。

紅蓮の火花が飛び散った。

ここまでだ。

詰んだよ。

「済みませんが、僕の勝ちです」

強引に振り回される銃を、左腕で押さえつけ。

「は、離しなさい！」

「《アンカー》！」

右腕の装甲から、セシリアの肩越しにワイヤーが射出された。

重力に引かれ、落下する《パトリオット》。

先端のアームが、がっちりと掴み取る。

ワイヤーを巻き取ると同時、セシリアを突き飛ばした。

瞬時に側面へ移動。

姿勢制御を終えたセシリアには、機関銃の銃口が向けられていた。

「チエック・メイトです」

見開かれた、青色の瞳。

バトリオットガトリング  
右手と左腕が唸りを上げる。

直後、勝敗は決した。

試合終了後、帰り道。

一夏と篤さんは、そのままアリーナに残って、特訓に励む様子。

精が出ますなあ。

「か、完敗ですわ……」

「お疲れ様です、セシリアさん」

隣でとぼとぼと。実に悔しそうに、セシリアさんが唸る。

あいや、またしてもやり過ぎた感が。

試合直後、観客席の半数は沸いていた。それは良かった。  
けど。

残りはみんな、「……………うわぁ」て顔してたな。

思い返せば、僕って後ろから蹴りつけて銃乱射しただけじゃ？

うん、自重しよう。今後のために。

そう考えると、目の前で頂垂れるセシリアが可哀想になってきた。

何故だろう。勝利の喜びなんか、みじんも感じられない。

……………。

「……………セシリアさん？」

「……………何ですか？」

やめて、睨まないで。良心の呵責が。

と、言うことだ。

「はい」

僕は『例のブツ』を取り出し、セシリアさんに押しつけた。



呆けるセシリアさんはそれを受け取り、声を上げる。

「え、ちよつと、スネークさん？ 私は負けたんですよ？」

「ええ、ですから『段ボール』への認識は改めて貰います」

「いえそうではなくて！ これは一体……」

「ああ、それは、僕が『落とした』んですよ」

「????？」

「『あげた』のではなく、セシリアさんが『拾った』のです。オ―ケー？」

おお、豆鉄砲を喰らった顔をして。

……ついさっきは鉛玉を喰らってたんだっけ。

これでチャラ！ 後腐れも無し！ うん。大人の対応。

「……そ、その。あ、ありが」

口をつぐんだセシリアさん。

正解だ。僕は落としただけなんだから。

代わりにセシリアは、にっこりと頬笑んで。

「では『ステイド』さん。ごきげんよう！」

「……さようなら」

おろ、若干ランクアップした気がする。

ま、いいか。面白かったし。

……これはスポーツだ。

戦争なんかじゃない。

ヒトゴロシなんかじゃない。

そうだ。

例え、これがヒトゴロシの兵器を使った、ヒトゴロシの訓練であるとしても。

今は。

一夏クラス代表就任パーティー後、自室ではニヤニヤが止まらな  
いセシリアの姿が目撃されたそう。

## 006話 世界史(前書き)

毎日更新に挫折してしまっただ……。

これからタグ通り、不定期になるかも。

努力はしますが、あ、来週一週間は特に、テスト期間なので更新は難しい。

私用でスミマセン(汗)

今回の後半は、MGS知識のない方用に軽く世界観の説明。

面白くないですが、前半にコメディ入れますんでご容赦下さい。

……ここ、今後の展開にかなり重要だったりします^^;

## 006話 世界史

「ステイード君、おはよ。ね、転校生の話、聞いた？」  
「いえ、初耳です」

朝、教室に入るなり女子生徒の一人が話しかけてきた。

この数日間で、女子との会話も徐々に増え始めてきたなあ。一人は寂しいけど、一人で居るのも好きというジレンマ……。それは置いて。

「中国の代表候補生なんだって。興味ある？」

「ある、と言えはありますが。戦いたくはありませんね」

「どうして？」

コロニーの全員が首をかしげる。小動物みたいだな……。こほん。

どうして、って。僕は肩をすくめて口を開く。

「ちょっとワケありで、専用機の弾薬が手に入らないんですよ」

「そっかあ、そうなんだ。だから節約？」

「頑張つてね！ 応援してるよ！」

笑顔を浮かべる皆に礼を言って、後ろにある自分の席へと向かう。

いいな、こんな雰囲気も。暖かさがあって。

本当のことを教えるわけにはいかないので言葉を濁したけど。

どうするかなあ……。千冬さんに相談してみるか……。

とそこへ、一夏がやって来た。欠伸をかみ殺して、実に眠そうに。

「よう。ステイード……。ふあああああ」

「おはようございます。寝不足ですか？」

「……疲れが溜まってきた気がする」

「……お互いですね」

二人同時に、深い溜息を吐く。

周りは女子ばかり。それ故、気を遣うことも多い。女心は、未だに良く分かんない。いや、この歳で理解できてたら怖いのかな。同じように、女子側も僕らの考えてることが分からないのだろう。それも四六時中。正直、キツイ。

「どうした二人とも。辛気臭い顔をして」

「おはようございます、一夏さん、ステイードさん」

篤さんとセシリアさんが揃ってやって来た。

肩を並べて、仲良くなったのかな？

……いや、そんなはず無いか。二人の間に火花が散ってる。飛び火しないうちに逃げ出したい。そうしたい。

そして、そこに気付かない、空気を読まないのが一夏クオリティなんだよな。はあ。

「なあ、やっぱりクラス代表はステイードの方が……」  
「今更何を言ってるんですか」  
「そうですね！ 責任感を持って頂かないと困ります」  
「一度決まったことだろう。やり通さなくて何が男だ」

集中砲火に、たじろく一夏。

セシリアさんは辞退し、僕は補給の目処が立たない。

それに、そう気を張らなくても良いはずだ。

「大丈夫ですよ一夏。各クラスでも、専用機を持っているのは僕ら一組と四組だけ」  
「その情報、古いよ」

ん？ 教室の出入り口から声が聞こえた。

見ると、黒髪をツインテールに纏めた小柄な少女が、腕を組んで近付いてくる。

誰だ？ 首をかしげていると、隣で一夏が声を上げた。

「お前、鈴か？」

「そう。中国代表候補生、フアン・ジュンイン凰鈴音よ」

ふっ、と小さく笑みを零す姿が格好いい。

が。

「何格好付けてるんだ？ 全然似合わないぞ」

「んなつ、なんて事言うのよ、アンタは！」

微笑みながら一夏がからかうと、鈴音さんは微笑を崩して食って掛かる。

一転して、子供っぽいな。でも、そっちの方があってる気がする。初対面だから分らんけど。

そして、鈴音さんは僕の方に向き直った。

どうしたんだ？ 飴は持ってないぞ？

「……その失礼なこと考えてるアンタ……」

……IS学園に入学した女子には全員『読心術』スキルが加わるんだろうか。

要らない。少なくとも、僕と一夏にとっては要らない。

「ステイードゥスネークね。名前以外、写真すら公開されていない謎の人物。ふーん……ちよっと、こっち来て」「な、何なんです？」

引っ張るな、袖が伸びる。

鈴は無表情のまま教室の隅へ僕を連れて行くと、人差し指を立てて合図をした。「耳を貸せ」ってことか？

(……聞きたいことあるんだけど。一夏の周りの女。誰?)

……………ああ。

その言ひごと。

(ポニーテールの方が篠ノ之箒さん。金髪の方が、セシリア＝オルコットさんです。ちなみに……………)

(……………?)

ちょっと間を置く。

鎌掛けだ。だって、食いつき方が尋常じゃない。

(……………二人とも、一夏に脈アリです)

り、鈴音さんから黒いオーラが!!

ゆらり、と立ち上がる姿が恐ろしい。前髪で表情が見えん。見ない方が良いのか？

「……………そう、わかった。ありがとう」

「ど、どういたしまして……………?」

「ああ、それと」

振り返って、ビシッと指を突きつける鈴音さん。



おいおい、人を指さしちゃ駄目なんだぞ。特に、いろんな国の人が集まるES学園では。ま、僕は気にしないけど。

「アンタの日本語、変よ」

ザシュツ。

こ、心が。紙細工のように繊細な心が抉れた！

「そ、それは……」

「見た目と話し方が合っていないわ。直した方が良いよ」

ドス、ドシュツ、グサアツ。

言うだけ言うと、鈴音さんは一夏達の元へ、相変わらず漆黒のオリヲを放ちながら去っていった。殺気を向けられた三人の表情が引き攣っているのは言うまでもない。

「……ご指摘、ありがとうございます……」

言葉が実体を持ってたら僕は今串刺し状態で、お茶の間には流せない凄惨な姿になってただろう。

分かってる。薄々気付いてたんだ。だってクラスメイトの噂話でも若干指摘されてたようだし……あ、誤解を招きそうだが、聞こえちゃっただけだ。断じて盗み聞きではない。

「……一夏ッ！ この二人とはどうい関係よ！」

「そう言えば、初対面だったな。こつちが……」

「貴様こそ一夏とどういう関係なんだ！」

「そうですね。説明を要求します！」

「……え、いやだから、その」

何やら騒がしいが。今は思考中なので放置。

それにこの間、千冬さんにも言われたしなあ。あれ？ あの時がさつな方が良いつて言ってたよな。でも、日本語でつてなると……難しい。

「私はイギリスの代表候補生、セシリア＝オルコットですね。一夏さんの特別コーチですよ！」

はらり……。

腰に手を当てて張り合うセシリアは、制服が机に引っ掛かった所為で、ポケットから何かを落としたようだ。

おかしいな。嫌な予感がひしひしと。

「あれ？ セシリア。何か落としたぞ」

「え、あああああつ！」

「「何で一夏の写真をセシリアが持つてるのだ（よ）！」」

冷や汗が止まらない。

緊急事態！ 緊急事態！

はっ！ こんな所に『段ボール』が。神のご加護か！

手早く組み立て、すっぱりと被る。

……ああ、落ち着く。

「えええええええ！」

「織斑君の写真!?!」

「クラスパーティーのは、まだ現像できていないはずよ」  
「何でセシリアが!?!」

クラス中が騒然と化した。

皆の絶叫が、『段ボール』越しにくぐもって聞こえる。

「ほんとだ。この写真、俺が白式を装備してる時のじゃんか。なら、あの時携帯で撮った……」

い、一夏！ 駄目だ、話しちゃ駄目だ！

そこに、篝さんがトドメを刺した。

「す、ステイードしかない!」

『!』プルアアアアアン!!!

「みんな！ その『段ボール』の中身を引つ捕らえなさい！！」  
「「「「「「ラジャー！！！！！！！！！！」」」」」

「何故バレたっ！！？」

『段ボール』を投げ飛ばし、全速力で駆け出す。

もう少し紙の匂いに包まれて癒されたかったけど、仕方ない。振り返ったら、女子全員目をランランと輝かせ、襲いかかってきている。

ハーレム？ 馬鹿言っな。これは一種のホラーだよ。

幸い、篤さんと鈴音さんが騒いでくれたお陰で、皆窓際後ろの隅に群がっていた。脱出ポイントは、前方の出入り口。

「皆の衆、出会え出会え！」

「第一目標、ステイド君の携帯。第二目標、捉えたステイド君の撮影会！」

「織斑君ver・IS装備なんて、マニアが泣いて欲しがるお宝よ！」

マニアなんているのか。もういつそストーカーと言ってあげようよ。清々しく。

僕は走るが、男子の足と女子の足だ。当然、逃げ切れる。

一気に電子黒板まで走り抜け、教卓で右折。

よし、外に出れば、逃げるなり隠れるなり自由度が高い。助かつ

た。

地を蹴って、開け放しだったドアをくぐる。

が。

驚天動地。

周章狼狽。

修羅が、出席簿を構えて仁王立ちしていた。

突然だが、ここで物理の話をしよう。

例えば、 $A$   $\text{km/h}$ で走る車と $B$   $\text{km/h}$ で走る車が、正面衝突したとする。

その時、それぞれの車は $(A+B)$   $\text{km/h}$ 分の衝撃を受ける計算になる。



文字道理、教室の中に叩き込まれました。もんどり打って、仰向けに倒れたらしい。

額が、鼻が！ 焼けるように痛いいいいいいいいい！

うあ、どろっとしたものが鼻から……。

そしてクラス内は阿鼻叫喚。

「きゃああああああ！ ステイド君が大変なことに！」

「え、衛生兵、衛生兵！！」

「見て！ は、鼻血が出てるわ！」

「そんな……。じゃあ誰が……」

「『人工呼吸』するの！！！？」

止血をして下さい。

薄れ行く意識の中、健気にも突っ込みを入れる僕だった。

「では、今から世界史……近代の講義を始める。IS登場までの世界の流れだ。重要な点もある、しっかり聞くように」

結論から言うと、僕は気絶しなかった。

いや、正確には「気絶しかけたら三国志の英雄に叩き起こされた」……どんだけえげつないんだ？

なので、ノートを取りつつ片手で鼻を押さえて授業を聞いている。

心配してくれるクラスメイトに軽く手を振ると、皆安心したのか、千冬さんの授業だからか、全員前を向いて集中する。そう言う辺り、しっかり『調教』されてるな……恐るべし『ブリュンヒルデ』。

「アメリカとソ連の冷戦、ベトナム戦争、湾岸戦争を経て、世界は秩序を取り戻した。しかしそれが乱れだしたのは、2009年に起こったテロ事件、『ビッグシエル事件』だ」

その話なら、知っている。

マンハッタン沖、タンカーが爆破した事によって原油が流出した。それを除去するため、巨大汚染除去施設『ビッグシエル』が建てられた。



しかし、その施設はテロリストによって占拠された。

視察に来ていた大統領や政府要人を人質にとり、ビッグシエルを爆破すると脅迫。300億ドルを要求した。アメリカの特殊部隊が潜入、鎮圧したとされている。

「ここで問題になったのが、核弾頭と水素爆弾の存在だ。真偽は不明だが、これによって生じた不審、世論の反発で、アメリカ正規軍が海外へ遠征することが難しくなった。そこで、PMC 民間軍事会社に代理戦争をさせるようになったのだ。重要なのは、『SOPシステム』だ。では篠ノ之、これはどういうものか、説明してみろ」

「……………さっきの女子は何なのだ……………放課後の特訓で何とか一夏の気を……………」

バシィッ！

千冬さんの授業で他事とか、自殺行為だろうか？ もちろん、他の時でも駄目だが、こっちは暴力的制裁が待ってるからな。生命の維持に関わる。

「私の授業で上の空か……………良い度胸だな、篠ノ之」  
「……………済みません」

そして再度『SOPシステム』とは何か、問う。

篤さんはしばらく考え込み、口を開いた。

「『SOPシステム』とは、当時の軍隊に採用されていた戦場管理システムです。兵士の体内にナノマシンを注入し、個人の識別、体調管理、的確な指令を行うものです」

「よし、いいだろう」

ホツとした様子で、篤さんは椅子に着地した。

『SOPシステム』とは、正規軍、PMC全ての兵士に入れたナノマシンからの情報を中央に集め、データ処理するというもの。個人のIDが無いとプロテクトが掛かる銃器に始まり、体温、血圧、血糖値、脳波、心拍数、血中酸素濃度……等々を解析する。時には戦場で発生する恐怖心を抑制し、小隊間で五感の疎通も出来るようになる、画期的なシステム。……だと思われた。

「PMCは各自で兵士の訓練、傭兵派遣、武器の調達、その全てを利益に変えていた。先程も言ったように、これはアメリカの代理戦争だ。民間軍事企業と資本家による、戦争による経済効果。俗に言う、『戦争経済』が成り立っていた。戦争を金儲けとして利用する。それがこの時代だった」

VRシステムの普及によって、子供達はゲーム感覚で戦争ごっこをし。いつの間にか本物の戦場で、人殺しの武器を抱えている。人を殺してもナノマシンの抑制で罪悪感も感じることはなく、ただただ他国の経済利潤のために戦争をする。

……そう考えると、ゾツとしないな。

「そしてここでも、武装蜂起が起こった。五つの大手PMCを裏で纏め上げる母会社　アウトターヘブン。ここが中央の管制システムを乗っ取り、世界を支配しようとしたのだ。一時的にシステムは掌

握されるも、潜入工作員によってシステム自体を破壊、解放した。世界征服を免れたが、ここでもでたしめでたし、とはいかない。『SOPシステム』がダウンした所為で兵士を恐怖、罪悪感が襲い、PTSD（心的外傷後ストレス障害）を発症する者が多発した」

これに加え、アメリカは多額の負債を抱えた。因果応報、と言うやつだろう。

この借金が後々、米国のIS研究に影響を与えたらしい。

IS、と言えば、ここで重要な点があるはずだ。

「この2014年頃には、総配備数が戦車を上回った兵器が存在するが。それは何か。オルコット、答えろ」

「……ISの模擬戦だけでは足りませんわ……もっとう、決定打になる……デートに誘う？ いえ、それよりも……」

三、二、一。

バシィン！

ふわふわブロンドの髪が、圧縮された。

……慣れてないんだな。セシリアさん涙目。

「『SOPシステム』が導入された頃、戦車に変わって台頭した兵

器は何だ？」

「……二足歩行戦車、『月光』ですわ。白兵戦や市街戦闘で投入されたらしいです。特徴的なのは二足歩行ユニットで、有蹄類ゆうていりゆういの胚性幹細胞　ES細胞を遺伝子操作したものによって形成されていますわ。広い可動範囲で、それまでの兵器にない生物的な運動をし、高い汎用性を持っています。この姿勢制御プログラムが、私たちが乗るISに応用されていますわ」

「いいだろう。座れ」

容姿としては、金属で出来た箱から、二本の逆関節の脚が伸びている、という感じ。鳥類の脚に肉付けしたみたいだ。もちろん金属ではなく細胞で出来ているので良く動く。どれくらいかというのと、跳躍したり、壁に脚を突き刺して上ったり出来るほどらしい。

補足説明すると、有蹄類とは、哺乳類の中でも蹄せうていを持った動物。具体的には、牛とか馬だな。

ES細胞は、理論上全ての細胞に分化できる、細胞の根源だ。その性質を使って、再生医療への応用に注目されている。

その姿勢制御システムが、僕たちのISに使われている。と言っても、戦闘は主に空中だから、あくまで「その一つを担った」だけだが。そんな『月光』も、研究対象はISに取って代わられ、かなりマイナーな兵器となりつつある。

「国際連合安全保障理事会の補助機関、PMC活動監視監査委員会と言うものがあつたが、これは今IS開発監視監査委員会に引き継がれた。そうそう、特殊部隊の女性隊員の一人がこの機関に所属している。名は確か、メリル・シルバーバーグだったか……これはテストには出さん。……と、もう時間だな。よし、これで終わる」

起立、礼、着席を終えると、千冬さんはさっさと出ていった。その後ろを、山田先生が「ま、待って下さい」と、眼鏡がずれたまま追っていく。大丈夫なのかな？

あ、いつの間にか鼻血、止まっていた。

006話 世界史(後書き)

メタルギアに詳しい方、解釈に違和感、根本的に間違ってる点がありましたら、感想にてご指摘下さい。

作者自身、超不安です。

お手数掛けますが、よろしくですm┐┐m

007話 簿・鈴の現代高校生用日本語講習(前書き)

テスト期間中に投稿! ……何やってんだ。

ああ、世界史氏にましたよ。

ナポレオン? 何それ美味しいの?

では、どうぞ^^

007話 幕・鈴の現代高校生用日本語講習

「今日こそステイド君のマル秘情報を聞き出すのよ！」

「了解！！」「」「」「」

……おい、何も男子用トイレの前まで張り込まなくても良いだろ。

昼休み、僕は来賓用男子トイレの前で立ち往生していた。いや、それは正確じゃないな。『段ボール』に隠れている、の方が正しい。

何故か。

女子の追跡から逃れるために決まっている。

一夏はここまで酷くないんだがな。原因は、まあ僕なだけけど。

転校してから今まで、僕は個人情報をほとんど語ってない。ずっと研究所暮らしだったなんて怪しくて言えないし、家族構成も義母が『あの人』だったって事も右に同じ。ましてや、「ヒトゴロシの道具」として育てられたなんて、口が裂けても言えん。

趣味だってそつだ。IS弄りと『段ボール』愛撫なんて、普通すぎるだろ。うん、普通すぎるんだよ。

交友関係や出身国も、調べても出てくるはずがない。出てきたら、まず先に僕が知ってる。

「ステイド君はこの近くにいますよ！ 見つけたら、直ぐに応援を呼んで！」



「わかったわ」  
「まっかせて！」

そのはぐらかす対応を、噂好きの女子達は「隠している」と取っ  
たらしい。教師 特に千冬さんの目がある所では大丈夫だが、人  
気のないところで捕まえようとしている。

全く以て迷惑な話だが、転入当初から基本隠れて行動してきた僕  
である。潜入訓練 隠れることが得意だったから、やたらと複雑  
な構造をしているIS学園で、それを遺憾なく発揮した。人見知り  
癖も、原因の一端なんだろう。深く、反省している。

後には退けなくなったので、このまま続けるが。

さて。

ポケットからシャー芯ケースほどの、長方形型リモコンを出して  
『再生ボタン』を押す。

『見つけたっ！ こっちよ！』

「西側の階段からよ！」

「急いで、逃げ足は速いんだから！」

タタタタタタタッ……

『段ボール』を僅かに持ち上げ、左右を確認。人影無し。

音を立てないように、男子トイレに滑り込んだ。

「……ふう」

胸ポケットにリモコンをしまう。

これは、携帯音楽プレーヤー用の赤外線リモコン。本体を廊下の壁にある隙間に貼り付けてきたんだが。こんなに上手くいくとは。ちなみに、先程の音声はとあるドラマから貰ってきた。タイトルは忘れた。ハッキリ言って、どうでもいい。

「トイレに来るのすらままならないとは……自室が教職員用の寮でなかったら、どうなってたか」

ぼやきつつ当初の目的を果たし、手を洗う。目の前の鏡が、僕の顔を映した。

やっぱり話し方がおかしいのか……誰かに指導して貰うしかないな。と、のんびりしている暇はない。昼ご飯を食べ損ねる。

まずは、壁に背を預けて『音』を聞く。……足音、無し。

次いで、顔だけ出し、目視確認。……チェック。

最後に、目標『段ボール』に向けてダッシュ。……擬態完了。

そしてそのまま、ズリズリと西階段に……。

「鈴、こちらに向かってきたと言っ情報は確かなんだな」  
「さっき新聞部の子達が騒いでたわ。間違いない」

上の階から話し声…… 篤さんと鈴音さんか！

慌てて、しかし物音を立てないよう、階段の脇に積んである『段ボール』に並んで隠れる。こうすれば、大抵の人は気付かない。しかし、嫌なタイミングで会ったなあ。

二人分の足が僕と同じ床を叩いた。

じっと、息を殺す。

「居ないでは……いや、人の“気”がある」

篤さん、あんた何者！？

「了解、ちよつと待って……」

背筋を冷たいものが走るが、大丈夫。そう簡単に見つかるわけ

ガバツ！

あれ、おかしいな。急に視界が明るく。

満面の笑みを浮かべる悪魔×2。

最近、人外生物との遭遇率がインフレーションを起こしているらしい。気を付けなければ。うん。

「「ミーツケタ」」

ぎゃあああああああ!!!

くっ、女の子相手では気が引けるが、クローズ・クォーターズ・コンバット CQC 近接格闘術で逃げ切るしかない。それしかない!

「つつかまーえたっ!」

「ぐえっ!」

抵抗する前に、のど元を掴まれた。壁に叩き付けられる。

ちよっ、何で。何で鈴音さんの腕が二回り太く……あ、ISの部  
分展開! 校内では禁止だろ!

「……女にはね、意地でも退けない事ってあるのよ」

「観念するんだステイド。何故セシリアが一夏の写真を持っていたのか、説明して貰おうか」

「な、何のことがさっぱり」

「……女子達を呼ぶぞ」

「済みませんでした勘弁して下さい話しますから離して下さいします」

僕、弱……。

解放され、思いっきり咳き込む。最後の抵抗として睨み付けてみた。少しくらい罪悪感を抱いて貰わないとやってられ……逆に睨み返された。なんと言うことだ。

「……話しますが、一つ質問しても?」

「なに？」

「何故、『段ボール』に隠れてると解ったんです？」

教室での騒ぎの時も、今も。この擬態で何人もの正規軍兵士を欺いてきたんだ。そう簡単に見破られるわけないのに。一体どんな方法で？ 赤外線ゴーグルも熱探知もしてないようだし。

だが、意外にあっさりとは答えは返ってきた。当たり前、と言った様子で。

「そんなの、アレしかないじゃない」

「????？」

「オナナのカンよ」

「……………」

恋愛事が絡んだ女子の警戒レベルを三ぐらい引き上げよう。そうしよう。

嘆息する、僕であった。

「……と、言うわけです」  
「ふーん、セシリアと戦って」  
「満足したから、こっそり写真を渡した、と」

あその後、僕たちは校舎の屋上で車座になって話し込んでいた。

一通り写真を渡した経緯を話すと、二人は黙り込んでしまう。ちなみに今現在、セシリアは査問委員会に出頭させられているそうだ。何のだ、何の。

僕はおにぎりを頬張りながら、眼を細めて空を見上げる。

……ああ、米って美味しい。

鳥が緩いバンクを取って降下していく。平和だなあ。

「なら、私たちと写真を賭けて決闘しろ（なさい）！」

地上は物騒だな。相変わらず。

でも、戦闘か。出来ればアードの消耗は避けたいんだよね……。かといって、二人とも引き下がりそうにないし。何か他に、頼みたいことは……。

あ、良いこと思い付いた。

「えっと、二人とも日本に住んでた事ってありますよね」

「無論、私は生粋の日本人だ」

「私は小五から中二までしか居なかったけど？」

「十分です」

うんうんと頷く僕。

さて、これで気掛かりは解消しそうだ。無駄な弾薬を使わず、平和的に解決できる。

「僕に、現代男子高校生用の日本語を教えてくださいませんか」

「「?????」」

「え、つとですね。IS学園に転校してから、“見た目と話し方が合っていない”と指摘されることが多々ありましたね」

「あー、成る程ね。それくらい、おやすいご用よ」

「いいだろう。報酬は写真で良いか？」

「もちろんです」

篝さんと鈴音さんは「納得」と頷く。

………そんなに、おかしかつたんだろうか。気になる。いや、気付いてしまったら傷つくだろうか。脳内で危険信号アラートが鳴ってる。………聞かないでおこう。

残りのご飯を、一気に咀嚼する。

「………では、放課後に。あ、写真は前払いで良いですよ。どうぞ」

二人に一夏の写真を差し出すと、キョトンとした表情を向けられた。

生徒手帳から取り出した二枚は、実は一夏と篤さんに渡すためにプリントしたもの。一夏とは約束してたし、篤さんは撮った時ソワソワしてたから。

二人は写真を受け取り。

「」「………」

頬を朱に染めて放心状態。

……和む。

「……ん、んっ！　そ、それよ！」  
「どうしました!？」

なんだなんだ。変なことしただろうか。

「『写真は前払いで良いですよ』じゃなく!」

え、もう講習開始!？

鈴音さんは眉をひそめて考え込む。写真はハンカチに包んで胸ポケットに入れていたが。明日には全校生徒に知れ渡って、写真も出



回るかも……。一夏、ゴメン。

と、鈴音さんがビシッと、と指を突きつけてくる。

「『ブツ』は先に渡しておく。何、礼は要らん。見返りがありやあな』でしょ！」

何時の時代の悪役だ！

それも、前後半の二話に分けて極悪人を演じたにも拘わらず、部下が設立たずでラスト十分にあっさり捕まる人員に恵まれないタイプの、哀れに思えてくる犯人だ。

と、そこに篤さんが割ってはいる。

「いや、鈴。『この写真は前払いだが……何？ 礼、だと？ ……ふっ、そんなものはいい。代わりと言っては何だが、拙者に日本の語学を……』」

「何でそんな時代劇風なのよ!？」

どっちもどっちだな。昭和の悪役と、江戸の武士との違い……大きい。だがしかし、現代の日本語を頼んだはずなんだが……。

臨時講師二名の口論は白熱している模様。

「だから、もつとこう、『どーん』という感じでだな」

「何故擬音語!? だったら『この写真はそう安くない』みたいな入れた方が」

「む。それならば『希少な写真、特別に』の方が良くないか？」

「うーん、今時の高校生なら『超』『レア』じゃ？」

「『激』を入れるのも良いな。では、後半はどうする」「キザっぽすぎたわね。『欲しいのならやらん』こともない」とかは？」

「それはツンデレというものだ。ならば……」

ギヤー、ギヤー。

どうしよう……そこはかたなく不安。

で。

「……何かが間違ってる気がするんですが……。本当に言つのですか？」

「無論だ」

「大丈夫よ」

ふう……。

いや、溜息だつて吐きたくなるぞ。

今の心境を率直に表すと、こうなる。

どうしてこうなった!?

「さあ、早く」

二人は真剣な眼差しで僕を見詰めている。

仕方がない。

慣れない言葉遣いは、緊張するな。

僕は、息を吸って。

顔に、満面の笑みを浮かべながら。

「超 激レア『織斑一夏プロマイドver. IS』を特別に授けよう！ まさかのタダ！ 代わりに、俺っちに日本語を教えてください！ 放課後、待ってるぜ！」

「「ないわ」」

「アンタらが言わせたんだっ！」

なんだこれは。新手の虐めなのか。とにかく、酷いな。「誰これ別人？」って思っちゃうくらい悲惨だな。

「……人に教えるのって、難しいわね」  
「うむ……」

……あれ。講師選択、ミスった？

沈黙が降りる。

と。

「ああつ、そうだ！」

「どうしました、鈴音さん」

急に声を上げる彼女。良いことでも思い付いたんだろうか。

先程までの沈んだ表情とは打って変わって、生き生きとしている。

「私、日本に転校する前、映画を見たのよ」

「何故です？」

「日本語の感覚を取り戻すためよ。で、深夜にやってたB級映画を録画したんだけど。それが面白くてね。アンタが面白いと思うか分からないけど、主人公が中々男前だったわ」

「ふむ、成る程。言い回しの参考にはなるかもしれないな」

そうか、その手があったか。

上手くはぐらかされた……ような気もするが。一度モデルを参考に  
にするのも、良いかもしれない。

「たぶん私のBlue-rayプレイヤーに入っただけだから、機械

「ごと貸すよ」

「では、お言葉に甘えて」

ありがたい限りだ。生憎持ち物は、携帯と音楽プレーヤーくらいだし。

お金とかの最低限の生活用品は『あの人』から貰っているけど、持っていないものも、当然あるわけで。

「じゃ、放課後一組で待ってて。持っていくから」

「済みません、わざわざ」

「良いつて。……写真、貰ったしね。あ、次は千冬さんの授業だしじゃ、二人とも」

鈴音さんは慌てて校舎へと飛び込んでいった。時計を見ると、本当だ。そろそろ良い時間である。

「僕たちも行きましょうか。……篝さん？」

「む、その、なんだ。済まない。力になれなくて」

振り返ると、肩を落とす篝さんの姿が。写真を貰ったは良いが、何も出来なかったことに後ろめたさを感じているんだろう。気にしなくてもいいのに。

でも、そこが篝さんの良い所でもあって。

僕は、微笑みながら声を掛けた。

「では、明日から日本語のチェックをして下さい。変な所があれば、ご指摘、お願いします」

「……そうか。分かった、任せる」

僅かに自信を取り戻した篤さんを引き連れ、僕も屋上を後にした。

「おっ。ステイード！ コレ！」

SHRが終わり、一夏達と談笑を初めて直ぐ。出入口付近から掛けられた声に、僕は振り向く。誰か確認すると、僕はそちらへ歩を進める。

「……早かったですね。寮との往復でしたでしょう？」

「貸し借りは、あまり引き延ばしたくないからね」

「それもそうですね。では、早速見てみます。ありがとございまして」

鈴音さんに礼を言い、一夏達に別れを告げると、僕はいそいそと自室に戻るのだった。

『さて……一夏っ！ この二人との関係、説明しなさいよ！』  
『うおっ！』

『そ、そうだぞ一夏』

『説明を！ 納得のいくご説明を！』

『いや、うん。……えー、鈴と俺は幼馴染みなんだ』

『幼馴染みは私だろう！』

『あー、そうだったな。筭が引つ越したのは小四の終わりだろ？

鈴が転校してきたのは小五の頭だよ。で、中二の終わりに国に帰ったから、合つのは一年ぶりだな。で、鈴。こっちが筭。ほら、前に話した剣術道場の娘』

『一夏が通つてた道場ね。ふーん……。初めまして。これからよろしくね』

『ああ、こちらこそ』

『私の存在を忘れて貰っては困りますわ、凰鈴音さん』

『……誰？』

『んなつ！ イギリスの代表候補生、セシリア＝オルコットですよ！』

『私、他の国とか興味ないから。そんなことより、一夏！』

『……そ、そんなこと、って……』

『ところでさ、約束って覚えてる？』

『どうした藪から棒に……。あ、あれか！ 鈴の料理の腕が上がつたら毎日酢豚を』

『そっつ、それ！』

『……っ！……』

『奢ってくれる、ってやつか？』

『……』

『そうだ。鈴が毎日俺にご馳走してくれるって約束してたな。いや

「俺の記憶力の良さに感心」

バシイーン!

「んな、何するんだリ……」

「最ッ低! 女の子との約束すら覚えて無いなんて、男の風上にも置けないわ! 犬に噛まれて死ねっ!」

「ちよっ、待てよ鈴……。行っちゃった……。なあ、今のって俺が悪  
いん」

「馬に蹴られて死ね」

「猫に引っ搔かれて死ぬと良いですわ」

「……………助けてくれ、ステイード」

僕は直帰し、夕飯も自室で取りながら映画鑑賞にふけていた。

「……………」

ふむふむ。アメリカのマンハッタンが囚人施設になった話だな。  
マンハッタンって『ビッグシエル事件』があった場所だな。





「……侵入者撃退、障壁を降ろします。これで今夜中は、何処からもアクセスできません」

「上出来です。お疲れ様でした」

IS学園地下五十メートルに隠された、アクセス権限レベル4以上の者しか入れない、データ管理室。薄暗いここには現在、複数の教師陣がコンソールに目を走らせていた。キーボード上を各々の指がめぐるしく走り回り、配線が剥き出しになっている室内でリズムを刻んでいた。もっとも、女性達の目は僅か血走っており、音楽的な所感を抱く暇はないようだが。

そして、約一時間の 女性には特に貴重な睡眠時間を削った『戦い』は、中央で指揮を執っていた千冬の一声で幕を閉じた。一気に緊張がほぐれたのか、教師達は目頭を揉んだり、肩を回したり、伸びをしたりと、筋肉の緊張も取っている。

千冬も備え付けの椅子に腰を落ち着けると、深く、深く溜息を吐いた。

「お疲れ様でした。織斑先生」

「いえ、山田先生こそ」

「しかし……。IS学園のシステムがハッキングを受けたのって、随分久しぶりですよね」

深夜二時。職員達が地下深くに潜っていたのは、まさにその所為である。

IS学園のシステム 主に生徒のデータに向けたハッキング。

ISが発表され、某A国に押しつけられるような形で設立された

IS学園には、開校当初から世界各国の企業、研究機関の代表候補生を抱えていた。IS学園は、何処の国にも属さない、言わば世界地図の無色透明の部分。本来、ISの技術は開発と同時に発表することが義務づけられている。しかし、この生徒である限り、その義務は生じない。開発した技術を、敵企業に明かすことなく稼働データを集められるのだ。

そして、その稼働データが蓄積されているのは、紛れもなくIS学園の中央システム。

各国の先進技術の宝庫だ。当然、様々な方向からのハッキングは予測されていた。そして、相次ぐウィルス、プログラムを、この迎撃システムが木っ端微塵に玉砕してきた。当初は数多の企業だったが、果てはISに興味がなく、プログラムに進入することが生きたが、甲斐の天才ハッカーまで現れる始末。だが、その全てを防いできた。今はもう、「進入を試みることにすらバカバカしい」という風潮にまでなっているほど。

が。ここにきての、ハッキング。

(……学園の中央に進入するのは不可能と断言していい。それでも教えてやって来た……愉快犯、とは思えんな)

敵の目的は、アレしかない。

(一年の代表候補生か、一夏、スネークの稼働データだろう。今年には専用機の数が多い。リスクとリターンを天秤に掛けた結果、か)

如何せん後味は悪いが、用心に越したことはないだろう。千冬は腰を上げ、欠伸を連発する同僚達に声を掛ける。

「聞いて下さい。この度のハッキング、おそらく一年の専用機の稼働データでしょう。逆探査を逃れる手練れであるのも加え、用心に越したことはありません。明日から校舎の見回りの人員を一部、こちらに回します。警戒を怠らないで下さい」  
「……分かりました」「」

一同、揃って返事を返す。

千冬が彼女らの上司、と言うわけではない。ただ、『あの』織斑千冬、と皆慕っているのである。最強の異名を勝ち取り、冷静沈着、才色兼備。憧れて当然の人物である。

……悲しいかな、本人は特に気にした様子はないが。

「では、夜も遅いですし、担当の先生以外は引き上げましょう。お疲れ様でした」

地上への直通エレベーターに集まる女性達の背中を見詰める。

その時、上手く言い表せない、得体の知れない不安を、千冬は抱いていた。

007話 第・鈴の現代高校生用日本語講習（後書き）

映画は「ニューヨーク1997」です。

メタルギアのスネークは、この映画の主人公をモデルにしたとか。

ちなみに、作者は見たことありません（オイ

you tubeでチラ見ただけだったりします……。

ちなみに、『あの人』は二人いたりします。

一人は義母。もう一人は……。

008話 再会(前書き)

スネーク、行きまーす！

## 008話 再会

「……あー。ぼ……いや、俺はスネークです。じゃない。俺はスネークだ。……」

早朝。洗面所の鏡の前で、僕はかれこれ二時間くらい睨めっこをしている。

昨夜の映画を見た結果、早速キャラチェンジを思い立ったのだ。なので特訓中。しかし……難しいな。習慣を変えるって。

あれ？

「『です』、『ます』を取ればあの主人公みたいになれるんじゃない……」

……おお。

何故こんな簡単なことに気付かなかったんだ！ 灯台もと暗しとはこのことか！ ……馬鹿なだけだったか。

「よし……うん？ もう七時か。朝食を食べなければ」

軽く前髪を整え、僕は……俺は食堂へ向かった。

「よし、一夏」

「お、おう……？」

片手をあげてフランクに声を掛けると、白魚をほぐしていた一夏は目を見張る。

おかしいのか。分からん……聞いてしまえ。聞くは一時の恥、だ。

「……昨夜に映画を見てな。ちょっと変えてみたんだが……。変か？」

「いやいや、良いと思うぞ。男らしくなったんじゃないか」

「そうか、感謝する」

とりあえず、ホツとする。でも、俺、か。改めて考えると気恥ずかしいな。だが、一夏が良いと言ったんだ。信じるでしょう。

あ、一番忘れちゃいけないことが。それを思うと、胸がキリキリ痛む。実に申し訳ないので、ここでケジメを付けよう。

僕は居住まいを正すと、頭を下げた。

「一夏、スマン」

「ど、どうしたステイード!?!」

キョドリっぱなしの一夏だが、これだけは言わなければならない。

「俺の行動で一夏の写真が出回ってしまって……ゴメン」

あの後セシリアに聞いたら、写真を写メられてしまったそうだ。

己の所為で、一夏のプライバシーを侵してしまった。それは、例え友達同士であっても許されないこと。無論、その償いは出来るこ



となら何でもする。

怒るだろうか。怒鳴るだろうか。

身体を強張らせながら、頭を下げ続け、顔が見えない相手を待つ。

が。

「そのことか、良いぜ。気にしてないよ」

……え？

「おい、なんて顔してんだよ。俺達、友達だろうか？」

ああ、これは。

こんな笑顔で許されては、俺への罰にならないじゃないか。

思わず、俺にも笑みが零れる。

そうか、こうして篤達は落とされていったんだな。分かる気がする。気がするだけだ。決して、一夏に気があるわけではない。……面倒くさいな、この言い回し。

「済まなかった」

「良いつて、これからもよろしくな。何せ、男同士なんて俺達だけだし」

温かいな。仲間、友達ってのは。

心に奥深く刺さったナイフのような過去が、ゆっくりと癒されていく。

まだだ。まだ、やり直せる。

俺の、人生を。

言葉遣いを換えて、友達を作って、ISの議論をして……。

それにしても、一夏はいつも通りで本当に良かった……うん？ 何か違和感が。

あ。

「幼馴染みと代表候補生は居ないのか？」

すぐに気が付いた。一夏の席が、妙に寂しいのだ。普段一緒に居るはずの篤、鈴、セシリア、その他大勢の姿がない。……一夏の表情が曇った。地雷？

「実はな、ステイード。昨日のことなんだが……」

ぽつぽつと、語り出す。

ふむ。概訳すると。

「一夏が、昔した鈴との約束を正確に覚えていなかったんだな」

「……まあ、そんなところ。だと思っ」

はあ、と溜息を吐く一夏。相当な落ち込みようだなあ。頬でも張られたのか？ いや、まさかそんなわけ無い。……そう、思いたい。

この約束が数年前の、他愛もない口約束なら鈴も怒らないだろう。せいぜい嚴重注意だ。でも、さっきの内容からすると。

料理の腕が上がったら毎日酢豚をご馳走する。

これは、ほれ。味噌汁と同じだ。所謂、遠回しの告白。しかし鈴は失念してたんだな。惚れた相手は『唐変木・オブ・唐変木ズ』だという事を。

一夏に教えてやりたいが。そんな事したら、その他大勢が黙っていないだろうな。IS学園在校生の敵に、何故敢えて回らなければならんのだ。俺はまだ死にたくない。

「俺から言えることは……まず、よく考えるんだな。鈴の言葉の意図を。もう一つは、一夏と鈴は幼馴染みの前に、男と女なんだって事だ」

アウトだろう。一般的に考えれば、このヒントはアウトだろう。

だが、例外は何処にも存在する。

「……………男と女？ 相反する、肉と野菜みたいな…………。成る程、それで酢豚か！」

何時になったら、コイツの思考回路が恋愛方向へ直結するようになるんだろう。恐ろしいことに来ない可能性が。…………！ いや、待

て。落ち着いて考えるんだ。仮に、一夏が異性への興味が増したとすると、まあ、誰かと付き合うことになるな。とすれば、選ばれた一人とその他大勢の、血で血を洗う争奪戦が……。

H I G H   S C H O O L   O F   T H E   D E A D 。

……何か違う気がするが、惨劇に変わりはない。

「どうした、顔色が悪いぞ」

「一夏。……そのままの君で居てくれ」

「卒業シーズンはまだじゃね？」

嫌な汗を掻いた朝だった。

「織斑先生、相談があるんだが」

授業が終わり、放課後。俺は校舎の見回りをしている人物に声を掛けた。

千冬さんは振り向き、若干目を丸くすると、にやりと口角をつり

上げた。……ええ、そりゃ、クラス中の女子全員に似たような反応されれば、半日で耐性が付きますよ。驚きません。驚きませんとも、自分の言動が不安にはなるが。

校舎の僻地も僻地の資料室周辺。他の人は当然いない。

「……言ってみる」

「ISの件で、一つ」

歩を止める千冬さんに、俺は概要を話す。

俺のIS、アードは先に説明した通り、近接銃撃戦仕様である。ISには自己修復機能なんて便利な物も積まれているが、弾薬には当然限りがある。残念ながら、アードに搭載されているのは基本実弾。逆にセシリアのBT兵器や、鈴の空間圧縮兵器はエネルギー弾に分類され、コストが掛からない。が、一方で経済性・単発の威力と引き替えに、シールドエネルギーを消費してしまうという欠点もある。

アードの設計コンセプト第二は、持久戦型。その象徴として、豊富な拡張領域と消費エネルギーを抑える実弾兵器が積まれている。地球に優しいエコ仕様だ。

が、肝心の弾が手に入らない。

研究機関から逃げて来た身、当たり前だが研究所や企業の支援は無し。金も無し。このままでは模擬戦、訓練で底を着いてしまう。かといってISを起動させないと、それはそれで腕が鈍らない心配だ。

「……成る程な。だが、IS学園はあくまで学校。企業に推薦したりするのは難しいぞ」

「ええ、俺も追われる身だから、無理に弾薬を補給する気はない。代わりに、訓練用のエネルギー銃を貸し出ししてくれないか？」

IS学園に訓練機として配備されている機体は、打鉄うちがねとラファイール・リヴァイヴ。この間整備室で、訓練器用の銃を見たことがあった。まあ、アードには《FEL》(自由電子レーザー)砲なる物があるのだが、燃費が悪すぎるんだ、コレ。

そして、実にあっさり。

「分かった。後で職員室に來い。書類を渡す」

通ったのだった。

まずは、お願いその一クリアだな。

「あともう一つ」

「何だ？」

あ、若干苛ついてる？ いや、職務中に引き留めて悪いとは思いますが、何も睨まなくてもいいんじゃないか。怖いです、先生。

「生まれつきだ」

……IS適正と読心術の腕は正比例するんだな。女性限定で。だってそうだろ？ 専用機持ち以外には見破られたことがない……篇は？ 確か適正だったとか……。謎だな。人類の神秘だ。

「馬鹿なことを考えている暇があったら、さっさと用件を話せ」  
「あつ、はい。アードの調整をしたいんで、整備室を借りられないか？ それも、深夜に」

千冬さんは訝しげに眉間にしわを寄せる。

怪しいことこの上ないが、事情はあるんだ。さっと、回りを確認。

「先生が俺の機体性能見た時。無闇に拡張領域バススロット取ってるのにも拘わらず『UNKNOWN』と表示される武器があることを覚えていないか？」

「ああ、プロテクトが掛かっているやつだろう」

「それなんだが、どうしても解除できないんだ」

「……………ふむ。しかし、深夜に行く必要があるのか？」

まあそう思うだろう。

たかがISの装備一つでここまで慎重になる奴は、一般人には居ない。

そう。一般人には、居ない。

俺が、例えそれがパンドラの箱だったとしても、開けたい理由。

「…………俺はその中身が、俺自身を知る手掛かりになると思っている」

愛機に刻まれた、『Metal Gear』の銘。

『あの人』が、俺に何をさせたかったのか。

全てが、ここに集約している。そんな予感がしてならない。

「……そうか。分かった、今夜で良いな」

「感謝する」

「代わり、と言っでは何だが」

交渉成立、と思ったが代わりって？ 千冬さんはそれつきり口をつぐんでしまった。言い難いことなんだろうか。目で催促すると、ようやく重い口を開く。

「……情けないことだから、黙認事項だったんだがな。昨日の放課後から、打鉄の一機のランサーが上手く調整できないらしい。理論数値では問題無いんだが、原因不明なんだ。教師陣ですらお手上げでな。このままでは解体して初期化フォーマットするしかないんだ」「考えられるのは、スラスターの不備しかないんだが？」

千冬さんは、違う、とばかりに首を振る。

「済まんが、一度見てみてくれ。直れば、そうだな。私が訓練機で相手になってやるう」

「え」

「そうだ、口調は変えても良いが、目上に対する敬意は必要だ。二週間猶予をやる、それまでに直せ」

「……………いや、え？」

ちよっ、待っ…………。



千冬さんはまた悪魔のように笑うと、「ではな」と言い残して行ってしまった。

「……………はあ」

勝負だった？ あの、織斑千冬と？

彼女の強さは、俺がよく知ってる。何故なら、一度手合わせしたことがあったから。

数年前、とある施設で『二カ国間合同演習』が開かれた。それに参加した俺は、アードとともに次々と模擬戦で勝利し、最終戦は苦戦した物の、勝利を掴み取った。その後、ピットで一息吐く俺に、唐突に、彼女が声を掛けてきたのだ。

『どうだ？ 私と手合わせしないか？』

と。

そりゃあ、嬉しかったさ。何せ、世界最強と謳われたパイロットだ。IS乗りなら、一度は戦いたいと思う戦士。初めて第一回世界大会『モンド・グロツソ』決勝戦の記録映像を見た時は、その強さに鳥肌が立ったものだ。

その時俺はウィッグを着け、サングラスを掛けていた。千冬さん相手にお粗末な女装だとは思ったが、声だけは騙せる自信が全くない。

静かに、首を縦に振った。

結果は。

圧倒的だった。

認識するより先に、天地がひっくり返った、と言うか。

あつという間に懐に飛び込まれ、一太刀、二太刀と浴びせると、こちらが反撃をする前にひらりと逃げていく。

単純に、強かった。

勝ちたいと、越えたいと言う情熱が、俺を満たした。

でも、同時に感じていた。

この人の強さは、ただ腕が良いっただけじゃない、と。

今のままでは、この人には届かない、と。

しかし、その『決定的な差』が何か、俺には分からない。

もちろん、今も。

「……分からないんだよ、アンタの強さがどこから来るのか」

心か。覚悟か。何の？　どんな覚悟だ？　それすら理解できずに、あの人を傷つけることなど不可能だ。断言しても良い。

ふう……。止めだ。今は、アードのプロテクト解除に全力を注がなければ。

ちなみに、騙せてなかったそうだ。というのは、試合中に性別を尋ねられた時、顔を引き攣らせてしまったからだ、と。

一端部屋に戻って、頭でも冷やすか。

静まりかえった廊下に、俺の足音だけが響いていた。

……背後の“眼”に、全く気付かないまま。

照明が煌々と照らす室内で、複数の端末を同時に操り、ただひたすらキーを叩き続ける。

もう三時じゃんか。いかん、眠……。

ええい！ 睡魔が何だ！ リゲインを飲め！

「ゴクゴク……ふい」

黄色のボトルを飲み干した。よし。これで後24時間は戦える。

とりあえずアードの方を後に回し、俺は打鉄の調整を行っていた。それももう、佳境に入っている。

開始したのは四時間前。初めてすぐに打鉄を起動してみたら、やはり上手く制御できなかった。待機状態にした打鉄に端末を接続し、解析に入った。

アードのメンテナンスは、基本俺がやっていたから、手慣れた物だ。研究所の職員は悲しそうな顔をしてたが、命を預ける愛機である。安易に任せる気にはなれなかったんだよな。あれか。「俺の彼女に触るんじゃないねえ！」みたいな？ 違うか。そうか。

バーニア系の balanser、スラスタの損傷、バッシュ・イナード・シャル・キャンセラ PIC IS の浮遊、加減速を行う基礎システム が正常に働いているかまで調べ尽くしたが、各局分からずじまい。

で、「は？ 無理」とボイコットしかけた、その時。

一つの可能性が思い浮かんだ。

それが、見事的中したわけだ。

PICの、基礎も基礎。各部に行き渡らせるエネルギー総量を決める根幹、その数値が一桁大きかったのだ。

大がかりな改修以外、普通は調べない場所。他にも職務がある先生は、真っ先に切っていた可能性なんだろう。

何故なら、『脚と背中のスラスタに消費するエネルギー』を下手に弄れば、微調整が必要どころか、正常に動かなくなってしまうのだ。まさに、今のように。

例えるなら、電気と家電製品だ。普段100Wで正常稼働する家電製品。しかし、急に電気が1000Wになったら……街中火の海だな。変圧器は意味をなさない。家電製品大爆発だ。

流石にISは爆破することはないが、根底が歪んでいたため、いくら数字を変えても意味がない。一億増やしたいのに、十の位を変えているような物だ。

発覚した下半身供給エネルギーの、幹の問題を收拾、加えて枝葉の出力数値も調節しなければならぬ。試行錯誤した結果なのか、設定はもはやグチャグチャ、見る影もない。借りていた正常機のデータと、問題の打鉄を照らし合わせ、微妙に数値を変えていく。コピー&ペーストすれば早いですが、そうは問屋が卸さない。

量産機と言っても、各機体には個性がある。それを見極め、個々に設定を組み直さないと十分に性能が引き出せない。逆に、乗り手、機体に完璧に適合していれば、下手な専用機相手なら互角に渡り合えるだろう。

どうやら俺は、一度集中し始めたらとことん突き詰める正確らし

い。便利だとは思いますが、欠点は翌日過労でブルーになると、集中するまでにエンジン掛かるのが遅いくらい。ダメじゃん。

「……よし、整理終了。理論値では問題なし。後は機動実験だけが……。先にアードの方をやるか！」

投げた！ とか言わないで欲しい。

打鉄から数多のコードを引き抜き、待機状態の腕輪に変える。初めて見たが、このブレスレットって鉄製か？ ……打「鉄」だけに？ 狙ったのか。いや、安直すぎるだろ。まあ、いいか。ポケットにねじ込んでおこう。

代わりにアードを中央に置き、セッティングを開始。さてさて、今日は何処まで解体できるか。謎の兵器、後付け装備一覧に出たのが、脱走する一週間前なんだよな。直前に技術士のおじさんにメンテを依頼したから、その時だと思うけど。

「完了。取りかかる前に、カロリーメイトでも……！？」

異変。

異常。

例えようがない、違和感。

思わず、動きを止める。

何だ。

辺りをくまなく見渡す。

床にタコみたいに張り巡らされたコード、隙間から覗く白いタイ  
ル、簡素なデスク、上に鎮座して熱を放出するコンピュータ……。

思い過ごしか？

キュイイイ……

音！？

「上か！ ……っ！！」

馬鹿な。

何で、こんな所に。

天井にへばりつく、漆黒の球体。

「何故ここに、仔月光フンコロガシが居る！」

中央に紅蓮の眼球モノアイを宿した鉄球。

ボーリングの玉から、人間の腕のような黒のアームが三本伸びる。

その様は、正に悪魔。

俺を捉えると、天井を蹴って襲いかかってきた。

咄嗟に胸ポケットへ手を伸ばす。

虚しく空を掴んだ。

くそつ、銃は空港で没収されたんだっ

鉄球の特攻。

「ぐあああ！」

右肩に激痛が走る。

三足で、綺麗に着地を決める仔月光。

いかん、奴の武器は、その運動性能と質量だけじゃない。

よろめく俺の制服によじ登り、仔月光は俺の腰を、がっちりど、抱いた。

刹那。

閃光。



「がああああああああああ……がはっ」

全身を駆け抜ける激痛と、電光。

スタンガン。

片膝を着き、工具を巻き込んで地面に倒れ込んだ。

手が、脚が、身体が、痺れて動けない。

焦げた匂いが鼻を突く。

眼球だけで、敵を追う。

次来たら、確実に意識を持って行かれる。どうすれば……。

「……しばらく見ない間に、随分不拔けたのね？」

戦慄が走った。

この、若さに少しの冷気を纏った、アルトの美声。

「まったく、ココのセキュリティにも拍子抜けだわ。まさか本当に囷ハックに引つかかって、教師の大半をデータ守備に回すなんてね。お陰で、仔月光もあっさり進入できたわ。加えて、計ったように夜中に一人つきりになるし、ねえ？」

間違いない。

「……何で、アンタが」

整備室の入り口にもたれ掛かる美女。

ダークブラウンの長髪を高く結び上げ、ひと房に纏めたスタイル。スラックとした長身に、引き締まった体躯。黒のスーツに、白衣を纏った姿。その口元は、俺を嘲笑うかのように吊り上がっている。

「久しぶりね、ステイード」

「……くっ、『サイファー』」

「あら、もう『お母さん』とは呼んでくれないの？」

きつくした歯軋りの残響が、室内に虚しく木霊した。

008話 再会（後書き）

打鉄の待機形態、アクセサリーって原作に出てきませんよね？  
勝手に設定作ってしまった……。

ここからしばらく、オリ展開です！

そしてオリキャラ登場。

後もう一人追加予定。お楽しみに！

…… どんどん原作から離れていく……。

## 009話 カエル

仔月光 通称《フンコロガシ》は、SOPシステムが生きていた時代に台頭した兵器、月光を補助する無人偵察機。しかし、それ単体でも情報収集、内蔵武器での攻撃、複数の個体と連結してコートを被ることで人に擬態したりと、かなりのハイスペックを持っている。

その三本の腕を生やした異形の黒い球体は、倒れ伏す俺の脇に佇んでいる。

くっ、痺れが取れん。指先に感覚が戻らない。

「ふふ……。どう？　ウチの研究所産のスタンガンは。意識を維持しつつ最大限の痛みを与える拷問用なんだけど。あなた相手じゃ、もっと出力が要るわねえ」

「……あの時逃げ出して、や、やはり、正解だったな」

なんて情けない声しか出ないんだ……。

かつての、あの優しかった母の面影は微塵もない。いや、違う。俺は騙されてんだ。生まれた時から仕掛けられた、巧妙な嘘。反吐が出る。

醜い笑みを貼り付け、サイファーは踵を鳴らし、歩み寄ってくる。

……徐々に身体が回復し、動くようになってきた。が、まだだ。

「ここがIS学園の整備室？　うわ、無駄に高性能の機械が置いて

あるじゃない。ガキには宝の持ち腐れだわ……」

無防備に寄って来やがった。随分と余裕だな。

全身を固めて、もう回復していることを悟られないようにする。  
あくまで、まだ痺れていると思ひ込ませる。

焦るな。感情を消せ。第六感まで使え。

眼球だけで索敵。

仔月光は俺の右腰辺りで待機中。

サイファーは、白衣に両手を突っ込んで、直線五メートルの距離  
を歩行中。

間を隔てる物は、原色の太い配線くらい。

逆襲だ。

「持って帰りたいわね。あ、この超音波検査装置！最新モデルじゃない」

あと、四メートル。

静かに呼吸を整え、集中する。

サイファーが足を上げた。

瞬間。

腕に力を込め、腰を僅かに浮かせる。

脚で地を蹴り、腕力をフルに使い、全身を低い位置で、駒のように回す。

踵が、仔月光を捉えた。

吹き飛ぶ仔月光を横目に、俺は跳躍する。

金属塊を蹴り飛ばした所為で足首が痛むが、この際無視だ。

歯を食いしばり、拳を握り締め。

「牝狐がつ！」

呆けるサイファーに突貫する。

が。

再び、醜悪な笑みを浮かべ。

「お母さんに、なんて口を利くのかしら。お仕置きが必要ね」

何を言っ。。

彼女の背後から、人影が飛び出した。

風を裂き、唸りを上げて飛来する黒塊。

しまった、伏兵か！

「つくう」

振り上げていた右腕を咄嗟に引きつけ、回し蹴りを受け止める。

が、跳んでいたために踏ん張りが利かず、そのまま吹き飛ばされた。なんて馬鹿力だ。

片膝を着き、辛うじて転倒は逃れた。

それも束の間。

「ハアアアアッ！！」

影の追撃。

奇声とともに繰り出される膝蹴り。

回避も防御も間に合わず。

綺麗に、俺の鳩尾へ吸い込まれていくのが、嫌にゆっくりと映った。

衝撃。

「がはあっ」

一瞬呼吸が出来なくなり、瞼の裏に火花が散った。

直後訪れた焼けるような胸の痛みに、身体は言うことを聞かなくなった。そのまま、地面に蹲る。机の上に積んであった書籍の山が崩壊し、俺の背を容赦なく打ち据えた。

気持ち悪い。息が、苦しい。

「……んだよ、ガツカリだぜ。マジでコイツが、オレと同じ遺伝子から出来てんのか？ 弱過ぎんだろうよオ、サイファー」

……誰だ、コイツ。

霞む視界で、辛うじて、口調が変に訛った生意気な野郎を見上げる。

呆れた様子でサイファーに声を掛ける青年。見た目は欧米人で、栗色の髪は60年代ロックミュージシャンさながらの、パーマを掛



けたセミロング。標準的な体格だが、薄着の所為で、引き締まった肉体であることは予測できる。

「ええ、間違いないわ」

「そうかい。オイ、手前エ……」

くっそ、動け、動けよ、俺の脚！

青年は睨め付けるような視線を送ると、俺の髪を引っ張って強引に立たせた。

そして頭を鷲掴みにすると、俺を。

頭から、壁に叩き付けた。

「ッらあー！」

「ッ！ー！」

脳髓が揺さぶられ、意識が遠のく。

ズドン、ズドン。

声にすらならない悲鳴。

何度も、何度も、何度も、ぶつけて剥がしてを繰り返す。

「オレはっ、貴様がッ、憎くて、憎くて、堪んねえんだよオオオオオ！」

奴の怒声が、遠い。

と、言うか。さっきの。

遺伝子……。

出来る？

何を言ってるんだ？

「その辺にしときなさい。ヤッちゃったら、ここまで来た意味がないでしょ」

「……チッ」

怒りここに極まらん、とばかりに、俺を床に叩き落とす。

一体、何がどうなって……がはっ……血が。口ん中切れてるじゃないか。口内炎になったらどうしてくれるんだ。痛いんだぞ。醤油が食べられなくなるんだぞ。

まったく、制服もボロボロだ。どうしてくれる。予備を買わなきゃならんだろうが。無駄な出費だよ、全く。

正直、現状が良く把握できなかった。

仔月光はいつの間にか、サイファアの側で待機している。

「オラ、立てよ」

「ぐ……」

襟ぐりを掴みあげられる。

奴は澱んだ灰色の瞳を、酷く歪めて笑みを浮かべる。

そして、こう、言い放った。

「ハジメマシテだなア、『兄弟』」

きょう、だい？

万力のような腕で、拘束されていることも。

額から生温かい物が流れていることも。

全て放り投げて、その一つの単語が、頭をぐるぐる駆け巡った。

どういう事だ？ 知らない。俺に兄弟なんて、聞いたことがない

……。

「アホ面晒してンじゃねえよ兄弟。睡付けたくなるだろーが」

「……………」

嫌だ。認めない。俺は認めない。

「はあ、遊びすぎたかしら。出てきて、さっさと帰るわよ」

凜としたサイファアの声に応え、戸口から二つの影が飛び出すのを視界の端で捉えた。

その姿は、深緑のボディスーツ、防毒マスクのようなフルフェイスヘルメットを装備した兵士。だが、その動きはもはや常人離れしていた。

数メートルを超える跳躍、天井へ張り付き、壁をよじ登り、一切無駄のない動作で室内を跳ね回る。それは、まさしく『カエル』。

そんな……あれは。

「……『カエル兵』！？ 何故……」

ヘイヴン・トルーパー。通称、『カエル兵』。月光と同じく、戦争経済が成り立っていた時のPMCから、選りすぐりの兵士を集めてテロリストが組織した強化兵。ナノマシンの働きで、戦闘時の感情が著しく希薄になり、聴覚も非常に優れている、という記録を読んだことがある。

しかし。

「そんな……SOPシステムが崩壊した時に、解放されたはず……」

ナノマシンを制御するシステム破壊が2014年に達成された。それ以来、世界各国からの要求で「非人道的行為であるSOPシステムの永久凍結」が為され、強化兵、ナノマシン注入は完全に途絶

えた。

呆気にとられていると、サイファーが種を明かした。

心底おかしそうに。

「当時はみんな女性隊員だったそうね。でもこれは、男。ナノマシンさえ注入できれば、後は端末を使って小規模なら制御することも出来る。……全く、本当に男って馬鹿ね。ISの所為でリストラされた軍人に声かければ、一発で注射させてくれるんですもの。女尊男卑社会、様々だわ」

最、底だ……。

「アンタは……勝手に人の身体を弄くり回して良いと思ってるのか！」

「あら？ 心外ね。私は路頭に迷って、野垂れ死ぬのを待つ無職の人間に仕事をあげたのよ？ むしろ、感謝されるべきだわ」

何……だと？

人の弱みにつけ込んで、身体を弄くって、無感情戦争兵器にしたのが……感謝だと？

分からない。いや、分かりたくない。理解できたら、きっと俺もこいつらみたいいな人間なんだろう。

「……アンタらは、何がしたいんだ？」

全ての元凶を睨み付ける。

殺気を向けられたサイファーは、溜息を一つ。

「死に損ないに睨まれてもねえ……。付いてきなさい、そうすれば教えてあげる」

「そいつは、“誘拐”って言うんじゃないか？」

ふざけんな、畜生。

口の中に広がる血の味が、強烈な鉄の匂いになって鼻を突く。

サイファーは歩み寄り、その細い指を俺の顎に添えた。

ぐいつ、と上を向かされる。……屈辱だ。

そして、ニタリと笑って。

言い放った。

「違うわ。“回収”よ」

コイツは……何処まで俺をコケにすれば、気が済むんだ！

さて、と身を翻す彼女。そして、銃身が極端に短いアサルトライフル P90を携えた《カエル兵》に指示を出す。

「そのデータスキャナーに接続されているISを確保しなさい。その後、パイロットを回収、帰還せよ」

くそ。

二体の《カエル兵》は、サイファアの指令に、従順に従う。

「……や……めろ」

接続されているコードを引き千切っていく。

「そ……それに……」

「アあん？」

奴が俺を掴んだまま、威嚇する。だが、俺はそんなもの、見ちゃ居なかった。

意識が注がれているのは、エメラルドのペンダント。

緑色の手袋が、それに伸ばされている。

俺の……。

ずっと一緒だった。

俺の相棒に。

頭で何かが、キレた。

「それに……触るなああああああああああああああ……！！！！！！」

死力を振り絞り、拘束を逃れる。

「ちくしょう、っ手前エ！」

青年の左側に回り込む。

奴の腕を右手で掴み、一気に引き寄せる。

たたらを踏む男の無防備な後頭部が、俺の前に現れた。

「なっ！」

肩越しに振り返る金髪。

構わず俺は、左腕を首筋に巻き付け、脚を払う。

そして、腰を逸らして持ち上げる。

CQCの基本、拘束。

「ふんっ！」

ナイフすら、俺は持っていない。

だから、そのまま膝裏を蹴り上げ、地面に突き倒した。

「ぐぁあっ！」



だらんと垂れた腕を、踵で踏みつける。

背後、気配。

確認する前に、俺の直感センスに従って身体が動いた。

中段回し蹴り。

後方から躍りかかってきた仔月光を蹴り飛ばす。

確かな手応え。

結果は確認せず、直ぐに正面へ向き直る。

アードの前に立ちふさがる、二体のヘイヴン・トルーパー！。

駆け出す。

腰溜めにP90を構える《カエル兵》。

気を、逸らす。

床に散らばった本を、数冊蹴り上げた。

本を足蹴にしては拙いと思うが、今は緊急事態。勘弁して貰おう。

視界を遮る数々の紙。

頭上で両腕をクロスさせ、落ちてくる書籍を防ぎながら腰を低くして特攻する。

動きを止める敵。

一瞬で懐に飛び込み。

足払い。

前のめりに倒れる《カエル兵》。

身体を捻り、躲しつつ立ち上がる。

ISさえ起動すれば、こっちの物だ。

が。

銃声。

首筋に走る鈍痛。

「ぐあっ」

急速に身体から力が抜けた。

膝を折って突っ伏す。

これは……麻酔!?

「全く、世話掛けさせないでよねえ。……あーあ、サプレッサー減音器付けとけば良かった」

左に刺さっていた、ピストン注射器。

麻酔弾専用麻酔銃 Mk22から射出された麻酔薬入りの注射器は、対象に突き刺さって急減速する。しかし、慣性によってピストンは押し込まれ、内部の薬が注入されるという仕組み。

麻酔は、大量投薬すれば人体へ悪影響を及ぼす劇薬。そのため、第二次大戦後の冷戦時、米国特殊潜入部隊に配備された時から変わらず、急所以外では数発当てないと自由を奪えない、ごく少量しか込められていない。

それなのに一発でこれか……消耗が激しいな。

あと、数メートルが、届かない。

俺が学園から消えたら、大事だろうなあ。何せ、男は二人しかないし。それに……追われても、困る。そうだな……これは良い機会なのかもしれない。

ふと顔を上げると、目の前に小型空中投影ディスプレイが転がっていた。

気付かれないように、震える指で文書入力モードに切り替え、キーボードに指を走らせる。

「さっさと縛って戻りなさい。銃声を聞かれたわ。追っ手が来るわ

「よ」

奥の《カエル兵》はもう一人を叩き起こし、敬礼をする。

薄れ行く意識の中、俺の眼はあっけなく奪われたアードと。

「行くわよ、リクード」

「チツ……。クソが」

去りながら捨て台詞を吐く金髪      リクードを捉えた。

## 009話 カエル（後書き）

ここでオリキャラ・兵器整理

オリキャラ

ステイード⇨スネーク⇨主人公。IS、アードのパイロット。

サイファー⇨ステイードの義母。研究所主任。実名不明。サイフ

アーはコードネーム。

リクード（⇨スネーク）⇨ステイードの兄弟（？）

MGSキャラ

メリル⇨シルバーバーク⇨国連IS開発監視監査委員会委員。

MGS兵器

月光⇨二足歩行戦車。

仔月光⇨フンコロガシ⇨黒い球体の偵察機。人の腕が三本生えた奇形。

ヘイヴン・トルーパー⇨カエル兵⇨ナノマシンを注入した強化兵。

この後、出そろったら設定を纏めてあげる予定です。

## 010話 隠し鉄球（前書き）

記念すべき10話目！（え、ハードル低くね？）

そして、PV50,000突破！

皆さん、ありがとうございます！

## 010話 隠し鉄球

「お、織斑先生っ!」

「落ち着いて下さい、榊原先生」

そう言う千冬自身も内心では、はらわたが煮えくり返っていた。

普段の数倍鋭い目つきで、事が起こった現場を眺める。

整理されていた資料群は床に散乱し、引き千切られて導線が剥き出しになったコード、転がる空中投影型ディスプレイ。そして……。

鮮血が付いた、壁。

榊原菜月教諭は、青ざめた顔で声を振るわせながら報告する。

「……現時刻〇三二八より十二分前、〇三二六、警備員から発砲音がしたとの報告が職員室に入りました。警備員は応援を要請し、周辺を捜査。」

そして、〇三二五、第二整備室にて異常を確認。硝煙も舞っていたことから、現場はここで間違いないと。しかし、容疑者は見あたらず、痕跡も無し。特別使用許可を取っていた一年一組、ステイアドゥスネークの姿……も………「うう」

「結構です。榊原先生、しばらく休んで下さい」

思わずその声を掛けてしまうほど、榊原の整った顔立ちは悲しみに歪んでいた。

だが菜月は健気にも首を横に振り、目尻に浮かんだ水滴を拭う。

「犯人側から連絡、または要求は？」

「一切ありません」

手掛かり、無し。

千冬はきつく、唇を噛み締める。少し、血の味がした。

怒りの原因。それは、ステイードをさらった組織と。

(……………私の……………所為だ)

自分自身に向けられていた。

昨夜の中枢データハッキングに気を取られ、物理的な干渉への配慮を怠るところか、人員をシステムに回し、穴を広げてしまった対応。身元不明で組織に狙われているステイードの、深夜の整備室使用許可を受諾したこと。

二度目だ。

誘拐と、後悔。

一度目は、第二回『モンド・グロツソ』決勝戦当日。最愛の弟が、奪われた時。



そして……。

(くそっ！)

物に当たりたくなる衝動を必死で抑えつけ、千冬はあくまで無表情を貫く。ここで、他の職員まで怯えさせてしまったのは、対応に支障が出るからだ。

沸点をとつくに超えた感情を、何とかなだめ、冷ます。

「何故、監視カメラに映像が入らなかったのです？」

今度は、後ろに控える警備監督に尋ねた。もちろん、女性である。

「……それが、セキュリティシステムを一部書き換えられており、ダミー映像が流れていたんです」

「気付かなかった原因は？」

「巧妙に仕掛けられたプログラムでした。それも完成形ではなく、九割ほどの不完全な物が仕掛けられていたようです。あと僅か、警備システムに干渉すれば完成するレベルの。〇三〇一に、こちらの警備カメラに一瞬ノイズが走ったのを見た警備員が原因解析に入りました。が、結果が出るよりも先に……」

「そうですか……」

すると、昨日のハッキングは囿で、警備システムが本命だったこととなる。完全に、手玉に取られたというわけだ。

「っ！ 失礼します、先生方。これを！」

現場検証に当たっていた警備員の一人が、血相を変えて飛んでき

た。

三人は頷き、促されるまま、後に続く。立ち止まったのは、横になつた小型ディスプレイの前。千冬は屈み。

絶句した。

ディスプレイに映っていた文字は。

d o n t m o v e

(……動くな？ どういう事だ……。いや、これがスネークの物だ  
という確証はない)

固定観念を振り払い、もう一度頭を回転させる。

仮にこれが、敵の物だった場合。

(ここまで慎重に事を運んできたグループが、こちらを混乱させる  
だけで機材に触れるだろうか。いや、少なくとも私なら、一切無駄  
なことはしない。何処から足が付くか、分からないからな……)

次いで、ステイード本人だった場合。

(これは、高いな。余計な記号を一切使わず、最低限の文字数しか  
打っていない。付近の資料が、不自然に捲れている。ここに人が、

横になったのだろう)

と、ここで千冬は引っ掛かりを覚えた。ステイードに許可した、整備室の使用。その時の、対価。それは。

肩越しに振り返り、榊原に問いかける。

「先生、打鉄は確認されていますか？ 私が彼に見て欲しいと頼んだんですが」

菜月は警備員に確認を取りに行った。やがて千冬の元に戻ってくると、静かに首を振った。

「メインコンピュータのバックアップファイルに、駆動系に問題のあった打鉄の物がありました。しかし、現物は見つかっていないそうで……」

ステイードのメッセージである確率が、『高い』から『絶対』に変わった。

しかし、人の命が掛かっているのである。

「このことは、学園の生徒には漏らしていませんね？」

「はい、山田先生が対応に当たっています。幸い、起床していた生徒も居なかったとか」

「混乱を招かないよう、このことは黙秘で。では、私が学園長に報告に行きます」

「気を付けて下さい、織斑先生。もしかしたら次は先生が……」

思わず苦笑する千冬。だが、菜月の危惧ももつともだ。

彼女を落ち着かせ、整備舎を後にする。千冬は深夜の暗黒に飲み込まれた。

人気がないことを確認すると、最後の詰めに取りかかる。

強烈な光を放つディスプレイに眼を細め、携帯に素早く指を走らせた。

「……おそらく、アイツは何か掴んでいるだろう」

数コールの後、千冬の携帯から受話器を取る音がした。

「ど才だ、ナンか分かったのかよオ」

暗い密室。その内側にはぼんやりと発光する空中投影ディスプレイが何重にも重なり、その一枚一枚に数多の記号の羅列が並んでいた。素人には、ただの奇天烈怪奇な文字列にしか見えないが、画面の正面に座る美女　サイファーは、その全てを理解・把握していた。

が。

「……ダメ。私たちが掛けた物以外に、更に高度なプロテクトが上書きされてるわ。綿密に絡み合ってる、こっちの解除コードを受け付けない。お手上げよ」

諸手を挙げ、「降参」と溜息を吐いた。

二人の視線は、データスキャナーに接続されたIS、アードに注がれている。

「自分の犬くらい、ちゃんと飼い慣らしておけッてんだ」

「……ったく、どうしようかしら」

「破棄するしかねえよ。それが……」

「後者で」

呆れたように言葉を紡ぐリクードを遮り、サイファーは断言する。彼の思考が読めたのは、彼女が天才であるが故。加え、リクードの生みの親でもある彼女にとって、そんなことは造作もない。

金髪の少年は、歳不相応の邪悪な笑みを浮かべた。

その色は、嗜虐心と、快樂。

「……ちよっくら、行ってくるわ」

「殺しちゃダメよ」

片目を瞑り、釘を刺す姿は、男を軒並み惚れさせるほど可愛らしい。その内容を別とすれば、だが。

「ツチ、面倒くせエ」

毒舌を吐きつつ、リクードは背を向ける。

「私も途中まで行くわ。準備しないとね」

腰を上げ、サイファーはうーん、と伸びをする。

パシユツと音を立ててドアはスライドし、二人は肩を並べて研究室を後にした。

「……が、ビ……スの子供？」

「間ち……ない。サイ……の……」

うう……ん。

なんだ、もう朝か。身体だるい。眠い。うん、じゃあ二度寝し待  
てい！

サイファー。兄弟。リクード。誘拐。

急浮上する意識と、覚醒して軌道に乗る脳。薄く目を開けて状況整理すると、今現在、俺は三方の壁をコンクリートで固められ、残りの一面に頑丈な鉄格子の嵌った部屋。所謂牢獄に放り込まれていた。両腕、両足に錠がされ、足首は鎖で格子の一つに括り付けられている。身動きが取れない。

けれど、こんな一昔前の拘束具しかなかったんだろうか。現在では備え付けの拘束ベッド（電気ショック機能付き）が主流だということに。

それは置いといて、先ずは情報収集だ。幸い、牢の守衛がべらべらと話してくれている。

あの時、アードを回収せず無理やりにも逃げ出せば、誘拐されることはなかった。それでも敢えて、敵の動きに乗ったのは。

俺の過去を、知るため。

その為の道具は、俺のポケットに入っている。ボディチェックしなかつたんだな。慢心か、素人め。ちゃんと起動するか心配だが……成るように成るだろ。どの道それ以外、方法がない。

「まあ、一回研究所に戻ったわけだが」

「そっぴゃお前、引越しの準備はしたか？」

「したよ……って言えるほど私物はないな。銃と服くらいだ」

「ホント身軽だな、お前……行き先は『グラウンド・ヘヴン』なんだろ」

「らしいな。俺、一回も行ったこと無いが。桃源郷だって話だぞ」

良いぞ良いぞ。もっと喋れ。ちらつと盗み見ると、どうやら普通の兵士。肩からM4（アサルトライフル）を下げている。もちろん、話しているのは英語。そしてまた瞼を閉じる。

ああ、成る程。引っ越しがあらかた終わった後だから、最新の機材がなかったんだな。しかし、何だ？ 『グラウンド・ヘヴン』って。地名か？ 組織？ いや、聞いたことがない。が、引っ越しと言っからには場所なんだろう。

「へえ。流石サイファーさんだ。良い仕事をする」

「だが、ここはフロリダだろう？ どうやって移動するんだよ。距離あるじゃねえか」

「……おい。今、フロリダって言ったな。待て！ ここはアメリカか！？」

「一体どれだけ寝てたんだ？ 北半球の裏側だぞ。」

「何処なんだよ、『グラウンド・ヘヴン』」

「っってお前、そんなことも知らないのか？ それは  
「手前エら、どけ。ジャマだ」

「回りの気温が、一度下がった。」

「り、リクードⅡスネーク特務大尉殿！ 失礼しましたっ！」

「コツ、コツ、ガチャッ。」

ブーツが床に響き、南京錠が外れる音がした。



思わず身を硬直させる。

「オイ……まだ寝てやがんのか？ 起きろ」

ガスッ。

くう……いきなり腹かよ。手荒いことで、まあ。

薄目を開けて、弱々しく振る舞ってやろう。案の定、虫でも見るような冷たい目で睨んで来やがった。わざと大げさに咳き込み、喘いでみせる。

思った通りだ。滅茶苦茶楽しそう。そんなに俺を苦しめるのが楽しいのか？ ド級のS気質なのか。

満足そうに頷くりクードは、俺の真正面にかがみ込んだ。……やはり最近、悪魔とのエンカウント率が上昇しているらしい。お祓いを受けなければ。塩はいずこ？

「さて、単刀直入に言う。……プロテクトを解除しろ」  
「……何のことだ？」

いや、え？

「しらばっくれんじゃねえ！……」

嘘だろ！

リクードは右手に持つ、二本の金具が突き出した黒い直方体を俺

に向けた。青白く発光した、瞬間。

ジジジジジジジジジジイイイイイイイイイイイイイイ！！

電流が迸る。

「ぐああああああああああ！」

仔月光に喰らったスタンガンと同等、いやそれ以上か。感覚が麻痺したのか？ あまり痛くない……拙くないか、これ？

シユウシユウと制服が煙を吐き、焼けた匂いが立ちこめる。うわ、髪も焼けたらしい。臭いったらありゃしない。

「もう一度聞く。キサマのISに掛かったプロテクトを解除しろ！」  
「知らない！ お前らが仕掛けたんじゃないのか!？」

俺は解こうとしてたのに、なんて濡れ衣着せられなきゃならんだ。勘弁してくれよ、つたく。

でも、待てよ。……そうか。

「あんたらがアードを回収したのは、その『中身』が目的なんだな。一研究所として、偶に政府の視察員が来ていたことは知っている。何らかの都合で、あの時アードの中にプロテクトを掛けつつ隠したに違いない」

リカードの表情が曇る。段々面白くなってきた。

ここがアメリカ、フロリダ州にある研究所だとは知らなかったが、

この内部構造には覚えがある。特に記憶に残っているわけではないのは、過去に数回来たくらいだから。その所為で、何処に何があるのかは知らない。

昔、移動は常に防弾・防音の強化ガラスの車で、カーテンをさせられていたから道程の様子は分からなかったのだ。

閑話休題。

サイファー達がアードに隠した、極秘事項。

それが、開けられなくなった。

間抜けか！ そう決めるのは早いか。機密なら、解除コードくらい持っていてもおかしくない。マイクロチップやナノマシンが普及している時代だ。造作もないだろう。それでも開かない、という事は……別のプロテクトが掛かっていた？ 裏の社会では『天才』と呼ばれたサイファーでもこじ開けられなかった、となると。

「黙れッてンだよ！ だからよオ、その『天才』を越えるプロテクトソツ、そうか！」

『天才』を越える、『天才』。

……『あの人』しか、いないだろう。

金髪男は肩を怒らせて立ち上がり、バツと振り返った。そして怒りの矛先を、哀れな部下二名に向ける。

「ツチ……守衛！ コイツをケツの穴まで見張っとけ！ イイな！」

「？」

「さ、サー・イエツ・サー！！」

怒らない怒らない。

轟音を立てて鉄柵が閉まると、再び静寂が訪れた。おぼろげな蛍光灯の明かりが、辺りをゆっくりと満たしていく。

足音は 遠いな。やれやれ、力は強いが頭の方は弱いらしい。

「……ふう、ヒヤヒヤするぜ。あのガキには」

「全くだ。あんなのが上官だなんて、やってられんよなあ」

「ご愁傷様です。」

でも、悪いなあ。同情はするけど。

手錠が掛けられたままの両手を、ズボンのポケットに忍ばせる。まさぐり、あった。ひんやりとした金属を、右手で掴み。

「眠っていて貰おうか」

打鉄、起動。

一瞬にして量子が全身を包み込み、次々と装甲が定着していく。痺れの残る身体も楽になっていった。ISの操縦者管理能力のお陰

だろう。そして、漲る力。

「んなっ！」

「遅い」

ISのパワーアシストで、拘束具をねじ切る。バキヤバキと小気味いい音がし、自由を取り戻した。固定装備である刀を鞘から、一気に引き抜く。

抜刀し、流れるように横一閃。

音もなく、鉄格子が切り裂かれる。

「む、無線連絡しろ！ うわあああっ！」

おーおー。上手い具合に柵が兵士に倒れ込んだ。驚愕の顔のまま、どうやらしっかり伸びているらしい。

「……打鉄には遠距離武器は……無いか。このM4とサバイバルナイフは貰っていいこう。刀はあるけど、狭い廊下じゃ振り回せん」

兵士の胸に挿していたのは、刃渡り十センチほどのサバイバルナイフ。煌めく刀身、手入れされたグリップ。なかなか、良いものだ。金は潤っているらしい。末端兵士にまで、この装備か……改めて敵と思うと、厄介だ。少し前までは、心強い味方だったのに。

いや、感傷に浸っている暇はない。やるべき事は、三つ。

アードの回収。

俺のデータ。

脱出。

最優先事項は逃げることだな。でも、打鉄があるから、しばらくは問題なし。次はアード。これはおそらく、データスカヤナーがある研究室。俺の過去は……気になるがな。直接、命には関わらない位置は確認したから、ハッキングを安全地帯から掛ければいい。おまけ程度だ。

暴れても良いが、隔壁を降ろされたら厄介だ。しばらくはスニッキング・ミッション潜入作戦と行こう。

とりあえず打鉄は解除。シールドエネルギーの温存と、カモフラージュ率を上げるため。

ナイフをベルトに挿し、アサルトライフルを構える。打鉄は待機状態にして、変形した後のブレスレットを左手首に装着する。

一つ、深呼吸。

腰を低くし、銃を構えた。

「……ステイードゥスネーク。これより、アード奪還作戦を開始する」

……いや、気分って大事なんだよ。気力も、さ。

しかも作戦と言えるほど計画建ててないし。

情報も、現地調達だ。守衛のもう一人から予備のマガジンを引き抜くと、俺は、闇の広がる地下へと繰り出した。

010話 隠し鉄球（後書き）

話が……進まない……orz

次回は潜入しつつ無双する予定w

……ラウラああああああああああああ……！！！！



## 011話 真実(前書き)

皆さん、こんにちは！

さて、本日は皆さんに、お詫びを申し上げたいと思います。

ごめんなさい！！

えー、何かと言いますと、MSGの設定と本作との矛盾を、早々に発見してしまいました。

それは、ステイードの過去を知る手掛かり。

その一つである、『BIG BOSS』です。

実はその『BIG BOSS』、SOPが台頭して戦争経済が成り立っていた時、既に彼の情報はPMCの間で広まっていたそうです。

そして、劣化コピーのCQCが出回っていると。byオタクン。

よって、この時セシリアと千冬が知らないのはおかしいんです。

そこで、『BIG BOSS』を『ザ・ボス』に変更することにしました。

誠に勝手ながら、申し訳ありません。

本文は、名前以外は変えていませんので、わざわざ読み返さなくてもOK。

MSGを詳しく知らない方には「え、何それ？」と思われるかもしれません。

そこは今後の展開で詳しく説明するので、問題無い……ハズです。

では、済みませんがご了承下さい。  
(2011/06/11現在)

## 011話 真実

コツ、コツ、コツ、コツ……

落ち着け、壁に張り付いて、一体になるように。気配を、消す。

足音は次第に遠ざかていく。

現在地は、細い丁字路。縦方向に敵が巡回して、帰って行く。

顔を出して、確認。深緑のバトルスーツを纏った兵士は、無防備な背中を晒していた。殺そうと思えば、何時でも撃てる。けど、今はそれが目的じゃない。いかに見つからず、いかに速く目的地に着くか。それだけを考えるんだ。

一息で飛び出し、一気に地図上でイメージする横方向へと駆け抜ける。

潜入ミッション、それに求められる物は。

隠密。

迅速。

これに尽きる。そう、俺は思うし、教わった。

腰を屈め、足音を立てないように走る。

無機質な廊下は次第に清潔感に溢れ、白を基調とした明るい物に

変わっていた。

再び曲がり角。人の気配！ 壁に張り付き、耳を澄ます。

「すね。何故彼のナノマシンが起動しなかったのかは不明ですが」

「まあ、貴重なパイロットが無事確保出来たんだ。疑問は残るがな」「彼が脱出する直前、大々的なシステム整理が行われていたとは言え、致死用ナノマシンをたった半日で全て止めるなんて……」

「調べればいいさ、『グラウンド・ヘヴン』でな。ほら、さっさと行け」

……ナノマシン？ きつと俺のことだろうが、そうか。確かに、俺自身も血液に入れられても不思議じゃないか。逃げ出した時は単純に、システムが一時的にダウンするとさくさに紛れて、という理由だけだったか……命拾いしたな。

盗み見ると、白衣を着た初老の研究員が、二人。会話を交わした後別れて 拙い、こっちに来る！

廊下は一本道、隠れられる部屋はない。後ろに下がろうにも、あるのはさっきのT字路だけだ。当然、見張りもいるはず。どうする！？

より背中を貼り付け、気配を消そう。

ガガンッ。

「ん？ 物音が……？」



ごく稀に、白い『段ボール』も見るけれど。あれは頂けない。逆に、てっぺんに戦車の砲塔が付いた『段ボール』もあるとか。二人乗りだと。そいつは、被ってみたいなあ……。

「……ふむ？　つと、私も準備を……」

ザツ、コツ……

動いた。

『段ボール』に開けられた持ち手の穴から、外を見る。

白衣の裾と、黒い革靴。踵が見え、爪先は見えない。後ろを取った！

急いで　しかし静かに。『段ボール』を横倒しにする。

抜けだし、忍び足で白衣の男に接近。M4は背負って、邪魔にならないように。

息を殺す。

気配を消す。

ベルトからナイフを抜いた。左手で逆手に握る。

接近。

何時振り返るか分からない、ピンと張り詰めた空気。

そして。

右手で、白衣をギュッと掴む。

「うおおおっ!?!」

研究員の膝裏を蹴り、体勢を崩す。

男の身体を引きつけると同時、ナイフを持った左腕を首筋に巻き付けた。

一瞬拘束、直後腕を右に切り替え、首にナイフを突きつける。

「静かにしろ」

男の顔は見えないが、絶句した様子だ。雰囲気で分かる。

完全に、自由を奪った。

急速に顔面蒼白になる。赤色のリトマス試験紙みたいだ。

それは置いていて。

「さて、アードが何処にあるか、吐いて貰おうか」

「あ、アード? ……ああ、サイファーさんがご執心のISか。お、教える。だから殺さないでくれ……」

「分かった。保証する」

「……ここから北へ真っ直ぐ、突き当たりを右だ。第三研究室にデ―タスキャナーがあるから、おそらくそこだろう」

成る程。ISを解析する機材があるってことは、当たりの確率は高い。

周囲に人影は……無し。少し欲張ってみるか。

「データが保管されている……メインコンピュータルームの場所は？」

「そ、それは西館だ。頼む、殺さないで……」

大丈夫だって。殺しはしないさ。

殺しはしないが。

「眠ってる」

腰をそらし、男を持ち上げる。

右腕を締め、頸動脈を押さえ込んだ。

「っ！　っ！　っ！　……はふう」

声にならない悲鳴を上げ、やがて、くったりと動かなくなった。安心しろ、気絶しただけだ。一応約束だからな。

さて、何処に隠すか……。お、そうだ。

丁度曲がり角まで、ずりずりと引きずっていく。『段ボール』の中に入れて、っと。あ、白衣が飛び出てる。押し込め、押し込め。



一段落し、立ち上がる。

周囲を確認すると、俺は再び走り出した。

さて。

研究員の話によるところの、右に曲がる角で俺は立ち往生していた。理由は単純、見張りが一人、『第三研究室』とカードが下がった扉から動かない所為。

どうする？　ここから兵士までは約十メートル。下手に突っ込めば、覆面兵士のライフルで撃たれる可能性大だ。かといって、奴が壁を背にしている以上、後ろから回り込むことも出来ない……。

うーん。

そうだ。

動かないのなら、動かせばいい。

おもむろにポケットから予備の弾倉マガジンを抜き、5・56mm N A T O弾を一つ、取り出す。黄金色に輝く弾丸を手に、振りかぶった。

狙いは、敵の左斜め前。

投擲。

緩やかな放物線を描き、俺が狙った奴の目の前で。

カキイン……………キン、イン……………。

「何の音だ!？」

ビクウツ、と身体を震わせて、声を上げている。めっちゃ驚いてるな……………新兵か? <sup>ルキ</sup> だったらやりやすいが、口だけは押さえないと騒がれるかな。静かに、M4を胸の前に抱える。

覆面が歩を進める。視界から……………外れた!

ダッシュ!

タイル張りの廊下を全力疾走。

もちろん無音で。

気配で察知される、一步前。僅かに膝を屈伸させ。

飛び込み前転<sup>ロリング</sup>で一気に距離を詰める。

「……………ん?」

チッ、思ったより速い!

覆面兵士が振り返ると。

俺が片膝でM4を突き出したのは。

同時。

「動くな」

「ヒイツ！」

驚愕に見開かれた瞳が、左右に揺れている。よし、これで……。

「き、貴様ッ！」

嘘だろ！

ライフルを向けているにも拘わらず、覆面は俺の頭に銃口を向けてきた。

咄嗟の判断。

向けていたM4を突き上げる。

その先は、敵兵の喉。

吸い込まれた先端は、ぐいつ、と戦闘服に飲み込まれた。

「ウグウ」

俺も、パニックだった。

よろめく覆面に対し、M4のハンドガード 銃本体と銃口を繋ぐ、武装を取り付けるために取つてある領域 と肩当て（シヨルダーグリップ）を掴み、押し出す。

覆面の首に横倒しの銃を引っかけると、そのままの勢いで、壁に叩き付ける。

「ぐえっ！！」

「あ……………」

時既に遅し。喉仏に絶大な圧力を受けた新兵は、廊下に崩れ落ちた。

しまったやり過ぎ！ 首の骨は 触診の限り、折れてはいないか。脈も、ゆっくりだが力強い。ふう……。 「つい、うっかり」で人を殺して堪るか。まったく。

しかし素人は怖いな。いきなり突拍子もないことをやらかしてくれる。

その代表例が、混乱した時の特攻だ。

まあ、いい。早くしないと、独房の兵士達から起き上がるだろう。無線で応援を呼ばれたら、力づくで脱出するしかない。

一息吐き、第三研究室のドアに駆け寄る。

片膝立ちになり、ゆっくり、慎重に、音を立てないようにドアノブを回す。

カチャ……。

一端ドアの真横の壁に張り付き。腕を伸ばして、ドアを押し開ける。

身を乗り出し、確認。人は、見えない。

次は立ち上がり、M4の狙いを付けながら室内に進入。

右、チェック。左、チェック。

誰も……居ない？ 警戒がお粗末だな。怠った？ いやまさか。相手はサイファーだぞ。あの、狡猾で、冷酷な天才美女。畏、と考えた方が良いか……。

ピアノ線、ブービートラップ、地雷<sup>クレイモア</sup>。地面にも気を配り、数々のコンソールの脇を、ゆっくりと進む。画面のほぼ全てが暗転していた。きつと、ここも引越しの準備が終わったんだろう。

そして、一つの暗い部屋に潜入する。備え付けの巨大端末に、通常の三倍の数はあるキーボード。そして、強化ガラスを隔てた向こうには。

「……アード」

様々なケーブルを接続された愛機の姿があった。

今行くぞ！ と、落ち着け。

慎重にドアを開け、グレーの機体に接近する。

「一々ケーブルを外すのは面倒だな。よし、待機状態のアクセサリにして、一気にコードを切るか。主電源も落ちてるようだし、問題無いだろ。」

一筋の閃光を放ち、手のひらにすっぽりと収まるエメラルド。

首に、付けて、と。ああ、しっくり来る。俺が俺だと、再確認してみたいだ。おかえり、相棒。

その時。

ビイイイイイ！！ ビイイイイイ！！

「<sup>アラート</sup>警報！？」

そんな、アードを取り出す時には一応確認した……。

『H Q（司令部）！ 捕虜が脱走した！ 応援を頼む！！』

この声……独房にいた守衛か！？

『了解。増援部隊を送る。警戒を強化せよ』

拙い拙い拙い！！！！

強化ガラスの向こうを見渡し、人がいないことを確認する。扉から飛び出し、嫌な汗を掻きながら、俺は出口へと疾走する。

と。

轟音と共に、ドアが飛んできた。

「うわっ！」

あぶねえ、下敷きになるとこだった……って！

カエル兵三名と鉢合わせ。

彼我の距離は二メートルもない。銃は撃てない。

「テヤアアアッ」

腰を落とし、ナイフを構える。

こっついう時の。

「CQCだろっ！！」

奇声を上げながら突き出されるナイフ。

刃物を握る敵の右腕を、腰を低くした俺の左腕が横から打つ。

体勢を崩すカエル兵 の袖に、左手に握るナイフの波刃セレーションを引っかけ、引き寄せる。

すかさず顎に右掌で当て身。

同時に右足を、混乱するカエル兵 の左足に引っかけ。

突き倒す。

「ぐあああ!」

「うっ!」

後ろのカエル兵 も巻き込まれてよろめいた。

落ち着け、ドアの敷居部分は人一人しか通れない。ここで防衛戦を張れば、少なくとも囲まれることはないはずだ。そして。

一瞬の隙を、見逃さない。

アサルトライフルを携えるカエル兵 の右腕を引っ掴み、ぐいと引き寄せる。

につまずいている所に、左腕を首に巻き付けた。膝裏に蹴りを入れ、拘束。

「抵抗するな」

「くっ……」



肩に提げていたM4の安全装置を解除、脇に挟み込んで、たたらを踏むカエル兵 に向ける。

起き上がる気配！

中腰状態のカエル兵 に肘鉄。

ガスツ、と綺麗に肘が入り、悶絶したようだ。

それを横目で確認し、左腕で締め上げたまま、たじろくカエル兵ににじり寄る。

体内では電気信号が凄まじく駆け巡り。

急速に脳が冷却され、視野が広がる。

膠着状態の内に、乱れた呼吸を整える。

すー、はー。よし。

いくぞ！

「ふんっ！」

左足を締め上げたカエル兵 に引っ掛け。

一回転し、勢いを付けて。

に投げつけた。

「うわあああああ!?!」  
「ぐわあああっ!」

おー。絡み合ってるなあ。あー、腕をそんな所に……お熱いこと  
で。

じゃあ、邪魔者は退散としますか。

「ま、待て!」

「ちよっ、やめっ、その関節はそっちには曲がら     ア     」

「おおいつ! 腕が逆関節になってるぞ!」

「手前の所為だっ!!! 痛たたたたたたた!!!」

SOPシステムは不完全なのか、痛覚はあるんだな。

……五月蠅いから気絶させておこっ。

警報は鳴り止んだが、未だに厳戒態勢だ。と言っても、元々人員  
が居なかったのか、随分と手薄である。この分なら、メインコンピ  
ュータルームにも行けるか。

現在位置は、西館行きの渡り廊下を渡った直後。さっき見た案内  
図によると、ここから南に真っ直ぐなんだが……。

壁に張り付き、南へ続く廊下一帯を覗き込む。

敵兵は……無し。一番奥、二、三十メートルほどの所にぶら下がっているカード。学校で良くクラスが書いてあるカード。には、見づらいけど……『Main CPU Room』とある。ここだな。

腰を屈め、一気に駆け抜ける。

廊下も中程を過ぎた頃、廊下が開けた。ここに機材でも置いておくんだらう。一般的な教室より、一回りくらい広めのスペースが……。

バゴオオオオン！！

「くっ！」

何だ！？ 咄嗟に腕で顔を庇い、目を凝らして壁を突き破ってきた物体を見極める。

え……？

「ラファール？」

目の前のネイビーカラーは、量産型IS、ラファール・リヴァイヴじゃなか。土煙の中、仁王立ちになって俺の前に立ちはだかっている。

「悪いけど、ここからは通さないわ」

場慣れしてるな、この操縦者。<sup>パイロット</sup>その声色から、自信が滲み出てる。

デユノア社製、ラファール・リヴァイヴ。第二世代型ISだが、その汎用性は第三世代にも劣らない。安定した汎用性で、世界では第三位のシェアを獲得している名機だ。特徴的なのは背中の四枚羽根だな。四つのスラスタで生み出される速度は脅威になる。

最も。

胸に手を当て、アードを展開。

まばゆい光に包まれ、グレーを基調とした戦車風の愛機が現れる。

「……俺の敵じゃないか」

俺がISを起動させたことに若干驚いていたが、直ぐに立ち直った。やる気だな。目が、戦士のそれだ。気を付ける。

ラファールの特徴は、その安定性だけじゃない。豊富な拡張領域を持ち、操縦者に合わせて格闘・射撃・防御に切り替えられる、汎<sup>マルチロール・チェン</sup>用性役割切り替えだ。つまり、戦って見ないと相手のタイプが分からない。

ま、そんなことどうでもいいか。

「覚悟ッ！」

気合いと共に、突っ込んでくる。その距離十五メートル。接敵ま

で後三秒。

はあ……なんか、可哀想だな。

軽くバックステップして時間を稼ぎつつ、俺は後付け装備を展開した。

「何出しても無駄……ええっ！ FEL（自由電子レーザー）砲！  
!?」

取り出したのは、全長三メートルを超える巨大戦略兵器。

簡単に言うと、砲身内で電子を何百回も共振させ、レーザー発振を行う物。

銃自体の巨大さと、取り回しの難しさから対IS戦では使い道がなかったんだが……。

「これなら、外さない」  
「くっ！」

ラファールは実弾形アサルトライフル《レッド・バレット》を掃射するが、この程度、痛くも痒くもないわ！

「この狭い通路だ。お前に逃げ場はない」

エネルギー充填率76%。想定威力、フルチャージ時の59%です。

元々拠点攻略用の装備だ。最大威力じゃあ、CPU室も吹き飛ば

からな。

「チェック・メイトだ」

銃口が青白く発光し、唸りを上げる。

アードを接地させ、補助スタンドを展開させた。

直後。

強烈な反動を全身に受ける。

反対側では、収束したエネルギーが、二本の加速器の間を駆け抜ける。

そして。

ラファールに吸い込まれてゆく。

轟音。

再び砂塵が晴れたそこには、シールドエネルギーを使い果たして鎮座するラファールの姿が。

ふと顔を上げると、俺も反動だけで三メートルくらい吹き飛ばされていた。ISにブラックアウト防止機能が付いていなかったら、今頃お星様と戯れていただろうな。しかし、やり過ぎたか。綺麗に磨き上げられた廊下が……軽く炭化している。

ま、いいか。俺の家じゃないし。

P I C を起動させ、浮き上がる。そのまま残骸を飛び越え、C P U 室に向かった。

中には……また、誰も居ない？

一応、追っ手が怖いから隔壁を降ろしておこう。警備システムを  
ハッキング……隔壁一から三、閉鎖……内側からロック……完了。

よし、これで時間は稼げるな。

アードを起動させたまま、端末に辿り着く。

さて、ここからが腕の見せ所だ！

……と思ったが、意外や意外、あっさり目的のサーバまで辿り着いてしまった。

機密事項だからか、スタンドアローンのCPUだったのは良いとして、壁が少なすぎないか？アードの処理速度を借りたら、あっという間にパスワードが外れた。

今、俺はアードを待機状態にしてキーボードを叩き続けている。ISのマニピュレーターは、専用CPU操作以外には向かないからな。実体を持っている機械を扱おうと、パワーアシストでうっかり壊しかねない。

そんなこんなで、五分と掛からずに制圧が完了した。

さて、後は時間の許す限り、と言った所か。

『ポ モン全国図鑑完成までの道々金・銀編』

良いのか、IS開発者？

『日記。「足なんて飾りです！ 偉い人にはそれがわからんのです！」久しぶりに視たが……めっちゃ泣いた。by下っ端研究員』

乙。

『相対性理論の応用とISの宇宙進出に関するレポート……  
サイズ・32GB』

……え、文書ファイルでこのサイズ？

ダブルクリック。

おお！ 無数のえろい画像が！！

自重して閉じよう、うん。

やっ。



『「神聖なる蛇の子供計画」活動レポート』

これだ。

俺が探していた、真実。

俺の過去、今。

両親。

そして、未来。

愛機<sup>アード</sup>のこと。

拡張領域のこと。

おそらく、その全てが。

ここにある。

震え出す腕をどうにか押さえ込んで、展開した。

食い入るように俺は、その文字列を読み込む……。。

そして、その結果。

「……え？」

意味が、分からなくなった。

「そんな、何が……何が起きている？」

重要事項だけを纏めると。

俺は、遺伝子操作体、らしい。

つまり、両親はいない。

それはまだいい。

とは言いすぎだが、過去にドイツでも似たような実験があることは知ってる。

それに、まだあまり、実感できていないのかもしれない。

最大の、理由。

2037年Mar：試験体No．31の受精卵制作に成功。

2038年Jan：試験体No．31推定年齢0歳。誕生。

2042年Dec：試験体No．31、研究所を脱走。

今は、2043年四月。

つまり。

俺は、まだ生まれてから五年しか経っていない。

無機質で無情な文字の羅列が、俺の青白くなった顔を照らしていた。

## 012話 ビースト(前書き)

はい、前回に引き続きシリアスです。

あと三、四話、ステイードが鬱状態になると思われますが、皆が寄って集って救済するんで、見捨てないで下さい m | | m

## 012話 ビースト

2043年Apr：試験体No.31、IS学園に潜入。

2042年Dec：試験体No.31、研究所を脱走、ニユ  
ーメキシコ州南西にて消息を絶つ。

2042年Dec：『鎚<sup>ソール</sup>』をISに搭載、プロテクト完了。

2042年Nov：IS訓練、軍事訓練最終フェイズへ移行。

2041年Nov：試験体No.31、IS適正A+++と  
診断。

2040年Jul：ドイツ軍との極秘合同演習。実戦データ

は別途参照。

2039年Aug：IS訓練フェイズ1開始、軍事訓練を仮<sup>v</sup>  
想<sup>R</sup>から現実<sup>リアル</sup>に移行。

2039年Feb：第二世代型IS、アードを開発。搭乗者  
としてNo.31を起用。

2038年Dec：推定年齢16歳。《RG液》より排出。  
『体細胞の固定化』、完了。

2038年Jun：『M2計画』始動。義母としてサイファ  
Iを選定。

2038年May:試験体No.31、IS適正A - と診断。  
《RG液》へ最投下。

2038年Apr:体成長から推定年齢三歳。VR訓練を開始。

2038年Feb:《RG液》に投入。

2038年Jan:試験体No.31推定年齢0歳。誕生。

2037年Mar:試験体No.31の受精卵制作に成功。

2036年Apr:『神聖なる蛇の子供計画』始動。概要は  
別途参照:リンク

言葉を、失った。

神聖なる蛇の子供達計画      RG液      M2計画      錠ソール。

「……や、めろ」

頼む、頼むから。

胸が苦しい。異常に加速する呼吸。胸を掴んで、ギョツと目を瞑る。

「やめてくれ……」

冷や汗が止まらない。

試験体No.31。

「……もう、たくさんだ」

そう、思っているのに。

指先は勝手にカーソルを動かし、『リンク』へとポインタを合わせる。

ダメだ。これ以上は精神的に拙すぎる。見たらダメだ。  
なのに。

俺の身体は、現実から目を背けさせてはくれなかった。

ダブルクリック。

無機質な駆動音。

表示される概要。

神聖なる蛇の子供計画

我々の『計画』は既に最終段階まで上り詰めていたが、IS  
インフィニット・ストラトスの登場によって狂いが生じた。その為、  
新たな布石として、過酷な冷戦下で最強と謳われるも東側に亡命し  
た英雄と、キューバ危機での全面核戦争を未然に防いだ英雄、二名  
のDNAを起用。遺伝子操作体の製造に着手。

『産む』、ではなく、『製造』……

心に、ぽっかりと穴が開いたような感覚。深い闇に、落ちていく。

コンセプトとして、以下の条件を満たす『蛇』を以て成功とする。

・『ザ・ボス』のDNAサンプルより生成した、人工卵子の使用。

・『BIG BOSS』のDNAサンプルより生成した、人工精  
子の使用。

・白兵戦闘能力を極限まで高めること。

・IS適正がB+以上であること。

・日本語で十二分なコミュニケーション能力があること。



そのようなことが延々と続き。

最終行。

そこには。

・不老不死。

「……………は？」

思考が、停止した。

俺の脳が、理解することを拒否したらしい。

焦点がその四文字に定まったまま、硬直した。

……………どれくらい、そうして突っ立っていただろうか。

背後での轟音。

自分でも驚くくらい緩慢な動作で、爆発音のした方を振り返る。

隔壁が、破られたのか……………。

そしてやってくる、人影。

「ハイ」

五月蠅い。

土煙の中から、白衣を着た認めたくない現実サイファーが向かってくる。

「……来る、な」

「あらあら、声がかすれてるわよ？」

そうか。

コイツの罫は、俺に『偽りの真実』を見せて、混乱させることなんだ。

「残念だけど、そのレポートは『現実』よ？」

「……………嘘だ」

俺が絶望に歪むのを見て、喜んでいるだけなんだ。

「それにしてもVR訓練なんて、誰が作ったのかしらね。応用が利いて便利だわ。記憶の捏造とか」

「嘘だ」

へらへらと冗談を言って、楽しんでるだけだ！！

「あなたの記憶、どこまでが夢VRで、どこからが現リアルなのかしらねえ？」  
「嘘だっ！…！」









俺は……。

捨てられたのか。

怪物だから。  
ビースト

戦争の犬だから。

愛機にも。

見限られて。

もう、信じられる物はない。

信じてくれる物もない。

どこにも。

自分さえも。

「くすくす、こっちもイイ感じね」

「もう……………いい」

「うん？ 何かなバケモノ君」

夢も。

希望も。

過去も。





左右に四輪、計八つの不整地走行用のタイヤを有した装甲戦闘車両が、その六メートルもある巨体を、俺とサイファアの間にも滑り込ませた。

あれは確か、ストライカー装甲車？

かなり改造チューンされてる。車体の上に取り付けられた二門の《12・7mm重機関銃M2》。それに、装甲版にも特殊加工がされているようだ。そして、ダークグレーの車体側面に書かれた

EYE HAVE YOU

「ドレピンっ!？」

『ようサイファア』

男の声、拡声器で車内から聞こえているのか？ サイファアの声が、信じられないことに焦っているようだ。あの冷徹で狡猾な彼女が、だ。

「そこを退きなさい！ 契約を破棄するわよ！」

『いや……………そうだな、商売ビジネスの話をする』

対して装甲車の中の人は楽しそうだ。この男、喋り好きなのか。

『その少年についての方が、割が良いってことだ』

え、俺か？

こんな変な男、知らないんだが。

ウイイイイイイイイイイイイイイイイ……。。

装甲車の後部ハッチがゆっくりと開く。

パシュッと、黒い物が飛び出した。

ぐあっ、何かが俺を掴んで。

『それじゃコイツは、俺が貰ってくぜ』

「クソッ、国連の犬が！」

『何とでも言え。今や俺達は大企業だ。怨み辛みは日常茶飯事なんだよ』

刹那。

「うわああああっ！」

猛烈に、後ろへ引っ張られた。

脳が揺さぶられて。

「づづづ」

背中から叩き付けられた。

「ウキヤツ、ウキー」

「さ、サル!？」

閉じていくハッチ。

俺は、どうやらワイヤーで車内に引き込まれたらしい。狭い車内では数々のパイプが剥き出しになっていて、壁には写真が貼られている。同様に壁に掛けられた、拳銃、自動小銃、弾薬各種にナイフ……。弾薬庫になってるのか? いや、それにしては。

何故自動販売機と、パンツ(?)を穿いた白いサルが中に?

物々しいハズの軍用車がとてもシユールである。

それなのに、何この統一感。まるでずっと前からここにあったよ  
うな……。

「おい、アンタがスネークだな?」

「!?!?!？」

何!? 俺を、知っている?

さっきの男だ。

突然のことに、俺は警戒レベルを維持し続ける。

「……あんた、何故俺の名前を知っている。目的は? 俺を攫って  
どうするつもりだ」

「ハア……。つたく、あの話はマジだったか。声までそっくりとはね」

護身用のM4を構え……。しまった、外に置いてきた。しかし何者だ？ 話しているのは英語だな。それに、俺の声がそっくりってどういう事だ。

運転席は、俺の真後ろにある戸の向こうか。行って確かめないと。

「出すぞ！ 舌嚙むなよ」

ゴウン、ズガアアン！

「のわっ、くうう……」

急に走り出すな、揺れる！ 何か捕まる物……。自動販売機しかない！ ……何が悲しくて真っ赤な自販機に抱きつかなきゃならんだ。

『奴を捉えなさい！ この際足の一本無くなっても構わないわ。戦鬨へりを！』

車外から、くぐもったサイファアの声が届く。

恐ろしいことを言ってるが、なるべくその意味を理解しないようにした。

「どうするスネーク。奴さん、やる気だぜ」

「……勝手にしてくれ。俺はもう、どうでもいい」

正直、ここで死んでも構わない。そう思える。

生きていたって、戦争に利用されるだけで、どうしようもないんだから。

「ったく。何吹き込まれたかは知らんが、俺はまだ死にたくないでね。……よ、っと」

唐突な右折。

自販機のボディを掴んでいた腕が、すっぱ抜けた。

やば。

ガンッ。

後頭部に走る、鈍い衝撃。

いかん、目が霞んで、頭がぼーっとする。

子猿の鳴き声が段々遠ざかっていった。

爆発音と兵士の怒号が飛び交う中、俺は意識を失った。

012話 ビースト（後書き）

初登場MGSキャラ（声だけ）W

次回、あの人が登場！？

013話 ATセキュリティ(前書き)

ああ、何故か筆が進まない。

辛いよこのパート。速く進みたいよ。

うっうっ。

若干文章がいつも以上に『アレ』ですが、よろしければどうぞ。





つてるはず無いだろう」

「……………キウ……………」

頼む。あからさまに残念そうな顔をしないでくれ。逆に俺がいたたまれねえよ。何この罪悪感？俺は悪くないのに！何という不条理！

そしてさり気なくサルと会話してたことは……………深くは考えないよ  
うにしよう。きっと自分のためだ。うん。

『お目覚めかい？』

『この声……………さっきの？』

『おうよ。今は運転中で手が放せなくてね。スピーカー越しで失礼』

声のする方を見上げると、天井の隅にカメラ付きのスピーカーが吊られている。む、このままじゃ首が。備え付けの黒い長椅子に座らせてもらおう。これ、病院の待合室にある奴みたいだな。

『今からお前さんを、「ある人」に合わせに行く』

『俺に選択の余地は？』

『無いね』

即答かいつ！……………これ、助けた振りをした誘拐とかじゃ？ I  
Sを動かせる男って貴重だし。いや、それよりも、何故この人は、  
俺がステイードIIスネークで、あの研究所にいたと知ってたんだ。

「あんたは……………いや、あんた達は一体？」

『そういや、自己紹介がまだだったな。俺は《ATセキュリティ》  
のドレビンだ。以後よろしく』

## A Tセキユリティ。

アメリカの巨大な軍事開発会社である。その前身となったアームズ・テック社は、冷戦時に莫大な利益を出し、業界二位の座にまで上り詰めた。が、2005年に起きた謎の社長失踪事件を発端に、株価が急落、倒産寸前にまで追い込まれていた。

「アームズ・テック社から《A Tセキユリティ》に名を変えた。『ビッグシエル事件』以降、拡大したPMCによって縮小の傾向にあった軍需産業が復活。息を吹き返した《A T社》は、再び業界に名を連ねるようになった……」

「おお、よく知ってるな。だが、その後のSOP騒動　ガンズ・オブ・ザ・パトリオットの反乱で、ナノマシンを独占的に管理していた《A T社》に厄介事が押しつけられたのさ。SOP事件の尻拭いと責任追及で、これまた業界トップ争いから弾き出されたんだ。そこに来て、ISのご登場だ。冷戦からの武器開発能力を生かして、量産IS用の武器開発で業績を伸ばしてるんだぜ」

「その社員が、何故こんな事に首を突っ込む？」

「《A T社》と国連が繋がってるって話、聞いたこと無いか？」

「……………初耳だ」

と言うか、社会の裏事情を、さも一般常識のように知ってる高校生ってどうよ。恐えよ。少なくとも俺はそう思っね。

そもそも、大規模とはいえ一介の軍事企業が世界を股に掛ける国連と手を組んで、何かメリットがあるのだろうか。いや、確かに世界の情報はホットラインで集まるだろう。それこそ、戦争の火種も、だ。

しかし、その逆も然り。会社の情報は全て国連に筒抜けになると

考えても良い。つまり、一気に大きな金が入る「裏の仕事」に手が出せなくなった、と言っても過言では……そうか。

「国連はSOP騒動の一因である《AT社》の監視がしたい。受け入れざるを得ない企業側は、情報をそっくり渡す代償に、国連IS委員会から各国のIS開発状況の情報を提供させた、と」

『ご明察。話分かる奴は好きだぜ。それに、俺達はIS本体の開発に主眼は置いてない。あくまで、量産機用の後付け装備だ。信頼度が高く、大量生産が出来る、な』

成る程。飼い犬になるくらいだったら、何かふんどくってやろうと言っことか。

今現在量産化されているのは、日本製の打鉄とフランスのラファールと後数機。SOP事件後での負債が足を引つ張り、量産機に手が回らないアメリカは、第三世代型ISの開発に全勢力を注いでいるとか。一騎当千がコンセプトだから、一般企業の出る幕はない。そこで、多国籍企業化した《ATセキュリティ》が通常兵器を量産する、という事か。

「大体分かったが、俺は何処へ？」

『ん……………まあ、外を見れば分かるぜ』

外？ って、窓なんて無い『天井にハッチがあるだろ、押し開けてくれ』……………ああ、これか。正方形の装甲版を押し上げる。と。

目の前いっぱい広がる草原。

横一直線の滑走路、グレーのラインが水平線の向こうに消えている。

左右両側には、紺碧の海。

飛行場か？ いや、あの遠くに見える、巨大な白いサイコロみたいな建物。それに、星条旗……。

「ロケット打ち上げ場……ケネディ宇宙センターか？」

ロケット自体はないけれど、昔テレビで見た赤と白の鉄筋を組み上げた発射台。何処までも続きそうに見える滑走路。海に向かって突き出す、マストライバー。

ちなみに、マストライバーは宇宙開発で効率よく物資供給するために建造されたとか。最も、その研究費もISに回されたため、ぶっちゃけ税金の無駄遣いに終わったそうだ。もったいない。

潮風が気持ちいい。確か、ケネディ宇宙センターはフロリダ州アメリカ南東に位置する半島にある　　の少し離れた島にあるはずだ。

と、そこに心配そうな声でドレビンが割ってはいる。

『……お前、随分精神的に参ってみたいだが、もう良いのか？』  
「……………」

正直、自分でもよく分からない。

受け入れられないのとは、違うんだよな。理解が追いついていないわけでも……。どっちかというと、夢を見ている感じに近いかもしれない。現実との境目が曖昧で。まるで他人事のように。

「分からない。だが……」  
『?????』

それでも、唯一、確かなのは。

「俺の歩く道が、将来が。自分でも見えなくなったよ」

これからどうするか。

それすらも、分からなくなっていた。

「成る程。改めてみると、微妙に違うな。顔も、声も」  
「そりゃそうだ。そう同じ顔の人間が居て堪るか」  
「違いねえ」

くつつつと笑うドレビン、めっちゃワルだな。ヤクザっぽいぞ。

今現在、俺とドレビンは案内の女性に連れられて真っ白な廊下を歩いていた。ここはNASAの施設、ケネディ宇宙センター本部。すれ違う研究者達は、どちらかというとな性の人が多い。何故か。ISの開発者には、女性も多く付くからだ。

この、アポロ計画のサターンVで有名なケネディ宇宙センターには、ISの登場以来、米国の国防高等研究計画局が入り込んできたらしい。ロケット打ち上げ技術の転用、大規模管制システムを使った高度演算処理を行うためだ。宇宙に向けてのIS開発がされているのは全米でここだけだが、あくまで「やっている」だけ。実質的には軍用ISの開発に重きを置いている、というのはドレビンの受け売りうんちくだ。

それにしても、この男。かなり面白い。話し上手だ。間の取り方とか、身振り手振りが神级である。保育園の園長になって絵本でも……ダメだ、見た目がヤクザだ。保育園の一角が阿鼻叫喚に……。となると、後は商談か。成る程、天職なんだろう、うん。

天然パーマの金髪に、浅黒い肌。狼のように鋭い目つきと長方形の眼鏡は、どつからどうみてもキャリア組感全開である。歳も四、五十くらいか。キャラの所為か、やけに若く見えるんだよな。

「こちらでございます」

上の空状態で通されたのは、うわ、でっかい部屋。まさかの虎の絨毯！？ いくらするんだろ……。何時の間に研究所から何処かのお屋敷に来てしまったのだろうか。あ、今流行の視覚トリックと言う奴では……。ないな。ないか。

「では、少々お掛けになってお待ち下さい。私は失礼させていただきます」

「おう、」苦勞さん

ドレビンさん、鮮やかすぎて格好いいんですけど。場慣れしてる

んだろうな。

彼は高級そうな黒革のソファにどっさりと腰を下ろす。

え、何故ここでリラックスできるの？ 俺の神経はそこまで凶太くないぞ！？

「職業柄な、休める時は何処でだって寝ないとやってられんのさ」  
「……はあ」

俺、場違い感で押しつぶされそうなんだが。貴族の部屋みたいな空気が半端ねえ。立ってるのも何だし、座るか……うわ、こんなふかふかソファ、初めて座ったぞ！

「と、スネーク。ここで相手の情報だ」  
「これから会う、人物の？」

スーツを着込んだ男は身体を起こし、両手を組んで前屈みに。獲物を見詰める鷹みたいだ。一気に緊張感が増し、回りの温度が下がった気さえする。

「奴さんは、国連IS委員会委員。差し詰めアメリカ代表だ。そして彼女は、色々知ってる。役職柄じゃなく、体験でな。俺も詳しくは知らないが」

ドレビンの目力が、一層強くなる。

鋭さを増す眼光に、俺は思わず身構えた。

「ソリッド」スネーク。お前の兄についてだ」

っ！！

「あんたらもヤツらの手先か！」

兄弟なんて、あのイかれた金髪くらいしか思い浮かばない。でも、まだ他にも居るとなれば、それを知ってるのは。クソツ、一体俺を何処まで……！

「落ち着けスネーク。スネーク いや、ソリッドは故人だ。二十年以上前に死んでる」

「……死因は？」

「老衰死だよ」

「馬鹿な！」

俺はどう考えても十五……違っ、資料を信じれば五歳のハズだ。それなのに、俺の兄はもう死んでる？ それも寿命で？ 二十年前って事は、少なくとも八十年前に生まれたことになる。まだ二十世紀じゃないか！

「事実よ」

ガチャ、と木製の両開きドアが開き、向こう側から一人の女性が見えた。

スラツとした体躯に、綺麗に襟足で切りそろえられた短めの赤髪。



見た目はドレビンと同じく四、五十歳。今でも十分綺麗だが、若い頃はさぞや美しかっただろう、そう思わせる雰囲気がある。そして強気な感じと、強い意志。それこそ死線をくぐり抜けないと得られないような代物。　を持った瞳。

白いスーツを纏った女性は、俺の方に足を向けた。

「私は、メリル〓シルバーバーグ。国連IS委員会委員の一人、アメリカ代表よ。……やはり、そうだったのね。スネーク」

彼女は何故か、遠い目をして俺を見詰めていた。

「改めて、よろしく。楽しんでくれて良いわ」

「こちらこそ、よろしくお願いします。ステイード〓スネークです。シルバーバーグさん」

「……メリルって呼んで。寒気がするわ」

「????? はあ……?」

「くっくく」

俺、嫌われているんだろうか。あれか。待っている間に騒いだ所為で第一印象が最悪なのか？ そいつはマズイ。人間関係では第一印象が大事だ。人は外見ではなく中身だと良く言われるけど、実際

はそれだけじゃない。中身なんて、その人と拘わらなきゃ見えてこないんだから。知って貰える前に関係が壊れたら、修復なんて出来ない……おいドレビン、笑ってないで助けてくれよ。

「あの人みたいな声で畏まられると違和感がね……んんつ、先ずはお疲れ様。二人とも、良く無事で。ああ、スネークの服は後で渡すわ、今は我慢して」

「大変だったんだぜ、あの研究所から脱出したは良いが、追撃にA  
アパッチ  
H-64 戦闘ヘリ三機だぜ？ ったく、銃火器に『AUTO  
AIM（自動照準システム）』積んでなかったら今頃火達磨だ」

……頭打って寝てる間、そんなことがあったんだな……気を失ってる間に死の危機とか。知らぬが仏だったか？ そしてメリル、前半が聞き取れなかったんだが。

「その程度で死ぬような人じゃないでしょ？」

「俺はアンタと違って人間だぞ？ 冗談はよせやい」

「さて、スネーク。本題に入りましょうか」

「スルースキル発動イエイツ！」

無駄にテンション高いぞ。何か変なものでも食べたのだろうか。

……仕様が、そうか。

「私は今回、IS学園から要請を受けてあなたに会いに来たの。開校以来の誘拐事件、しかも校内だったから、同僚はパニック状態だね。丁度私が調べていた仕事で、あなたが引つかかったの。宇宙センターの近くに居るとい情報と一緒にね。それに、『スネーク』  
というなも気になってたから」

メリルはそう言って、給仕が淹れた紅茶に手を伸ばした。

折角だし、俺も飲もう。……なんだろう。漠然と美味しいのは分かるんだが、紅茶の種類なんて分かんない。せいぜいハーブとアッサムとダーズリンと……午後ティー？

窓ガラスから覗く日はもう西に傾いて真っ赤だ。空も茜色に染まっている。

喉を潤し、一つ深呼吸。

あまりゆっくりもしてられない。メリルは国連の人間だ。公務の間に時間を取って、俺に会いに来たのだろう。むげには出来ない。

「助けてくれたことに関しては、礼を言う。だが、俺を調べていたってどういうことだ？ それとも、『新生・愛国者達』のことか？」

『愛国者達』と言った瞬間、メリルの目が泳いだ。今までずっと微笑を浮かべたポーカーフェイスだったのに。軽く頭を振ると、彼女は額に手をやって溜息を吐いた。

「もうそこまで知ってるとはね。そう、私は『謎のテロリスト集団』を追っている。先月と先週、二つの事件が起こったの。『新生・愛国者達』の犯行と見て間違いないわ。

一つは先月、イギリスの第三世代試作機が強奪された。

二つ目、先週にはアメリカの『天才ハッカー』が誘拐された」

そして、俺の誘拐事件。

確かに、何かありそうだ。

「彼等の本拠地は、未だに把握できていない。幸い、咄嗟に付けたらしい発信器のお陰で『ハッカー』の居場所は特定できたけれど。潜伏地だけじゃない。規模、総数、理念、目的、トップ。その全てが闇のまま。……お願い、何か知っていたら教えて欲しいの」

「お願い」が「強制」に聞こえるのは俺の目と耳の調子が悪い所為だな。うん、きっとそうだ。

まあ、いいか。あいつらに義理立てする必要なんかもう無いし、それが平和のためになるんだったら喜んで提供しよう……いや、お人好しすぎるだろう。そうだな……俺からも何か聞ければ……あ。

「代わりと言っては何だが、俺の知りたいことも教えてくれないか？」

「ええ、私の知っていることなら」

二つ返事だった。

いいのか？ メリルとは初めて会ったハズなのに、何故信用されているのだろう。さっきのイギリス云々、ハッカー云々も機密事項じゃないのだろうか。ISは言うまでもなく、国の名前を出すって事は、それだけ大事なのだろうし。

あ、そうか。たぶん彼女は、俺の兄と言われている人と面識があるのだろう。それなら納得できないこともない。

なら、知っていること 主に今日見たデータの内容を話そう。

「安心して。監視カメラも録音機材もこの部屋にはないわ」

「くんと頷く。唇を舐めて、俺は口を開いた。

「そう……そんなことが」

「で、お前さんの知りたい事ってのは、『ザ・ボス』と『BIG BOSS』について、って事で良いのか？」

「ドレブン、ご明察。」

二人のアメリカの英雄から俺が造られたこと。五年しか、俺は生きていないこと。偽りの記憶を植え付けられ、研究所に居たときの事が曖昧だと言うこと。どうやら、不老不死のようだと言うこと。

加えて、思い出しただけで沸々と暗いものが込み上げてくる外道女や、気が狂ったような兄弟を名乗る少年の話もした。

改めて整理すると、良く実感できる。

科学から造られた、ヒトコロシの道具だと言いつことを。

だからといって、現実が変わるわけでもない。

どのみち、俺はもう生きてはいけなだろう。ここで全てを話し

「……スネーク、大丈夫？ 顔が真つ青よ！？」

「いや……問題無い。続けてくれ」

「……スネーク、大丈夫？ 顔が真つ青よ！？」

「……スネーク、大丈夫？ 顔が真つ青よ！？」

「……スネーク、大丈夫？ 顔が真つ青よ！？」

「……スネーク、大丈夫？ 顔が真つ青よ！？」

「……スネーク、大丈夫？ 顔が真つ青よ！？」

「……スネーク、大丈夫？ 顔が真つ青よ！？」

「……スネーク、大丈夫？ 顔が真つ青よ！？」

「……スネーク、大丈夫？ 顔が真つ青よ！？」

「……スネーク、大丈夫？ 顔が真つ青よ！？」

『一夏!』  
『何を黙って見ていらっしやいますの!?!』  
『うえっ、だつてお前ら、どっちかに味方したら怒るだろ?』  
『当然だ!』  
『当然ですわ!』  
『理不尽だ!』  
『行くぞ一夏。はああああ!』  
『そこですわ!』  
『二対一って、どうしてこうなった!?!』

「ぶはっ!」  
「え、ちよっ、どうしたのスネーク? スネーク!」  
「はっ!」

しまった、笑いすぎて腹筋が……腹筋が……くくく。呆れたようなホツとしたような複雑な表情で、大人二人は俺を観察している。

「これは……良い傾向なのかしら?」  
「いや、イかれた可能性もあるぜ」  
「冗談。……だといいわね」  
「少し様子を見るか。お茶でも飲みながら」  
「……分かったわ」

うあ、大人の前で笑い転げるとか恥ずかし……けど止まらない! せめて顔だけは隠し通す。ついでに、目尻に浮かんだ涙を拭いた。

ふ、ふふふ腹筋が……割れる! かなりリアリティがあるのが余計にくははははは!

俺は逃げたいんだろう。

笑って、生きていきたいんだろう。

でも、それは許されない。

人としては生きられない。

かといって、死ぬのも恐ろしい。

そんな、身勝手な自分に腹が立つ。

俺はどうしたいのか。

俺はどうすればいいのか。

答えは何処にある？

分からない。

見つからない。

だから笑う。

そんな、馬鹿な自分を、馬鹿にし続けて。

何時までも、何処までも。





013話 ATセキュリティ（後書き）

はい、若干持ち直したと思ったたら今度は卑屈になりましたね。

次回は『世界史』と同様、説明パートになりそうです。

ああ、また筆が遅れる……

そして、ここで皆さんからアンケートを頂きたいと思います！  
内容は、ステイードのパートナー（戦友的な意味で）の性別。  
それによって、ストーリーが若干変化したり。

？ 男…原作の誰かとくつつける！？

？ 女…原作主人公ハーレムに介入、またはステイードと！？

期限は……六月中でお願いします。

感想にて受け付けますので、是非お願いします！

## 014話 蛇の系譜（前書き）

前回までのあらすじ

窮地を、《AT社》の男・ドレビンが駆る装甲車によって救出されたステイード。

連れて行かれた先は、彼の有名な『ケネディ宇宙センター』。

そこで出会った、国連IS委員会委員の一人であり、SOP事件を解決に導いた兵士、メリル・シルバーバーグ。

二人の口から、『蛇』の歴史が語られる。

## 014話 蛇の系譜

『ザ・ボス』。

「特殊部隊の母」や「戦士」など、数々の異名を持つ彼女は、米  
国を代表する伝説の英雄であり、そして裏切り者でもあった。

第二次世界大戦中や米ソの冷戦下で、『ザ・ボス』は彼女の率い  
る『コブラ部隊』と共に戦地へおもむき、精鋭部隊として数々の戦  
果を上げてきた。コードネーム・THE JOYとして、『ザ・ボ  
ス』は戦いの中に喜びを見出していた。

しかし、彼女はソ連へ亡命した。1964年に、祖国であるアメ  
リカを捨てて。アメリカから、二発の小型核砲弾ディープロケットをかつぱらって。

そして、その一発が、ソ連の真つ直中で起爆した。

ソ連はこれを「アメリカの偽装工作による核攻撃」だとして、全  
面核戦争の一手前に来るほど、米ソ間は緊張状態に包まれた。

キューバ危機の二の舞を演じそうになったアメリカは、急遽ソ連  
に向けて潜入工作員を送り込んだ。米国自らの潔白、関与の否定を

証明するために。『ザ・ボス』を抹殺するという方法で。

その工作部隊、『FOX』。潜入エージェント工員として抜擢されたのが、『ザ・ボス』の弟子であり、後の『BIG BOSS』となった男。

コードネーム・ネイキッド・スネーク裸の蛇である。

『ザ・ボス』にとって唯一無二の弟子『BIG BOSS』は、以前に二人で近接格闘術クロス・クォーターズ・コンバット CQCを生み出した。今やCQCは全世界に広がっているが、それは正統な物ではないそうだ。『BIG BOSS』が設立した組織に所属していた兵士だけ、その訓練の一部を受けることが出来たらしい。

伝説の傭兵、『BIG BOSS』。

彼がその名を軍事界に轟かせたのは、『スネークイーター作戦』彼の恩師、『ザ・ボス』を抹殺したときからだ。彼はCIA長官から『BIG BOSS』の称号を与えられ、その後直ぐに『FOX』を除隊してからも、二度の全面核戦争から世界を救ったらしい。

しかし。

『BIG BOSS』は、テロリストとなった。

その経緯は不明である。が、再びCIAに返り咲き、『FOX HOUND』総司令官となった彼は、裏で『独立武装国家アウターヘヴン』を組織し、アメリカから、いや世界から、全ての兵士を、国家という呪縛から解放しようとした。その為に、核弾頭を用いて。しかし、それは一人の潜入作業員によって阻まれる。

姿をくらませた『BIG BOSS』だったが、彼はまたしても世界を混乱に陥れた。1990年代後半、約半世紀にわたった米ソの冷戦は収束し、各国の紛争も和解を始めて世界に平和が訪れた折

中東に、『ザンジバールランド』と呼ばれる軍事政権が誕生した。

話は変わるが、当時、石油に変わるエネルギーを見つけていることが出来ない世界各国は、エネルギー資源の枯渇に身を震わせていた。そんな中、チエコの生物学者、キオ・マルフ博士の作成した、『OILIX』と言う高純度の石油を精製する微生物が発表された。

その博士を拉致し、『BIG BOSS』は持ち込んだ核と併せて、世界に対して軍事的優位を確保しようとしたのである。

この試みもCIAに阻止され、彼は火の海に巻かれてその一生を終えた。

二度の争乱の阻止に活躍した、CIAの特殊潜入作業員。

それが、ソリッド・スネーク。俺の兄であり、『BIG BOSS』の息子である。

これがメリルから聞いた、俺の両親の概要。

その情報は、BLACK OPS汚れ仕事に携わる者の間では有名らしい。が、SOP事件の後にアメリカが情報規制をしたらしく、教科書にはもちろん、表に出ることはなくなったそうだ。

「しかし、穴が多いな」

それが、俺の率直な感想。

一見筋が通ってるように見えるが、二人の行動が、何故急に変わったのだろうか。何が彼等を変えたのか。祖国を裏切るような行為をさせたのか。何を見、何を感じ、何を思ったのか。

「ごめんなさい。それは私にも分からないの。ただ、CIAが頑なに何かを隠している、というのは雰囲気から察せるのだけれど」

俺が指摘すると、メリルはそう頭を下げる。

そこまで真摯になられると俺もやりづらいな……嬉しいんだけどね。ま、あの出来事を除けば、だけど。

この話をするに当たって、俺が“ステイード・スネーク”である

ことを証明させられた。若干手遅れのような気もしたけど、別段拒むこともない。遺伝子云々になると思ったら、ドレビンに「IS起動させれば済むぜ」と言われて一瞬絶句したのは……気が付かなかっただけだ。脳ミソは関係ないんだようん。

アードの待機状態であるエメラルドを握った瞬間、研究所で動かなかったことを思い出して不安に駆られた。けれど今度はあっさり展開し、男が普通に動かしたことでメリルとドレビンを驚かせた。

一時的な故障？ そんなはずない。仮にサイファアの工作がされたとしても、今動くのはおかしい。何でだろう？

「さて、次はスネークが本当に『オトコ』なのかの確認だな。メリルさんや、後ろを向いててくれい」

「……手短に頼むわね」

あれ？ 勝手に話が進んでる？

ドレビンはISを格納した俺の前にやってきて、両手を揉んだ。視界の端で、メリルはそっぽを向くのが見える。

……ドレビン、何がそんなにかしいんだ？ とても楽しそうだぞ。変だな、嫌な汗が止まらない。何ですかそのイヤらしい動きをする手は。

「では、失礼して……セイツ！」

「うはあー！」

ちよっ、どこ掴んでんだー！！



握るな馬鹿野郎！！

「おう？ 中々に立派じゃねえか。何に使った？ ナニに？ はっはっは」

「こ、このオツサンヤクザが！ さつさと放せ！！」

「んー、よし、OKだ。『オトコ』でISを使える人物確定だぜ」

……はあ、はあ。

なんて奴だ。今からアードを起動してこの大馬鹿野郎の脳天をかち割ってやるうか。……いや、ここにはメリルさんがいる。流石にマズイ、って！ メリルさん今黙殺してましたよね！？ さり気なく容認しましたよね！ おい、何食わぬ顔で紅茶のおかわり飲んでんじゃねえ！！ ブルータスお前もか。そこまで信用はしてなかったけども。

閑話休題。

俺は俺自身分からない。それが今の状態だ。

生きる目的なんて最初から有って無いような物だったけれど、改めて突きつけられると、面白いくらい動揺する自分が居る。

『ザ・ボス』は。『BIG BOSS』は、どうだったんだろう。きつと、俺みたいに悩んで、苦しんだはずだ。

世界を変えようとした、変えた二人だ。

何も思わなかったはずがない。何に希望を見出したんだろう。そして、何に失望したんだろうか。

何処に向かって歩き続けたのだろうか。

「次はソリッド・スネーク。あなたの兄について話すわね」

メリルは切り出し、紅茶で喉を潤す。

……先ずは情報を集めよう。俺のことはそれからだ。

「スネーク、『シャドー・モセス』って聞き覚えはある？」

「？」

えー、っと……何処かで聞いたような……あれ？ 地名だったっ

け、人？ いや、何かで読んだ気がする……あ。

「『シャドーモセスの真実』って小説が、一時ベストセラーになったとか。けれどその十数年後に、アメリカ政府が創作物だと言って一蹴したことから、出版社が読者からの反感を買って絶版になったって言う、いわく付きの本か？」

「それよ。読んだことは？」

「いや、ない。聞きかじっただけだ」

そう……とメリルは呟くと、席を立って部屋の照明を一段階強くした。いつの間にか外は暗くなっていて、宇宙センターの明かりが

点々と見えるだけ。

振り返った彼女の口から語られた真実は、衝撃的だった。

端的に言えば、ナスターシャ・ロマネンコ著の『シャドーモセスの真実』の内容は、タイトル通り真実だったという事だ。

そのシャドー・モセス島に、メリル・シルバーバーグその人が居たと言っことも。

シャドー・モセス島 アラスカ半島・アリユーシャン列島・フオックス諸島沖の孤島で、『FOX HOUND』上がりのハイテク兵が島を占拠、武装蜂起したのである。

トップはソリッドの兄弟、リキッド・スネーク。彼も、俺の兄らしい。

2005年当時、19歳にしてシャドー・モセス島に軍人として配備されていたメリルは、この武装蜂起に巻き込まれて監禁された。

それを助け出したのが、ソリッド。その後、協力者として彼と共に反乱軍を鎮圧したそうだ。

一息吐いたメリルに、ドレビンが割ってはいる。

「以前話した、《アームズ・テック社》社長の失踪事件な。その原

因が、この『モセス事件』だ。核兵器廃棄所というのは名ばかり、この島では国防高等研究計画局と《アームズ・テック社》が共同で、<sup>DARPA</sup>『次世代新兵器』を試験していたんだ」

新兵器の稼働試験によつて招集された、DARPA局長と社長。

その二人は所持していた核弾頭安全装置解除キー PALを、手酷い拷問の末、テロリストに吐かされた。その後直ぐに、両名とも心臓発作で死亡したらしい。

「アメリカの機関と企業が共同して開発した兵器。それが」

ドレビンは淡々と、事実を語る。

ハイライトが消えた目には、一切の感情を映していない。

「核搭載可能二足歩行戦車。通称」

一拍置き、一呼吸入れる。

自然、俺は手に汗を握っていた。どんどん、世界が闇に染まっていく。膝が笑い出すのを必死で押さえ込み、無理やりぬるくなった紅茶を流し込む。

メリルの表情も、真剣そのものだ。

そして、彼女が続きを引き受ける。

「次世代兵器。通称      メタルギア《METAL GEAR》」

メタル……ギア……!?

「待ってくれ、それじゃあ俺のISは？」

正式名称、アード・Metal Gear。

無関係なはずがない。けれど、これはDARPAの、アメリカの機密事項のハズだ。そんな代物が、俺のISに刻まれているのはおかしい。それは、サイファーが何かと おそらくDARPAと繋がりにあると考えると考えて間違いない。

「スネークのISは、IS学園から極秘に回されたイギリス代表候補生との戦闘映像で確認済み。その一部 両足が、当時開発された《メタルギアREX<sup>レックス</sup>》に酷似していた。無関係では、ないでしょうね」

落ち着け。

これ以上自分を見失ったら、本格的にダメになる。

考えるのは、話を聞いてからだ。遅くなんかない。そう、言い聞かせて。

「おっと、お前さんもメタルギアに関しちゃよく知ってるはずだぜ」  
「？」

「どついう事だ？ ドレビン」

「お前さん、死にそうな顔してるんだが……。分かった、そう睨む

なよ話すからさ！ 月光だ！ 月光だよ、SOPの時に有名な！」

ぱつと、戦車に二本の足が生えた兵器が思い浮かんだ。

……二足歩行戦車と呼ばれた、月光。メタルギア つまり、金  
属の歯車。

「あれも、メタルギアなのか」

なんてこつた、探していた答えは、すぐそこにあつたんじゃない  
か。

メリルは再び対面のソファに腰掛けると、説明を続ける。

「正確には、メタルギアの量産型ね。実際、核弾頭を搭載できる領  
域もない、ただの戦車の代役よ。けれど、本物は違う。出力も、装  
甲も、攻撃能力も、機動力も。ISでも手を焼くほどだと思っわ。  
それに、今現在ISに対する核攻撃実験はされていない。貴重なコ  
アを失うリスクは、何処の国も犯したくないんでしょうね」

“ISに匹敵する兵器は、2005年には既に完成していた”

このことが世界中に広まれば、あつという間に混乱が訪れるだろ  
う。それに、それすら二十一世紀初めの情報だ。三十年経った今、  
その能力は何処まで成長しているのだろう……。

初めて触れる、世界の裏。

そうじゃない。俺のいるべき場所がはっきりした。

消して光の届くことのない、影の中の存在。

メタルギアと同じ、殺戮兵器なのだから。

「話を戻しましょう……。反乱軍の統括者、リキッド・スネークは、アメリカ政府にこう要求したの。『10億ドルと、「BIG BOSS」の遺体を引き渡せ。24時間以内に従わなければ、核を発射する』と」

「どうして彼の亡骸が必要だったんだ？」

「伝説の兵士のDNAには、普通の人間にはない《ソルジャー遺伝子》と呼ばれる物が40種類程見つかったの。兵士としての直感、身体能力、タフネス、全てが備わった究極の遺伝子。それを使えば、恐ろしい能力を身に着けた兵士が何十人と造れる。生み出された《ハイテク兵》で構成された部隊には、アメリカでも太刀打ちできないほど」

完璧なテロリストだな。

どこぞのアニメやゲームに出てくる悪役そのままじゃないか。

「で、二人の重要人物の保護、テロリストの対処を任されたのが、ソリッド・スネーク。私も彼にくつついて……。お世辞にも役に立たとは言えないけど、リキッドを殺して反乱を止めたわ。きつと、それは世界中で彼にしかできなかったことだと思う。伝説の兵士、蛇の息子である、ソリッドにしか」

伝説の英雄、ソリッド・スネーク。

俺の兄は、どうして戦うことが出来たのだろう。

任務に忠実だから？ 国を想っていたから？

「その後、再びソリッドは行方をくらませたわ。けれどその二年後、西暦で言えば、2007年。彼は再び現れた」

「2007 『ビッグシエル事件』の原因、タンカーが爆発した年……」

「そう。彼は、そこでメタルギアが造られていると情報を得て、破壊作業をしたらしいわ。けれど、失敗。タンカーは爆破され、メタルギアはテロリストに回収された」

情報規制は先進国の得意分野だと想っていたけれど、そんなことがあったなんて。メタルギアの技術は、『モセス事件』の後、世界中の裏組織に設計図が出回ったらしい。

様々な地域で造られている『メタルギア亜種』を根絶するため、ソリッドは『フィランソロピー』と言う反メタルギア組織を立ち上げ、世界を飛び回っていたそうだ。様々な研究所を爆破し、「テロリスト」のレッテルを貼られても、なお。

「そして起こった、海洋除染プラントの占拠事件 通称『ビッグシエル事件』。彼は先の失敗の時に死んだと思われていたけれど、実は生きていたの」

原油が流出し、その除去のために建てられたプラント、『ビッグシエル』。



テロリストが大統領や政府要人を人質に、300億ドルを要求した。

その解決に当たった、アメリカの特殊部隊。

「ご存じの通り、この事件は解決されたわ。作業員がソリッドだと報道されなかった。まあ、こういう“政府の失態”は隠そうとするのが常だからね」

事実の影に潜む、真実。

本当のことで巧妙に隠された、真相。

その中心で活躍する『蛇』と、大量破壊兵器『メタルギア』。

「ソリッドとリキッドは、『BIG BOSS』の遺伝子から生まれたの。いえ、普通に生まれたのではなく、『BIG BOSS』のクローンとして、人工的に生まれてきた。その首謀者が」

「『愛国者達』？」

「そうだ。が、お前が言ってるのとは違うと思うぜ。何しろ『愛国者達』は、SOP事件の幕が下りた時に壊滅したんだからな」

『愛国者達』は、壊滅した？

それならサイファーは、その組織の再来だ、と？

そして兄も俺と同じ境遇だったのか。

なら、何故生きていけたのだろうか。嫌になつたりしなかったのか。絶望したりしなかったのか。どうでもよくなつたり、世界を恨んだりしなかったのだろうか。

教えてくれ。

何でアンタは、そんなに強いんだよ。

一時は英雄と祭り上げられ。

『善』としてメタルギアを壊しても、世間には『悪』として恐れられて。

それでも、生き続けた。

世界のために戦った。

どうして……？

「『愛国者達』というのは、ごく一部の人間が管理していた秘密組織なんだ。世界征服か、欲求を満たすためか、そこら辺は誰も知らねえ。だが、ある時から組織の管理をAI 人工知能に託すようになったのさ」

ドレビンの話を要約すると、こうなる。

SOP事件に至るまで、つまり全ての兵士にナノマシンを注入し、戦争経済を推し進めた。その首謀者は人間ではない。機械の判断という事らしい。

「極秘事項だけれど。AIが戦争経済を引き起こしたのは、『愛国者達』の目的ではない、と言うのが私とドレビンの見方なの」

「マシンの暴走だ、と？」

「おそらく、な。俺がソリッドと接触したのは、『愛国者達』

いや、AIの指示だったのさ。目的はたぶん、戦争経済の発展

そんな所だろう。AIに高度な意思決定能力はいらぬ。膨大な情報を管理するだけで事は足りる。つまり、だ。全ての社会の規範として成り立ってたAIが暴走したんだ。いや 命を持った」

機械の、命。

自己進化の可能性を秘めた、まるで生きているかのようなIS

因果かな？ 考え過ぎか。

「そのシステムは、三つのAIと、それを束ねる中枢AIによって管理されていた。SOPもその中の一部でな。そして、そいつを、世界を支配していたシステムを乗っ取るうとした奴が現れたのさ。お前さんの、ご存じの通り」

そして全ては、SOP事件へと終結する……。

「2014年に起こった、アウターヘヴンの武装蜂起。その時ソリ

ツドは、40代なのにもうその身体は衰え、髪は白く染まっていたわ……」

「クローンだから、か？」

こくんと頷くメリル。

そうか……それ故の、老衰死。

彼女は眼を細め、俺をじつ、と見詰めた。

たぶん、俺と彼を重ねているんだろう。伝説の男と重ねられることに、不思議と悪い気はしなかった。俺にも英雄願望があるのかもしれんな。

ま、誰だつて自分が悪だと思つて戦う奴は居ないだろう。悪い言い方だが、テロリストだつて、確固たる信念を持って行動しているんだ。それを武力に訴えるのはどうかと思つけど。

「その反乱軍の首謀者。それは、リキッドとオセロット。私たちはそう呼んでるわ。リキッドの右腕を移植した人物に、リキッドの遺志が宿つたの」

何という……。

何という、執念。

リキッドも、死してなお世界を変えようとしたんだろう。

真の目的が何かは、俺には想像もつかない。

それでも、戦った。

己の信念を、突き通して……。

「彼を止めたのが、あなたの兄、ソリッド。……中東で再会したときは、本当にビックリしたわ。だって、『モセス事件』の時は若さがあつたのに、十年も経たないうちに私の父より老いてたんですもの。」

「俺は、武器洗浄屋カンロンダラーとして、スネークに会つたんだ」

### 武器洗浄屋。

SOPシステムによって、PMCの兵士に注入されたナノマシン。彼等が持つ武器は全て、固有のIDを持ち、それと一致するナノマシンを持つ者にしか、その武器は使えない。

そこで登場したのが、武器洗浄屋だ。

元々《ATセキュリティ》の人間である彼等は、システムに介入し、IDを書き換え、もしくは破壊して、ナノマシンを持たず、物資に乏しい民兵に売りさばっていたそうだ。

これも、戦争経済の一端である。

「不思議な奴だったよ。なんて言うか、雰囲気オーラが違うんだ。そこらの兵隊は、俺みたいな得体の知れない輩を、それも戦場で見かけると大抵怯えやがるんだ。銃を振り回し、虚勢を張ったりしてな。まあ、銃弾が飛び交う中でスーツ姿だった俺もどうかと思うが」

ドレ빈はそう呟くように語ると、ひょいっと、俺の目を覗き込んできた。

「奴は……そう、目だ。確かな自信と、強靱な意志と、殺意を感じ取る感覚と、戦場全てを見る視野……その全てを備えた、綺麗な目だ。とても老人オールドとは思えなかったよ。奴は本物ホントだった。ナノマシンで強化された、偽物の兵士とは違ってな」

本物の戦士。

何故こんなに、身体がうずくんだらう。総毛立つような高揚感。

俺の中にある、戦士ソルジャーの遺伝子がそうさせるのか？

「彼は銃を持って、リキッドを止めたわ。それは、敵との戦いだけじゃない。老化との 彼自身との勝負だった」

メリルは天井を仰ぎ見て、それから、ふっと笑みを零した。

懐かしんでいるんだらう。

俺も知りたい。

見て、感じてみたい。

いつの間にか、俺は身を乗り出して二人の話を聞いていた。

若干恥ずかしいけど、ま、いいか。

「私は聞いたの。『何故そうまでして戦うのか』って。あなたも、

「これが知りたいんじゃない？ スネーク」  
「……ああ」

戦う理由。

生きる理由。

必ずしも、俺とは一致しないだろうけれども。

きっと、それはヒントになるだろうから。

メリルは微笑を浮かべる。

そして、口を開いた。

「それは……」

「ヴィイイイイイイイイ！！ ヴィイイイイイイイイ！！」

「何事！？」

一瞬にして表情を引き締めると、メリルは内線の受話器を引っ掴んだ。流石元兵士。判断速いなあ……って、感心してる場合じゃない！

ガンガンと耳を打つ警報。ドレビンは……。

「ドレビン！」

「お前はISを起動しとけ。少なくともそれで安心だ」

「分かった！ そうだメリル、これを」

アードを起動する前に、ポケットから打鉄の待機状態であるブレスレットを机に置く。俺の意図を察したんだろう、メリルは一つ頷くと、直ぐに顔を真っ青にした。

…… 一体。

「一体何が……」

その答えは、声を震わせた女性の館内放送によって知らされた。

『中距離弾道ミサイル接近中！ 推定着弾時刻、六十四秒後。推定着弾地点、ケネディ宇宙センター本部。職員は直ちにシエルターへ避難を！』

三人で顔を見合わせる。

俺はドレビンを抱えて、打鉄を展開させたメリルと共に部屋の窓から飛び出した。



## 014話 蛇の系譜（後書き）

また説明パートですね、済みませんです。

この解説。

これはあくまで、『メルルとドレビンが知る』真実です。

なので、物語に描かれていないことも多々ありますが。

ググって下さい！（え

もしくはゲームを！

オススメしますよ、MGS。動画を見ても良いですが、シリーズを通せば軽く廃人になれると思います。ええ。

読者の皆様、アンケートに回答を寄せて下さりありがとうございます！  
一応、現時点での集計結果をば。

? 男案 4 票

? 女案 3 票

ついでに理由もお聞かせ下さると、作者は感激で枕をぬらします。  
拮抗しているので、単純に票数だけで決めるのも何だな、と思いま  
してw

追々、お返事を書くつもりですが、とりあえずこの場でお礼を。

今回から前書きに、前回までのあらすじを入れることにしました。  
「こんないらねえよ!」という方は、こちらも感想にてw

015話 善と悪(前書き)

ご意見を頂いたことにより、あらすじは無くすことにしました。  
一体何やってるんだろう、俺w

今回は(も?)それなりにハードですね。  
メタルギアパート(オリ展開)は重くなりがちだな……。

## 015話 善と悪

『偵察機は目標をロストした模様！ 弾着二十秒後！ 総員退避！』  
「なんて事。弾道ミサイル防衛システムは何をやってるの!?!」

鳴り響くアラート。

さつきからその間を縫って白煙や閃光が夜空に向かって放たれているけど、アナウンスの内容は変わらない。

くそ、これじゃあ俺達も間に合わない。こうなったら……。

「メリル、俺が目標を迎撃する！ ドレビンを」

腕の中で「すげー、生身で空飛んでるぜ〜!」とかほざいてたオツサンを、打鉄を身に纏ったメリルに投げ渡す。ドレビンが文句をたれてきたけど、無視。

「シエルターへは間に合わない。地上に戻って、ドーム状にシールドバリアーを形成して身を守ってくれ!」

「そんな! ……………分かったわ。気を付けて」

お互い頷くと、俺は踵を返してハイパーセンサーを起動する。

良い判断だ。流星は元兵士、俺が提案した方法以上の作戦はないと、瞬時に判断したんだろう。苦い顔はしてたけどな。

熱探査、開始。ハイパーセンサー、超高感度モードに切り替

え…………完了。

今の内にスラスタへエネルギーを集め、何時でも『イグニッション・ブースト瞬時加速』を行えるようにしておく。ちなみにこのモード変更。高速戦闘時に調整された、いわば高感度モードだ。

熱源確認。 UNKNOWN。ターゲット1。距離67 / 50  
0 m。高度……。

予測弾着時刻、十五秒後。

レーザー砲の性能なら、間に合う……！

目標より強力な電子ジャミングECMを確認。ロックオン不可。

「ちっ、行くぞアード！」

こうなったら、当たる可能性の低い銃器には頼れない。

だったら、素手で止めてやる。

背中で起こる爆発。

一瞬視界が歪んで、ハイパーセンサーが世界をスローモーションに映す。

跳ね上がる速度計と、高度計。

……おい、この速度で衝突したら爆発するだろ、間違いなく。

会敵、三秒後。

そうじゃない、弾着地点をそらせれば、それで良いじゃないか。幸いこの辺りは海。そこまで軌道を変えられなくても、滑走路に落とせば被害は最小限だ。

「一か、八か！」

会敵、一秒後。

クロス・グリッド・ターン  
三次元躍動旋回を入れる。

今度はさっきとは真逆に、『瞬時加速』。

エネルギー残量が恐ろしい勢いで減っていく。

歯を食いしばって、襲い来る衝撃に耐える。

……胃の中に紅茶しか入ってなくて良かったな。

結果。

よし、綺麗にミサイルと並ん　　。

「……へ？」

何故、弾道ミサイルに『ウサギとニンジン』のマーキングが？

— 先ずそれは置いて！

俺が弾道ミサイルの鋼のボディに触れようとした。

刹那。

ボンッ！

「んなっ！」

ミサイルが急減速した。

振り返らずに見る。え、弾道ミサイルから花が咲いた！……違  
うだろ。

ミサイルの尻尾から、パラシュートが開いていた。

いつの間にか砲撃は止んでいる。

アナウンスも止んでいる。

島中に悲しく響き渡る、ミサイルアラート。

そんな中。

先端から脚を生やしたカプセルが、ゆっくりと地上に降り立  
った。

……月面着陸みたいだなあ。

数秒後、空気の抜ける音がして。

ミサイルの中から、一人の人物が躍り出た。

「やつほ〜。希代の天才科学者、東さんの登場だよ〜」

何か変なのキター！



変なの、と言うのは冗談で。

あの後東は“何事も無かったかのように”、俺がメリル達と話していた客室で紅茶を飲んでいた。

「ふー、ふー。熱いよコレ。スー君、冷まして〜」

「自分でやれ」

「スー君が冷たくなっても、東さんはめげないのだよ。篝ちゃんとちーちゃんに耐性が付いてるからね。ふっふっふ」

ちなみに、『スー君』とは俺のことらしい。

俺の両脇では、メリルとドレピンが未だに目を白黒させていた。

まあ、無理ないよな。話で聞く変人と、実際に見る変人はやっぱり違う。百聞は一見にしかずだ。

華奢で細い真っ白な腕に、豊かな胸。不思議の国のアリスで、アリスが着ていたような青と白のワンピース。それに加えて、ウサミミのカチューシャ。

三ヶ月前と、少しも変わらないな。変態っぷりが。

「あの、あなたがISの開発者、篠ノ之東さんでよろしいんでしょう

うか？」

「うん？ いかにも、私が天才の束さんだよ。はい、自己紹介終わり」

早々にメリルの話を切り上げると、再び紅茶と格闘し始めた。第二ラウンドの開始。紅茶はなおも激しい熱風を繰り出す！ が、束選手。それにも動じずにアイス・ブリザードを……。落ち着け。俺は高1だぞ。

ちなみに、ケネディ宇宙センターには箝口令が敷かれた。

今頃本部ビルは大騒ぎだろうなあ。ご愁傷様です。

まあ、アメリカも事を荒立てたくないだろう。何せ、警備兵から銃を向けられて、同行を迫られたときの一言 「おやおや、いいのかな？ アメリカに今まで監禁されてましたーって、マスコミに零しちゃうかもよ？」それが、かなり効力を持っている。

そんなことが世界中に報道されれば、アメリカが非難的になるのは必至。

第一に、IS協定の纏め役を買って出た国であるのに条約違反を犯したこと。第二に、束は次世代を簡単に作り出し、唯一ISの『コア』を造り出せる天才だということ。

イヤだな、この微妙な緊張感。

物音と言えば、束の「ふーふー」くらいだ。

そして人心地付いたのか、束は顔を上げた。

「君、アメリカ代表のIS委員、メリルⅡシルバーバーグ？」  
「へっ、はい！」

なんと。

束が、身内と織斑家以外の人間に興味を持ったと！

明日は赤い雨が降るな。そうに違いない。おお、恐れ！

「はいコレ。口止め料ね、おたくの国が開発してる軍事用ISの機  
動補正プログラムと、マルチロックオンシステムのソフトウェアだ  
よ」

「え……ええー！」

束の背中から、どこからともなく生えた機械仕掛けのアーム。そ  
の先端に摘まれたUSBメモリを、束はメリルに手渡した。

何やらニコニコ笑ってる。怪しいことこの上ない。

相変わらず、この人はよく分かん。

「アメリカの軍事用ISで開発が停滞気味なのって」  
「そう。シルバー・ゴリラみたいな、変な名前のだよ」  
「……………」

銀メッキのウホウホか。なんてシュールな物をアメリカは開発し  
てるんだ……。

メリルは複雑な面持ちでメモリーカードを見詰めている。

「それは、銀の福音の事？」  
シルバリオ・ゴスベル

「うんうん、それぞれ」

全然合ってねえ！！ 後半はまるつきり合ってねえ！！

そしてさり気なく米国の機密事項知ってるんですね。

まあ、今更驚かないけど。

「じゃ、スー君と二人で話したいから出てって」

顔色一つ変えないその凶々しさは、一周回って尊敬に値すると思  
うぞ。

対するメリルは僅かに腰を浮かせながらも、不安げに俺へ視線で  
問いかけてきた。

「けれど……」

「頼むメリル。俺と束は知り合いなんだ」

「……もう驚かないわよ。私は『コレ』を処理してくるわ。何かあ  
ったら、外の衛兵に声を掛けて。それじゃ」

「俺もおいとまするぜ、スネーク。…… EYE HAVE YOU  
U」

二人はそう言い残し、豪奢な部屋を後にした。

「久しぶりだね、スー君。二週間ぶり？ 口調変えたね。いやー、もっと会ってないような気がするよ。」

元々メリルが座っていた位置　つまり俺の対面に腰掛けた束の第一声はそれだった。

二人きりだと、改めてこの部屋の大きさを実感するな。

部屋は広いのに肩身が狭い……今度一夏に教えてやるっ。

「何だって、アメリカに新型ISのデータを？」

コレをきっかけに、世界が動く可能性大だ。

そのリスクを冒してまで、渡す必要があるとは思えない。

「ちょっと、“間に合わなさそう”だったからね」

答えになってないんですが。

冷まし終わったのか、恐る恐る紅茶に口を近づけると、束は一息入れる。

そして俺に向き直ると、口を開いた。

「もっと落ち込んでるかと思ったけど、そうでも無さそうだね」

「……何の話だ？」

「聞いたんでしょ？」 『ザ・ボス』と『BIG BOSS』のこと」

！

さも当然、とばかりに首をかしげる束。

この部屋には盗聴器は無いって、メリルは言ってたが……。

「あの二人の経歴は調べたからね。何をしたかくらいは想像付くのだよ」

まあ、束だしな……。

天才に一般人の思考は通用しないだろう。理由とかは考えない方が良いか、うん。

「……正直、どう思った？」

「束と千冬さんは、『蛇』を知ってたのか？」

「まあね、全部じゃないだろうけど。ゴメンね、ちーちゃんに口止めしたのは私だから」

《………濟まない、全く聞き覚えがないな。『アイツ』には聞かなかったのか？》

《おそらく、『蛇』と『BIG BOSS』はコードネームだろう》

これが千冬さんが俺にくれた、最大限のヒントだったのか。

そりゃ、黙るわな。現に、こんなに動揺してるし。

束は笑っているが、その目は違う。

いつになく真剣だ。急かすように見詰めてくる。

そんな彼女に、俺は……。

「……………」

沈黙しか、返せなかった。

俺はこの先、どうやって生きて行けばいいんだろう。

少なくとも、普通の、一夏達みたいな生活は送れない。

影から生み出され、影でしか生きられない蛇<sup>オシ</sup>は。

何のために、生きる？

皆の、生きる目的。

一夏は、守りたいと言った。出来る限りの人間を。

じゃあ……。

「東は……どうしたいんだ？」

って、何言ってるんだ。コレじゃ、ただ現実から逃げてるだけじゃないか。

自嘲しているだろう俺に向けられたのは、同情でも、哀れみでもない……東の、優しい瞳だった。

束はウサミミを揺らしながらカップを傾ける。

やがて、ぼつりと。

「私は……そうだね。やり直したい、とは思っね」

俯き。溜息を吐くように、そう漏らした。

「後悔してるのか？」

「発表自体は間違っではない。『善』だ、と。そう信じたい。……けど、甘かったから。そうか、やっぱりスー君にはバレてたかあ。てへっ」

自分の頭を小突き、無理やり元気よく振る舞う束。

難儀な人だよ、全く……。

三ヶ月と少し前。

あの日は珍しく空を黒雲が覆い、大粒の雨が降っていた。

サイファアの研究所から、俺は命からがら逃げ出した。が、数日間の逃亡の末バギーの燃料も底を付いて、追っ手に抱囲されそうになった。



その時。

突如飛来した『ニンジン』に、攫われた。

後で聞いた話によると、助けたのは腹に一発貰っていて重傷だったから、ではなく、ただ単にISを持つていたからと言うだけ。まあ、命を拾って貰ったんだ、文句は言えん。

なんでも、「私の知る以外で、男がISを動かせるなんて！」と言うのが理由らしい。

織斑一夏は、また別の話だとのこと。そこはよく知らん。

気絶していた俺を担いで、弾丸を摘出したついでに『イロイロ』調べ尽くしたらしい。DNAまでだ。個人情報保護法なんて、くそくらえである。

行く当てもない俺は、そこで束の研究材料　もとい、似非執事として働くことになった。

数多の機材に囲まれ、コンソールに向かっている束は……どこか神がかってたな。鬼気迫っていた、と言ってもいい。恐ろしいまでの集中力で、ただひたすら八つのキーボードを打ち続ける。鍵盤の音が切れないんだ。

タアアアアアアアアアアア……って。

俺は研究所暮らしで人見知りだし、束も「ただの人間」には興味がないようだから、当初はぎこちなかった。それでも、毎日三回は同じ食卓を囲むから、段々会話も増えていった。

それが三ヶ月も続けば、お互いのことが分かってくるものだ。

束の想いを、ISを造った理由を、さっせるくらいには。

「私は小さいときから貼り付けられた『天才』という名のレッテルに、随分と苦しめられてね。誘拐未遂なんて日常茶飯事、小学校の下校時に拳銃を向けられたこともあった。まあ、篝ちゃん達にはナイショだけだね。」

その所為か、その後知り合って何かと手を焼いてくれるちーちゃんに、悪く言えば依存するようになってしまったの」

俺から目を逸らし、空のティーカップを弄りながら束は続ける。

初めは、「計算が速い」程度のことだったんだろう。それが重なつて、尾ひれが付いて……何時しか誰も収拾できなくなるほど、拡大する。

出る杭は打たれる 当人の思惑とは無関係に。社会が、世界が。杭の自由と、周りの世界を奪っていく。理不尽に。不条理に。

「社会の『裏』に引き込まれそうになった私は、抗うために、逃れるために。子供ながらに、『裏』を調べ尽くした。暇を見つけては、

何年も掛けて。そこで、世界の本当の闇を、知った……」

闇。

それは『愛国者達』だろうか。『BIG BOSS』だろうか。それとも。

『俺』、だろうか。

「世界の危機や人類なんて、私にとっちゃどうでも良いんだよね。けれど、それがちーちゃん達や篝ちゃんに関わるなら……話は別。ちーちゃんに相談したら、凄いいよね。二つ返事で『協力する』って、頷いてくれたんだよ。それはきっと、私のためだけじゃあ、ないだろうけどね」

たぶん、一夏のことだろう。

あの、極度な弟思いの人だ。そうに違いない。

そして……。

「造ったのか？ ISを？」

「うん。ちーちゃんも協力してくれたし、参考物件も調べてる間に見つけたからね。『コア』さえ安定させれば、そこらの子供だって造れるんだよ」

その『コア』が造れない所為で世界各国が揉めてるって、把握してます？

「そして、初めてのISが、完成した。別に私は、世界に戦争の火

種を巻きたかったわけじゃない。実質バトルスーツだけど、学会には」

「宇宙空間での活動を目的とした、マルチフォーム・スーツ」と発表した……」

「そう。けれど、その機体性能スペックを見れば、一目瞭然。それは優に、世界の軍事力を集めても相手取れるほどの能力を持っていた」

「……けれど発表当初は、見向きもされなかったんじゃないのか？」

「そうだ。」

テレビに出てた偉そうな解説者によれば、「世界各国は、この事実を認めたくなかった。故に、闇に葬り去ろうとした」と。

その程度、束にだって予測できたはず。

「まあ、『表』の反応は予想道理だったよ。けど、『裏』は、完全に外した」

「早すぎた？」

切り返しに、首を振る束。長い髪が、左右に広がった。

「ううん、遅かった。いや、ノーリアクションだったんだよ」

束はきつと、こつ思ったんだろう。

“ 武力による抑止力で、『裏』を押さえつける”

間違いではないはずだ。

その『裏』が、『ヤツら』を指しているなら。

束はこめかみを押さえる。

そして、大きく溜息を吐くように口を開いた。

「迂闊だった。完全に、“足をすくわれた”」

「どづいう事だ」

「そのままの意味だよ。……って、こんなおつもーい話をしに来たんじゃないんだよ！ 束さんはスー君に発破を掛けに来たのだ！」

？

「まあ、こうして悩みを聞いてくれる物分かりの良い子は、そういないんだよ。ちーちゃんは忙しいし」

言っやいなや、束の背中からアームが二本、現れた。

今度は何だ……先端が机に置いていったのは、戦闘ナイフ？

もう一方は、黒革のホルダーだった。

「じゃじゃーん！ 束さん特製、小型化した《零落白夜》。名付けて、《零落白夜・S》<sup>ショート</sup>！」

まんまかい！

鋭い刃先のナイフ。俺がCQCを使うことを知ってか、ちゃんと波刃付きだな。けれど……。

「悪いがコレはもう、俺には必要ない。俺は……」

戦いたくない。

いや、意味のない戦いはしたくない。

兄が、両親が。何故戦えたのかは知らないけれど。もう、俺には

「まあまあ、話は最後まで、しっかりと聞きなさい」

あんたに言われたかねえよ！ というのは飲み込みまして。

「受け取るかは、スー君の自由だけだね。私の話を聞き終わってから決めても、遅くはないと思うんだよ」

カップをテーブルに置き、「よっ」とソファから立ち上がる束。ゆっくりと室内を歩きながら、言葉を紡いでいく。

俺はただ、冷たく光るナイフを、ぼーっと見詰めていた。

「人がした行いは、何が『善』『悪』を決めると思うっ？」

「なんだよ、藪から棒に」

「いいから答えてよ。大事なことから、さ」

「……………」

顔は見えないけど、声色が真剣だ。

急にそんなこと聞かれても困るんだけどなあ。

決めるってからには、第三者だろう。つまり。

「他人、か？」

妥当な線だ、と思う。けれど。

「それもあるけど、遠いね」

どつやら不正解らしい。

東は俺の後ろに回り込んで、立ち止まった。

大きな窓を開けたのだろう。

夜風が室内を駆け抜けていく。

少し間を置いて。

東ははっきりと、言い切った。

「全ては、時代が決めるんだよ」

時代……？

そんな、不安定な物が、か？

「その時の勝者が、地域の支配者が、国の指導者が、民主主義の世論が。その人の価値を決めていく。一方的に、相対的に、ね」

束は歌うように、俺に語りかける。

まるで、俺の知らない『母』のように。

「あるときは『善』として崇められ、時の移ろいと共に『悪』へと叩き落とされる。それは、この世の理<sup>ことわり</sup>。絶対不変な、必然」

曲がりなりにも、身内を守ろうとした束。

創造した、守るための力。

それが今や、『裏』の社会で暗躍している。させられている。

人のために科学を利用する。

例えばそれが『善』による行いであっても、“利用する”側の“悪意”によって、簡単にその行いは『悪』へと豹変する。



生みの親の、意図しない場所で。

そんな彼女の、束の悲鳴が聞こえたような気がした。

ぐつと、唇を噛み締める。

「人は互いに利用し、利用される。流動的に変化する“敵”に翻弄されて、己の欲を増大させる。それは、国も同じ。その全てから解放されるには、国境を無くすしかない……」

時代によって、個人の意思の及ばぬところで。

英雄が反逆者になり、ヒーローがテロリストになる。

口の中に、鉄の味が広がった。

「だから私は、もう惑わされない。外の世界に確かな安寧を求めれば、無条件の信頼を委ねれば。必ず、裏切られる時が来る。だから

」

胸が熱い。

泣きそうになる目元を、必死の思いで引き締める。

ああ……。この人も、苦しんだんだ。

他人に翻弄された運命に。

抗うこともままならない、宿命に。

そこに。

一陣の風が、吹き抜けた。

「私は、自分に忠を尽くす」

「……………自分に……………忠を……………」

衝撃的だった。

思わず、そう呟いていたほど。

「他人に翻弄されない。国に振り回されない。時代に惑わされない。強い、信念。」

自分が信じたことをやり通す。例えそれが、世間から非難されても。自分が正しいと思った、自分が成し遂げようと思ったことを「

もちろん、何が何でも、と言うわけではない。

その時に『悪』と蔑まれても。

後世には『善』と謳われると信じて。

「君もだよ、ステイード」スネーク。自分の行動に責任と、誇りを持つ。時代に縛られず、貫き通す。……大丈夫だよ、スー君なら。なんとたつて天才科学者、束さんのお墨付きだからね。胸を張って良いんだよ。自分の人生なんだから」

ッ！！！

運命に縛られず。

俺の出来ることを。

全力で。

力が込み上げる。

精気が沸き上がる。

一本の道が、照らされた。

「束っ！」

……振り返った先には、誰も居なかった。

ただ、吹き込む爽やかな風に、白いレースのカーテンが揺れるだけ。

窓から覗いた先は、満天の星空。

ここが孤島だからだろう。街明かりが無いおかげで、良く見渡せる。

静かにガラス戸を閉めると、俺は元居た場所へ戻った。

横たわり、主をじっと待つ、一振りの刃。

「……俺は、俺として生きる。確かな道はないけれど、希望はある。相棒と、仲間と共に。そして、己に、忠を……！」

もう逃げないと。

目を背けないと。

自分を信じると。

決意を胸に。

煌々と輝く銀の短剣を　運命に抗う意思を、しっかりと掴み取った。

015話 善と悪（後書き）

何気に束が別人だった気が……orz

批評覚悟ですね。ええ。

それに、原作で語られていない部分まるつきり創作ですから、原作が出てしまえば……弓月さんが、俺と同路線だと、いいなあ。

IS制作理由が正反対だったら、発狂するかもしれん^^；  
原作で明かされたら、加筆・修正の可能性大のパートですので、  
ご了承下さい。

アンケートの方の、現時点での集計

?男:5票

?女:3票

男性が優勢ですね。

比率で言うと男少ないですもんねえ。

教員ですらほぼ全員女。

IS原作:MG Sオリ展開||1:1

が、当初の目標だったのに……。

しばらく一夏は空気ですね。今までもそうでしたが、あと数話は

W

016話 キツネの頼み事(前書き)

もはやISとは別作品……。

中々一夏達の『表』に戻れません。

『裏』はバリバリMGSですけどねw  
では、どうぞ。

016話 キツネの頼み事

ポロポロになった制服のベルトに《零落白夜・S》を装着する。

部屋の外にいた二人の警備員に、話が終わって、メリル達を呼んで欲しいという旨を伝えた。

「博士は？」

「帰りました。忽然と」

残念そうな顔をしたが……少しホツとしてないか？ まあ、気持ちからは分からなくもない。

ちなみにドレビンはリトル・グレイ あの白いサルを見に行つたそうだ。何でも相当な高齢で、健康管理が重要らしい。

「……けれど良かった。いい顔になったじゃない……」

「ん？ 済まん、聞いてなかったんだが」

「いえ、夜も遅いから夕食にしましょう、と」

って、今何時……もう八時を回ってる。うあ、腹の虫が鳴った……正直すぎるだろう、俺の腹。

別に顔を背けなくても、笑ってるのは分かってるんですよメリルさん。

夕餉は、軍用レーションとはえらい違いだった！ 比べる方が失礼か、そうか。

『では、作戦内容を伝えるわ。……ごめんなさい、本当は私も行き  
たかったのだけれど』

「気にするな。あんたにはあんたの仕事があるんだろう？ まあ、  
DNA検査で大病院の中に放り込まれるよりかマシだ」

左腕のコーデックが空中にディスプレイを映している。その中で、  
メリルが胸をなで下ろしている様子が見て取れた。

今現在俺は、米軍の戦闘用ヘリ《アパッチ》の機内で、黒っぽい  
スリーキング 潜入用スーツを身に纏って座ってる。

目下にはメキシコの深い密林が広がっている。ヘリは初めて乗っ  
たけれど、意外と心地良いな。五月蠅いのが玉に瑕だが。

で。何故、こんな事になったかと言うと……………。



一昨日、夕食後

「突然だけど、頼みたいことがあるの」

「俺にか？」

「ええ……」

一体何だろう。言い難そうだ……。悪い予感しかない。

しばらく逡巡した後、メリルは意を決したように、こう言った。

「数日前に連れ攫われた『ハッカー』を、助け出して欲しいの」

……はい？

「待ってくれ。そう言うことは専門家に任せるべきじゃないのか？」

「それが……何処も動かないのよ。警察も、国防省も、CIAも……」

何だ、みんなでストライキか。って、そんなわけあるか。

落ち着け。一端状況を整理してみよう。

- ・九日前、米国天才ハッカーと英国新型ISが盗まれた。
- ・おそらく、『新生・愛国者達』の仕業。
- ・容疑者グループの潜伏場所は分かっている。
- ・アメリカは動かない。

「……………臭うな」

手元のブラックコーヒーを見詰め、ドレビンはそう零した。

確かに、不審な点がある。

人材資源なんて言葉もあるくらい、人間　それも国の発展に関わる人間は特に、大切にされてしかるべきだ。そんな人物を、アメリカは、捨てた……………？

「私が居た古巣……………」『FOX HOUND』にもツテがあるけど、情報によれば元イギリスのISがそちらに向かっている。作戦難易度が格段に高まっているの。それに、CIAは『FOX HOUND』のISをお披露目させたくないらしい」  
「手札を揃えたい……………」というわけか」

そこで、今現在無国籍、戸籍も存在しない人物であるが故に国家間のいざこざを引き起こさないで、VR訓練ではあるけれど潜入任務の経験があつて、いざとなったらISを緊急稼働させて脱出できる人材　詰まる所、俺に白羽の矢が立ったわけだ。

そんなこんなで、ドレビンに頼み込んでアードの弾薬補充と改修をし、『FOX HOUND』の新型スーツを着こなして、感覚を取り戻すために一度VRへダイブしたりと……一日が経ったのである。

途中、千冬さんに無事の報告と、今後、少し立て込んで戻れそうにないことを伝えた。

……何も重い話はしてないのに、最後に「死ぬなよ」と電話は切れた……流石、何でもお見通しらしい。

『そのへりは一度、付近のIS開発施設へ降りるわ。そこで今回の作戦の「協力者」と落ち合うことになってる』

「協力者？」

『今回の関係者よ。事件の詳細を知っている数少ない人間。潜入はスネーク、あなた一人だけど、バックアップはその人に任せれば問題無いわ』

やがてへりは、小さな陸軍基地に降り立った。

ここはメキシコ　タマウリパス州の最北。アメリカの国境を越えた直ぐ先にある大西洋沿岸の州だ。国境付近の、うっそうと茂る森に囲まれた国境警備基地。ここを少しの間だけ、“間借り”するそうだ。

黄色のペンキで「H」と描かれたヘリポートに、《アパッチ》は緩やかに着陸する。

空からの風景、もう少し見ていたかったが……帰りの楽しみを取っておくか。

軽く装備　アードの待機状態であるペンダント、麻醉銃Mk-22、ソリトンリーダー、小型無線機コーデックを確認　よし。いいな。

コクピットの腕利きパイロットに礼を言つと、スライドドアを開ける。う……眩しいな。日が強い気がする。赤道付近だからか？

回転を弱めるローターの風に髪をなびかせて、俺に近付いてくる人影が三つあった。

「私は、『FOX HOUND』副部隊長、フェルナンド大佐だ。よろしく、小さな戦士。話はメルルさんと隊長から聞いているよ。今回は、あくまで“個人”として来たんだ。残念ながら『FOX HOUND』の設備や情報網は使えなくてな」

申し訳なさそうに、ぼりぼりと、後ろに撫で付けたグレーの髪を掻く大佐。

中々いい人そうだな。訛りのある英語で、気さくに右手を差し出す中年男性。肌は褐色に日焼けしていて、深緑の軍服をまくり上げて露わになった上腕二頭筋は凄いことになっている。

俺も手を……つて、手袋したままじゃんか！　うーむ、ぴったりだから中々外れない。

「そのままでも構わんよ？」

「いや、……もう、少し……ええつと、コホン。では改めて、ステイード＝スネーク。こちらこそ」

大きくて、ゴツゴツしていて、傷だらけの手。

戦士の風格、と言うものだろうか。彼に、俺の命の一部を任せても良さそうだ。警戒は解かんがな。一応、そう思える。

握手を交わした後、後の女性　美女二名に向き直った。

一人は二十歳くらいの、年上の女性。肩に掛かる金色の髪が、日の光を反射して、鮮やかに煌めいている。

「……ふんふん、あなたがISを使える男なのね」

仄かに香るコロソニン、思わず“やられ”そうになったが、全力で無視&回避！

……。  
いかな。実にけしからん。胸元から除く膨らんだ肌色が特に。

「初めまして、ナターシャ・ファイルスよ。合衆国のISテストパイロットをしているわ。あの人は私と同じ研究所にいてね、出来れば助きたいの。今回はあなたのバックアップとして来たわ」

「よろしく頼む」

「ええ、よろしく坊や。で、こちらが……」

坊や、って。まあ、そうなんだろうけど、なあ。それは置いといて。

ナターシャの直ぐ隣で、落ち付かないのかソワソワしている女性。二十代後半くらいか。プラチナブロンドのショートヘアに白衣を纏った姿は、何処か儂げである。

「あの……私はサニー。科学者です。私もISの開発に関わっていて、ナタルとは友達。……けれど、似てるわ……」  
「は、はあ」

じいー。

興味津津なのか、脚の爪先から頭のとっぺんまで観察されてる。気恥ずかしい。だが……大丈夫だ！

こんなの、IS学園での好奇の視線に比べれば何ともない……！

と、サニーは俺に紺色の布を差し出した。

これは……。

「バンダナ？」

「そう。これあげるから、付けて。きっとあの人も、それを望んでる」

「ありがとう……？」

ふむ。

随分と使い古された様子で、所々ほつれてはいるが。

何故だろう。バンダナが、俺に「早く装着しろ！」と言ってる気

がする。

伸びてきた茶髪を掻き上げ、額に巻き付けた。後ろでギュツと、固く結ぶ。

「……わお！ いいわ、似合ってるわよスネーク！」

「良い物だな。……私も付けければ男前に」

「うん、私の思った通り。……あの人も、昔は……」

意外に好評だ。鏡を見てみたいな、早く。

初の顔合わせが済んだ後、俺達は小さな建物に入ってしまった。

地下作戦室。

プロジェクターの光だけが頼りなこの部屋。俺、ナターシャ、サニーを始めとした作戦スタッフ十数人、それに先程のヘリのパイロットはパイプ椅子に腰掛けていた。前で指示棒を持ったフェルナンド大佐が概要説明をしている。

「今回の作戦は、拉致されたアメリカの『天才ハッカー』を救出することにある。第一目標はこれであるが、第二に敵の情報収集、第三にISのデータ収集だ。まあ、これはオマケ程度で考えてくれればいい。人質の救出が最優先だ」

大佐はリモコンを操作し、地形図と写真　これは発電所？　を

映し出すと、説明を続ける。

「ここは沿岸部の火力複合発電所。三年前に閉鎖されたが、その後外国企業に買い取られた。現在、ここにテロリストが潜伏している。テロリストの数は不明だ。それに、ここでは一般市民が働いている。その点にも気を付けて欲しい。人質はここ、南棟の二階、メインコンピュータールームが、それに隣接した応接室に監禁されていると見て良いだろう」

南棟の見取り図が、スクリーンに表示される。変電所を兼ねた南棟は、地下一階への搬入口、一階の正面玄関、裏口の三つから入れるようだ。ちなみに、二階への階段は正面玄関付近にある。エレベーターも同様だ。けれど、裏口からの方が安全だろう。警備体制にも寄るがな。

裏口、資材倉庫、送電回路施設、ラウンジ、階段。

二階へ到着、メインコンピュータールーム。

と言う流れになる。

発電所の大まかな概要は、北に港とエネルギー資源貯蔵施設。中央に発電施設。そして、俺が潜入する南に変電所と送電施設がある。

「そして、肝心の警備体制だが……」

「ここからは私の出番ですね、大佐」

ナターシャは立ち上がり、大佐は場所を譲る。彼女は慣れた手つきで端末を操作し、幾つかの写真を表示させた。



衛星写真だな。さっきの見取り図と一致する。

「これは、国連を通してメキシコ政府に許可を取った後、うちの研究所で開発した衛星で撮影した写真。流石に建物の中までは見られないけれど。見ての通り、開けた土地の正面玄関は警戒は厳しいわね。裏口は、トラックの出入りに気を付ければ問題無いわ。コンテナも多いから、隠れる場所も多そうよ」

そして、画像が切り替わった。敵兵士のアップ写真か！  
仔月光フンコロガン

でも送り込んだのかな？  
会話中の二人の敵兵は市街戦用の戦闘服に身を包んでいる。手にはM4カービンを抱え、腰にはグレネードと近接戦用ナイフを吊っていた。

「火力発電所だけど、潜入する場所付近に引火するような物はないわ。見つければ、ためらいもなく発砲してくるでしょうね。それに戦闘服の中にはボディーアーマーも着込んでいる様子。麻醉銃の針が届かないかもしれないから、局部を狙ってね」

そして、またもカシヤツと画像が変わる。

敵のISか。

鋭角な深い青色のボディに、大型B7ライフル。そして、背部に格納されたビット。

セシリアのブルー・ティアーズに似てる……そうか、イギリスの機体だつて。するとコイツは後継機に当たるのか？パイロットは無論女みたいだが、如何せんバイザーの所為で顔が見えない。

……唯一除く口が醜悪に吊り上がってるのが、とても印象的だった。

「この写真は、イギリスが提供した第三世代IS強奪直後の写真。  
ロールアウト運用開始前だったのもあって、詳しい情報は開示してくれなかったそうよ。まあ、IS条約なんて曖昧で不十分な物だしね。この時点で判明している装備は、銃剣とビット。大型BTライフルはエネルギー弾、実弾双方に切り替えが可能らしいわ。ビットの情報は、詳しくは入ってない。敵の技量も不明だけど、仮にも第三世代よ、十分気を付けて」

歩哨は最新アーマーを身に着けて、発電所を裏から操作して、あまつさえ奪ったISを展開してきている……。

「随分と豪勢なテロリストだな。資金源は？」

「ごめんなさい、不明なのよ。それに、ISもこの一機だけとは限らない。だから、“見付からないように進む”のが前提条件になるわ」

その言葉に、俺はこくと頷く。

イロイロと不明な点はあるが、それは全て『裏』の話だ。『表』は、「人質救出」と言う、実に単純な話。気にする必要はないはず。

ナターシャは一端室内に明かりを付け、端末を閉じた。

「じゃあ、今度は私から、装備の説明をするわね」

サニー、何時の間に俺の隣へ？

その真っ白な細い人差し指で、俺の腰に装着したホルスターを指さす。

「それは麻醉銃、Mk - 22ハツシユピー。ここにレーザーポインタと減音器サブレッサーがあるから、ポーチに入れておいて。これで狙いが付けやすくなり、発砲音で敵に気付かれることもなくなるわ」

テーブルに置かれた、二種類の筒。

一応、装着してみるか。ホルスターからMk - 22を抜いて、スイッチの付いた筒を手取る。安全装置を掛けたまま、銃身下部にレーザーポインタを取り付けた。

「軽いな」

軽い。軽いのだ。取り回し辛くなるから嫌だと思っただけど。気にならない。誰も居ないことを確認して、壁に銃を向ける。人差し指でスイッチを跳ね上げた。十円玉ほどの赤い点が、白い壁の上をゆらゆら動く。

「次はサブレッサー。ご存じの通り消耗品だから、予備にもう一本持っていて」

「分かった。ありがとう」

レーザーポインタを取り外し、二本のサブレッサーと一緒にポーチへ放り込んだ。

「そして、ソリトリーダー。これは構造上、狭い、音が反響する場所では使えない。注意して」

ソリトンレーダー　確か、衛生から投射したソリトン電波を地上の遮蔽物などに当て、その反射で地形や人の位置を読み取るシステム。かなりデリケートな物だから、攻撃されている間や音が響く場所では使えなくなる。

そつだ、聞きたいことがあつたんだ。

「なあ。このレーダー、人の位置が見えるのは良いとして、どうして敵の『視界』まで分かるんだ？」

レーダーの中央に、自分。その他の赤い点が敵を表すレーダーなのだが、敵の視野まで表示されるのだ。だいたい60°くらいの扇形で。人自体を認識できても、どういう仕組みで視界まで判別できるんだ？

俺の疑問に、さも当然とばかりにサニーが答える。

「ソリトン電波はヒトから発生する微弱な生体電気も感知して、衛生に送るの。当然それだけでは不十分だから、ソリトンレーダー本体からも情報を集める。

生体電気と言っても、当然ヒトの前後では、微妙にだけど誤差が生じる。それを幾つもの衛生から周波数の異なるソリトン電波を使って情報を収集、加えて一番近い本体からも情報を送信することで、相手の正面を割り出すの。

割り出す基本部位は胸　つまり心臓を基本としている。それは直接ヒトの頭部とは関係していないわ。けれど、相手は兵士で、戦闘服を着ている。窮屈な服装の所為で、兵士は自然と、首だけではなく腰を捻って周囲を警戒する。正面の行動・変動パターンをインプットしてあるデータから、適切だと判断された視界データを圧縮

して送信するの。

だから、それなりの精度は持っているけど、完璧ではないわ。あくまで一つの情報として捉えてくれると良いと思う。

「……………分かった？」

「……………」

いや、まあ、その、ねえ？

「分かった？ 汗を掻いてるわ、暑い？」

気温じゃなくて空気の所為ですね。雰囲気で、ええ、気まずいという名の。

じいっと見詰められると、その、とても言い難いんですが。

「……………正直、よく分からなかったんだが」

そこで残念そうな顔をしないで下さい。胸が痛いです。

「……………そうね。少し難しい話だから。スネークはレーダーを使いこなせばいいと思う」

何か、うん、ごめんなさい。

俺が罪悪感に押しつぶされそうになっていると。

「さて諸君。タイムスケジュールの最終確認だ。

この後直ぐ、一五一八時に、《アパッチ》は予定回収ポイントへ移動。

二 時に、スネークは装甲車で発電所へ向かう。

作戦決行は日の出の一時間前だ。人質救出後、速やかにスネークは回収ポイントへ撤退、フルトン回収システムで吊り上げる。

以上だ。何か質問は……よろしい。今の内に装備のチェック、仮眠を取っておいてくれ。解散！」

大佐の一声で、サニーの部下であるスタッフ達はちりぢりに、各自の持ち場へと戻って行ってしまった。大佐も「頼んだぞ、スネーク」と言っただけでドロクンしゃがんだ。

俺は……どうすれば！？ ケネディ宇宙センター 向こうでISの調整もしたし。まあ、

仮眠でも取っておくか。って、仮眠室は何処？

慌てて部屋から飛び出すと、角を曲がっていく金色の髪が見えた。

「お、ナターシャ！ ちょっと良いか？」

「ん？ どうしたの、坊や」

「仮眠室は何処にあるんだ？」

……あれ？ 俺変なこと聞いただろうか。何故に頬を赤らめる？

「……この二階だけど。けれど私の準備もあるし、こまったわあ。そっち方面には疎いと思ったのだけど、案外積極的なのね。お姉さんと一緒に寝たい」なんて」

言っただけ！！

「大丈夫ですから、一人で寝るから！ 場所を教えてください、ありがとうございました！！」

「あら、そう？ 他にも『教えて欲しいこと』があるんじゃない？  
「無い！ じゃ、おやすみなさい！」

逃走じゃない！ 戦略的撤退だ。作戦に支障をきたさないためのな！！

何やら背後で「バアーイ」とか言ってる。

つくづく恐ろしいな。思わず「お願いします」と言いそうになっ  
てないなってないから大丈夫だ落ち着け俺そうノ  
ー問題うん。

ハア……ハア……。ふう。

……寝よう。

016話 キツネの頼み事（後書き）

気が付いたら、PVが10万突破していました！  
皆さん、ありがとうございます！

次回は発電所に潜入！ 上手く書けるかな、不安だ^^；  
PS・フェルナンド大佐のCVは青野武さん。MGSのロイ・キヤンベル役です。

注）MGS OPSじゃないよ。



## 017話 潜入 発電所（前書き）

メタルギアソリッドの小説を読了しました！！

いやー、面白かった。

更新が遅れ気味なのは、この所為ですね、ええ、ごめんなさい…

…。

今回は潜入と言うことで、オリジナル見取り図を上げています。

駄文を補助して貰おうという姑息な手段w

見難いかとは思いますが、一応色分けをしたので。

水色・倉庫。黄色・送電回路施設。

灰色・廊下。桃色・W・C。

緑色・ロビー。青色・オフィス。です！

では、どうぞ。

## 017話 潜入 発電所

駆ける。

闇の中、生い茂る緑の間を足を取られないように走り抜ける。

森全体が闇に飲み込まれていた。

鼻を突く自然の薫りと、葉が擦れる音、生き物の微かな鳴き声。

それに混じった人工的な機械音が、徐々に大きくなっていく。

遠くに、明かりがちらつき始めた。

太い木の幹に身を隠し、そこから覗き込んで発電所の入り口を確認する。

目を凝らし続けると、黒の中にほんやりと、寂れたフェンスが浮かび上がった。

情報通り、通り抜けられそうな破れ目が幾つか見て取れる。

作戦第一段階、終了。とりあえず、一息付けるな。水分補給でもしておこう。

ピピピッ、ピピピッ、ピピッ

「待たせたな。こちらスネーク、南ゲートに到着した」

コーデックを起動させ、連絡を取る。その先は、撤退ポイントに潜んでいるはずのCH-47《チヌーク》だ。別基地からやって来て、作戦スタッフを乗せて運んだらしい。こちらは輸送ヘリのため、様々な機材も積んでいる。

《アパッチ》は、その護衛として配備されたそうだ。

「うむ、予定通りだな。これが初任務とは思えん」

「VR訓練のお陰だ」

「フェンスの裂け目は確認できたか？」

相手は大佐。流石『FOXHOUND』副隊長と言つべきか、落ち着き払つてるなあ。

ちなみに、声は出していない。作戦前、サニーに注入された体内通信機のお陰だ。ナノマシンが耳小骨を振るわせることで、声が聞こえる仕組み。反対に、俺が考えた言葉は電気信号となってナノマシンに読み取られ、それがコーデックを通じて相手に送られるそう  
だ。

初めて使った時は、俺の『心』まで読まれるんじゃないかと心配になったこともあった。現に、夕飯のメニューを想像してたことがばれたしな。慣れてない時は。

「問題無い、これから作戦を開始する」

「了解した。GPSを起動してくれ」

コーデックを操作し、南棟の簡単な見取り図を表示させた。

「作戦に変更はない。裏口から侵入した後、二階へ移動。メインコンピュータールームと応接室を捜索してくれ」  
「分かった」

麻酔銃、よし。胸に下げた《零落白夜・S》、よし。スニーキングスーツ、よし。ソリトンレーダー、よし……。

見張りが居ないことを確認し、俺はフェンスへと駆け出した。

飛び込み前転の後、ホフク前進。

草をかき分け、ズリズリとフェンスの下をくぐり抜ける。

ささつ、と壁際に移動。窓から光が漏れている。気を付けて進むか。

腰を屈め、壁伝いに南棟の北東へと向かった。

#### 発電所・南棟・裏口付近

物音！？ 敵は近いか？

足音を立てないよう、そろり、そろりと、歩を進める。

ソリトンレーダーに反応が。裏口前に一人、敵兵が居るようだ。

風化しかけたコンクリートの壁に背を預け、麻醉銃を抜く。

ポーチからレーザーポインタとサプレッサーを取り出して、素早く装着した。

各部を確認し、安全装置を解除。

落ち着け、気配を消して。風景と、世界と一つになるように、身を委ねるんだ。すう……はあ……。

首だけひょっこりと、壁からのぞき見る。

……俺に背中を向けて、敵さんは船を漕いでいた。

いいのか？ 確かに監視塔の光も届かないから、眠くなるのも分かるんだが。じゃ、まあ、遠慮無く。

音を立てないように敵兵の背後を通り過ぎ、するりと建物内に侵入した。

意外と楽勝かもしれない。

発電所・南棟1F・倉庫

静かに裏口のドアを閉めておいた。何かの拍子に起きて、姿を見られても困るからな。

侵入して直ぐ目の前、情報通り大きなコンテナがあったので、そ

ここに身を隠す。

外とは一転して、倉庫内は明るい。しばらく目を慣らさないといけないな。

……よし、良いだろう。

ひょこつと、顔を覗かせて奥を見る。

敵兵は一人。送電回路施設に繋がるドア付近を巡回している。おかしいな、レーダーの反応は二つある。もう一人は何処だ？

いた！トラックの陰だ。ライトで照らされて伸びた、敵の『影』が床にちらついている。

どうしようか。ハッシュピーでドア付近の兵士を眠らせても良いけれど、それだとトラック裏のもう一人にばれる。

かといって、トラック近くの敵は狙う前に見ることさえ出来ないし。

とりあえず移動するか。

ソリトンレーダーで敵の視界を確認しつつ、もう一つのコンテナへと素早く移動。

と、こんな所に箱詰めにしたグレネードが。

チャフグレネードと、スタングレネード。それぞれ二個ずつある。ラッキー！

そうだ、敵が動かないなら、誘い出せばいい。コレを使って。

俺はリーダーを見詰め、敵の視界が完全に俺から外れるのを待つ。

そして……今だ！

思い切ってコンテナから飛び出し、強い音と光を発生させるスタングレネードを、ピンを抜かずに放り投げた。

狙いは、さつき俺が入った裏口の右隣。今は閉まっているが、トラック二台は優に通れそうな、大きなシャッターだ。

波を打っている金属の壁にぶつかり、狙い通り盛大な金属音を立てる。

その直前に、俺はコンテナの影へと身を潜めた。

「何だ!?!」

「どうした?」

よしよし、見張り二人は言葉を交わし、今の音を疑っている。

やがて、一人はトラックの右側　つまり壁際、もう一人は左側  
こっちはコンテナとの間から回り込んで、警戒しながら進んでいく。

あと、三、二、一。

走れ!

下はコンクリートだけど出来るだけ音を立てないようによう、それでも速く、目的の変電回路施設へ続くドアへと駆け出す。

早くしないと兵士が戻ってくる。急げ。

目下十数メートルを完走し、警戒もそこそこにしてドアを開け放った。

発電所・南棟1F・送電回路施設1F

撤退！！

踵を返すと、直ぐにスライドドアが閉まる。

発電所・南棟1F・倉庫

あ、危ねえ！！

目の前の天井に監視カメラがあったんだよ、自動小銃付きの！

見付かったら最後、警報が鳴ってマシンガンで、ズドン。蜂の巣にされる。

コンテナから駆け出す前は、ソリトンレーダーに映らなかったのだ。ソリトンレーダーは、その精密な情報の表示と引き替えに、探



査範囲がかなり狭い。トラック裏の兵士を補足できたのも、効果範囲ギリギリだったな。注意しないと。

「……異常はないな」

「気のせいかな？」

拙い、見張りが戻ってくる！

レーダーでは、ガンカメラは今ドアを映してるようだから、中には入れない。

かといって、コンテナまで戻ろうにも、途中で敵に見付かってしまふ。

どうする、どうする？

ぶわっと、今日初めて嫌な汗を掻いた。

辺りを見回しても、隠れられそうな場所は……。

あった！　トラックの荷台が開いている！

音を立てないように近付き、Mk-22を持っていない左手で身体を押し上げ、薄暗いトラックに身を隠した。

ささっと、俺の腰ぐらゐまである『段ボール』の裏にしゃがみ込む。

じっと、息を殺した。

さてどうしようか。

さっきと同じ手は使えない。二回も不審な物音がしたら、流石に怪しすぎるだろう。別の方法で気をそらさないと……思い付かないな。

ハッシュピーで眠らせるしかないか。

「……しかし、幻聴か。眠気が……もう限界だぜ」  
「頑張れよ。あと五〇分で夜明けだ。そうしたら仮眠が取れるさ」

定位置に戻った途端だべりだした敵兵に、俺はどうすることも出来ない。

ここで片方を眠らせたなら、確実に会話が途切れて、確実に応援を呼ばれる。それは嫌だ。かなり厄介そうだから。

今のうちに、トラックの積荷でも物色するか。えーっと、C4爆弾に起爆リモコン。クレイモア地雷に暗視ゴーグルか。暗視ゴーグルを貰っていこう。脱出は夜明け前になるだろうしな。

ビビビッ、ビビビッ……カチャツ。

『スネーク、暗視ゴーグルを手に入れたのね』  
「ナターシャか」

作戦バックアップって言ったな。メカニックじゃないけれど、こういうことにも詳しいらしい。専門家はサニーだが、ソリトンリーダーの情報処理とモニタリングで忙しいそうだ。

丁度良いから、話し相手になつて貰おう。

「どうした？ 作戦変更か？」

『違うわ、ちよつとした忠告。その暗視ゴーグル、使うためにはバッテリーが必要なの』

「そのようだな」

バッテリーを入れるための、小さな凹みが開いている。つて、まさか。

「レーダーと一緒に使えない？」

ソリトンレーダーの中に入っているバッテリー一個しか貰つてないぞ！？

『ご明察。それにもちろん、電力もシェアしてね。生体電気で回復できるようになってるけど、そのゴーグルは旧式みたいだから、消耗もかなり早いわ。気を付けて』

「了解……次からはもう一個持つていこう」  
『頑張つて』

カチャツ。

溜息を吐き……かけて堪えた！ 敵はまだいるぞ、気を付ける。

しかし、なんてこつた。逃走中に付けることは不可能だな。まあ、電波障害でソリトンレーダーが使い物にならなくなつたら別だけど。

「つたく……ダメだ、俺は一服するぜ」

「ほどほどにしとけよ。俺は煙がダメなんだ」

「外に行くさ」

トラックの横を巡回している敵が、ルートを外れて裏口へ向かった。

コイツは好都合。煙草は吸ったこと無いが、おそらく十分くらいだろう。戻ってきて仲間が見当たらなくても、トイレに行っただと思えば不思議じゃない。

『段ボール』から顔の上半分だけを出して、敵を確認。

麻醉銃を構え、レーザーポインタを合わせる。

眠いんだったら、俺が眠らせてやる。

トリガー。

軽い反動。

ドアの前で大あくびをする奴の首筋に、白い注射器が突き刺さる。

そして崩れ落ちる敵を担ぎ上げ、トラックへ押し込む。コイツ…  
…重い。

おっ、カロリーメイト持ってるじゃんか！ 貰っていこう！ へっへっへ。

黄色い箱をポーチに放り込み、レーザーでカメラの認識範囲が俺から逸れているのを確認し、銃を構える。

音もなく、自動でスライドドアが開いた。

発電所・南棟1F・送電回路施設1F

ドアが開くのとほぼ同時に、ガンカメラのレンズを撃ち抜いた。

これで補足される心配はない。早く進もう。

ここは変電回路施設の空中回廊みたいな物だ。足場には一面金網が張っており、眼下が見渡せる。足音が響くな、ここで走るわけにはいかない。

俺が背を預けている機械には、何本もの配線が剥き出しになって入り乱れている。修理中みたいだ。うっかり千切らないようにしないと。

変電所のメインは、右手の階段を下りた地下一階だ。けれど、俺には関係ない。目的地は二階だ。上へと続く階段はまだ遠い。

レーダーの敵反応は下からで、同じ階には居ないな。順調、順調。

ゆっくりと自分の影に気を付けながら、でーんと中央に陣取っている機械と、白いパイプの間を抜ける。

音を出さず立って、続く廊下へと足を踏み出した。

……拙いな、隠れる場所がない。

所々タイルが欠けている廊下は、これでもかと言うほど殺風景だ。

ビビビッ、ビビビッ……カチャツ。

「スネーク、そこには身を潜める場所がない。注意して進むんだ」  
「だが、リーダーでは全域を見渡せられない」

ソリトンリーダーの弱点だ。一応使えるが、廊下は音が反響して敵の足音を聞き取ることが難しい。それに廊下は「コ」を左右反対にした形になっている。敵の人数すら把握できないのは痛いな。

「そこでだ、スネーク。《ロッカー》を使い」

「……大佐？ 今は任務中なんだが」

「私は冗談を言っているわけではない。本気だスネーク。君も知ってるだろう？ 古来、数々の潜入作業員達が《ロッカー》を利用して任務を遂行してきたのだ。その中に隠れて敵の目を欺き、時には戸を外して盾に利用する。「《ロッカー》を制する者はスニーキングを制す」という言葉にある通りだ」

はて。そんな諺はないはずだ。少なくとも、アメリカと日本にはそれにしても、何故にこうも《ロッカー》を薦めるんだ？

「ところでスネーク。君は映画を見るかね？」

え、映画？ まあ、見ることは見るが……。

「戦争物とかはよく見たな。アクション物とか……」

『“007”は?』

「は?」

『“007”は見たのかと聞いているんだ』

あれ、俺こんな話してて良いのかな。

でも大佐必死だ。答えるてあげるか。

「……一応見たぞ。うる覚えだが」

『なにいい!!?』

ええー。いきなり怒鳴られた。理不尽だろう。

『よし分かった、帰ってきたら鑑賞会を開くぞ。今回の作戦の慰労を兼ねてな。その後、私が直々に“007”の魅力を語ってやろう。2020年に上映された「新訳」も含めて……な、ナターシャ何をする。私は今大事な話をああつ! サニー、無線を返し』

『スネーク!? こっちは何とかするから任務に戻って! 良いわ

ね!?!』

「……………あ、ああ」

君達は“007”の魅力を知らないからそのような態度を取っていられるんだ! だから君達も……なんだその目は。いいさ! 私の講義を聴き終わったら翌日レンタルビデオ屋の一部の棚が空白に変わるのだ! せいぜい今のうちに。

『い・い・わ・ね・?』

「了解つ!!!」

カチャッ。

何だっただ、一体。

まあ、大分緊張がほぐれてからよくねえ！ 夜明けの予定まであと四十分しかないじゃないか！！

気を取り直して、廊下を進む。右手はトイレらしい。

リーダーの反応は男子トイレの中からだ。用を足してるのかな。よし、今のうちに。

ガチャ。

まさかのトイレ前で鉢合わせ！？ 敵は目を見開いている。

「な、誰だ」

拙い。近すぎる所為で銃は使えそうもない。

軽く腰を落とし、拳を握り締める。

得意のパンチ・パンチ・キックを繰り出した。短い悲鳴を上げて、敵兵はピンク色のハンカチを握り締めたまま昏倒する。……シュールだ。

って。リーダーが上手く作動していないのか？ 敵兵の位置もおかしいままだし。コーデックで、サニーにCALLする。





直感を頼りに進むか。

グレネードのピンを引き抜きつつ、地図を確認する。正面玄関とオフィス内の兵士に気を付ければ、接触しないで二階へ昇れそうだ。

カメラの認識範囲を見極めて……外れた瞬間、パシュツと開いた自動ドアからグレネードを投げ込んだ。

ポン。

小さな破裂音と共に、キラキラした金属片が当たりに舞い散る。タイムリミットは、金属が全て地面に落ちるまでだ。

発電所・南棟1F・ロビー

腰を屈めて、小走りに駆け抜ける。

幸い、玄関前の敵は気付いていない。チャフを使ったことがバレると拙いから、眠っていて貰おう。

両腕で銃を構え、一発で首筋にヒットさせる。

当たった部位だけ確認して、俺は左折し、上り階段を駆け上がった。

背後で、重い物が倒れた音が響く。

「……………は？」

「今のところ、異常はありません」

階段を上ると、話し声が聞こえた。壁に背を預け、片膝立ちで耳を澄ます。

白衣を着た研究者かな。少なくとも、作業着を着る発電所の人間じゃ無さそうだ。

「BB部隊はどうだ？」

「順調です。ジェットブラック・レイヴンの整備は完了し、搭乗者は調整槽に入っています。命令を受ければ、直ぐにでも出撃できるかと」

「よし、上出来だ」

BB部隊？ 確かSOPシステムが生きていた2014年当時、PMCが雇っていた最強の傭兵部隊の名だ。

BB ビューティー・アンド・ビースト。美女と野獣とはその通り、四人で構成されているその部隊は、全員が絶世の美女だったそうだ。だが、実際に見た者はいないらしい。部隊全員、防具はフルフェイスだったそうだからだ。

彼女たちは、特殊なパワード・スーツに身を包んでいた。背中から何本も伸びる触手、一對の翼、数多の腕。さらには、四足歩行ユニットまで使っていたとか。しかし、部隊は壊滅させられたそうだ。誰が、までは分からないが。

そして、彼女たちは全員、“強化”されていた。

コイツら、その部隊をもじっているのか？ それとも……。

「奴はどうした？」

「ああ、非協力的だからな。そこの『応接室2』にぶち込んである  
「よ

奴……もしかして、例の『ハッカー』か？

研究者二人がコンピュータールーム前から動く気配はない。

「さて、仕事に戻るか」

「そうだな、私も変電所の修理に戻るとしよう。ではな」

一人はCPU室に姿を消し。

もう一人は、踵を鳴らして階段へ 俺の方へやってくる。

あと少し、情報を引っ張り出すか。

胸からCQCナイフとしても使える《零落白夜・S》を、静かに  
抜く。

息を、殺して。

コツッ。

飛び出す。

状況について行けていないらしい研究者にぶつかり、体勢を崩す。

そのまま脇を走り抜け、背後を取って羽交い締めにした。

声が出せないよう、頸動脈を押さえ込む。

ナイフを向けて、締め付ける力を僅かに緩めた。

「さっきの話、詳しく聞かせて貰おうか」

青ざめた顔の男は、ぎよろつく目をナイフの切っ先に釘付けにし、唇をわなわなと震わせている。

「た、頼む。殺さないでくれ」

決まり文句だな。面白いジョークをかませる奴は居ないのかね。居ないか。誰だって命は惜しいからな、うん。

「お前達が攫った『ハツカー』は何処にいる？」

「お、『応接室2』だ。廊下を真っ直ぐ行って、右に曲がった突き当たりだ」

「そいつは耳寄りな情報だ、なっ」

「……………！ はふう」

首締めの後気絶させて、床に横たえる。白衣を物色して…………あつ

た、レベル3のキーか。応接室は開くかね？ 行くしかないか。

回復したレーダーに寄ると、廊下に人はいないらしい。

警戒もほどほどに、俺は廊下を走り抜けた。

発電所・南棟2F・応接室2前

難なく、『応接室2』と書いたプレートが貼り付けてあるドアの前に辿り着いた。

腰くらいの高さに、カード式の認証システムがある。と言っか、この時代にカードって……古い。

淡く光る青色のカードをシステムに通そうと。

『待ちたまえ』

……！！ 今のは……部屋の中？

新たに監視窓が取り付けられた木造ドアの向こう側から、くぐもった声がした。思い切って、声をかけてみる。

「誰か居るのか？」

返事はない。どうしたんだ？

『……君は、誰だ？ まだ子供のようだが』

俺から部屋の中の人物は見えないが、何故か見えているらしい。

性別は判断できないけど、高校生くらいの、若干高音が混じった声だ。さっき尋問した内容と合わせて、この人物が人質だろう。

一先ず、自己紹介といくか。

「君を助けに来た、『天才ハッカー』。俺はスネークだ」

『ふむ、蛇とな。暗号名か？』

「……………」

名前、とは言えなかった。流石に。

『了解した、スネーク。ただ一つ言っておくことがあるとすれば、この部屋にはプラスチック爆弾と赤外線センサーが取り付けられている。それは青いカードなのだろうか？ それでは解除できない』

爆弾と、センサー！？

あ、あの研究者！俺を嵌めようとしやがった。ふう……………、危うく人質と一緒に灰になる所だった。

断じて、俺が早まって首を絞めた所為じゃない。

『時に、スネーク』

「……………何だ？」

さて、どうしよう。一端サニーに連絡を取るべきだな。何か解決策があるかも。

で、彼……彼女？ はどうしたんだ？ 何故か黙ってしまった。  
これはあれか、俺に会話を振っているのか？ いや、無茶ぶりにも  
程がある。

俺が心の中で葛藤していると。

『君も、オタクかね』

「……はい？」

奇天烈な質問がやってきました。



017話 潜入 発電所（後書き）

『天才ハッカー』登場（声だけ）

まだアンケートの締め切り前なので、性別は明かしてません！

口調はアレですが、CVはオタコンそのままです。ちょっと無理があるか…

やや後半だれ気味だった気がするorz

今のところ加筆する予定はないですが、感想にてw

017・5話 挿絵とお知らせ(前書き)

今回はタイトル通り、挿絵とお知らせです。

挿絵表示をONにしてご覧下さいませm( )m

017・5話 挿絵とお知らせ

「待たせたな。こちらスネーク、南ゲートに到着した」

.....

あつた！ トラックの荷台が開いている！

音を立てないように近付き、Mk-22を持っていない左手で身体を押し上げ、薄暗いトラックに身を隠した。

ささつと、俺の腰ぐらゐまである『段ボール』の裏にしゃがみ込む。

じつと、息を殺した。

> i 2 6 7 0 9 | 3 4 4 4 <

挿絵投下!!!

タブレットが……欲しい……。

誹謗中傷は勘弁下さい……。

そして、ご要望があれば描きます！ 感想にてご意見をば。

017・5話 挿絵とお知らせ(後書き)

お知らせ

こんにちは。

いつも私めの他愛もない小説にお付き合いいただき、有り難うございます。

皆様からのご意見・ご感想、作者の励みになっております。で、この度ですが。

専用ノートPCのネット接続が切られましたwww

今回は、家族共用のPCより投稿しています。

成績不振というバカみたいですが切実な現実に直面しました故…。

で、ですね。

一太郎は使えますので、基本的な問題はありません。が。

MGSもISも、ウィキで調べられない……。

鬼畜ですね。俺の携帯はパケホでないのです。現代高校生なのにねw

辛い。電子辞書を使い、MGS3の説明書裏の年表を使い、やっていくつもりですが。

投稿ペースが格段に落ちそうなのは免れなさそうです。

あ、絵は描けますよ。PIXIAとスキャナとマウスはあるのでW誠に勝手ですが、ご理解のほどをよろしく願います。

018話 C4(前書き)

m ( | | ) m

皆さんごめんなさい！

なんやかんやで一ヶ月放置……。うん、サイテーだな、俺。

駄作ですが、今後もどうかよろしくお願いします……

発電所・南棟2F・応接室2前

ビビビッ、ビビビッ……カチャ。

「こちらスネーク。サニー、聞こえるか？」

『良好よ、スネーク』

「人質が監禁されている部屋を発見した。人質も無事だ。だが、部屋の中に赤外線センサーと爆弾が仕掛けてあつて手出しが出来ん」

『分かった……。室内の状況をスキャンする必要があるわ。スネーク、コーデックを外して、部屋の前に置いて。後はこちらから解析する』

了解、と頷くと、俺は右腕から無線機を取り外した。よく分からないけど……地面に置いてみる。すると……おお！何か振動しました……！！

『私だ。スキャン中にコーデックを動かすと最初からやり直しになる。敵に見付かった場合も同様だ』  
ナンダッテ。

『研究者がその辺りをうろつくだろうが……頑張ってくれ。じゃ』

ちよっ……大佐？

大佐アアアーーーーー!!!!

なんと言うことだ！ 隠れる場所なんか無いし、CPU室に続く廊下から角を曲がったら丸見えだ。つたく、最近損な役回りばっかだな！！

壁際ギリギリに背を預け、頭上と一つ向こうの照明を撃ち抜く。パリン、と小気味いい音がして、応接室前は闇に落ちた。

ホフク状態になり、Mk-22を角に向ける。これで俺からは明かりでよく見え、反対に向こうは闇の所為で見えないはずだ。何とかなる。

後数発を残すのみとなった弾倉を捨て、新たにポーチからマガジンを取り出し、リロードを終えた。

『解析、終了したわ』

実際は一分と経ってはいなかったろうが、俺には何倍も時間が流れたように感じられた。先程白髪頭の研究員が首をかしげてやって来た時なんか、心臓が止まりそうになったからな。ちなみに今は、仮眠を取って貰っている。

「結果は？」

『……赤外線センサーに触れた時点で爆発する仕組みだけど、どうやら、それが二個あるらしいの。天井裏にあるようね。けれど……』

言い淀むサニー。ここ数日、厄日が続いてるんだらうか。勘弁願

いたい物だ、全く。

「それで？」

『同時に爆弾を解除しないと、爆発するようにプログラムされてる。止める方法は、最高レベルのセキュリティカードをスキャンさせる。これは探してる時間が無さそうだから却下。それか、建物全体の電気供給を止めるしかないと思う』

#### 発電所・南棟1F・ロビー

最後のチャフグレネードを使い、ガンカメラの目を盗んで俺は階段を駆け下りた。よし、麻酔はまだ効いてるようだ。玄関前の敵は眠りこけている。

でも、安心しては居られない。始めに眠らせてトラックに放り込んだ奴は、もうそろそろ目を覚ますだろう。早くしなければ。

中腰になって、廊下へと続くドアを駆け抜けた。

作戦はこうだ。

建物全体の電気を止める。

幸い、ここは変電施設。なら、最下層B1階にある変電装置を吹っ飛ばせばいい。……という実に荒っぽい作戦が『FOXHOUND』副隊長様から下された。

そこで注意しなければならぬのが、吹き飛ばす対象。

情報によれば、送電回路？？？は、そのまま南の街に繋がっているのだとか。それまで木っ端微塵にしてしまえば、メキシコは大規



模停电に陥る。そんな事態は、作戦スタッフのだれも望んではない。  
い。

と、言うわけで。俺は『変電機?』だけを破壊しなければいけない。  
い。

当然一度破壊すれば予備電源に切り替わるが、応接室の爆弾は手で再起動させないといけない仕様らしい。実に単純な話だ。

だがこれがまた難題で、敵の見張りが居るであろう変電室内を、各変電機に付けられた小さなタグを確認するために走り回らなきゃならないのである。ああ、めんどくさい。

加え、破壊するために必要な爆薬を、さっきの倉庫まで取りに行かなければならない。C4を置いて、何故か掴んでしまった役立たずの暗視ゴーグルを睨み付けるも、ゴーグルが遠隔操作で爆発してくれるはずもなく。

己の要領の悪さを、これ程呪ったことはなかった。

発電所・南棟1F・廊下

走り抜ける。

一応、ロッカーの中を覗いておこうか。ロッカーに詰め込んだピクハンカチ持ちは、もそもそし出していたので、麻酔針を突き刺しておいた。

発電所・南棟1F・送電回路施設

音を立てないように金網の上を通過し、ガンカメラに捉えられないよう、壁に密着。ソリトンリーダーを確認してから飛び出した。ローリングをして、倉庫に入る。

発電所・南棟1F・倉庫

無音で、トラックの中に飛び込む。敵さん、気持ちよさそうに「おねんね」してくれていて良かった。脇を通過し、段ボールの裏に隠れる。ふう、と、一つ溜息。

段ボールの脇の、確かこちら辺に……あつたあつた。前、箒が学食で頬張っていたヨウカンみたいな形のC4爆弾とリモコンを、ポーチに放り込む。

ソリトンリーダーを確認。敵兵が一人巡回しているけど、視界は明後日の方を向いている。よし、今の………は、ふえ……。鼻が、ムズムズし出して、拙いことになりそうな予感が

「へえックシ!!」

トラックの中くらいキッチンと掃除しとけやあああああああ!!  
(埃まみれ)

『何だ？ 今の音は』

呪詛の言葉を内心呟き、チラツとリーダーを確認。  
すると同時、箱の影から飛び出した。会敵はおそらく、トラック

の荷入れ口付近。

全力で脚を動かし……。人影が横切った！

ダンッ、と右足で思いつきり踏み込む。

「誰かいるのうわぁ！」

荷台を覗き込んだ敵兵。

俺はそれ程ジャンプしていないが、トラックと地面の高低差で丁度、敵の顔面が折り曲げた膝の位置に。

チエイサアアアアアアアアアア！！

ゴキッ。

「あべしっ」

うわ……。めり込み方が予想以上だった。鼻は確実に折れてるだろうな。

左膝を敵の顔面から引き抜き、受け身を取って着地。

素早く顔を上げると、真っ赤な花を咲かせながら、敵はもんどり打って倒れた。アーメン。

ぐったりする敵兵を引きずって、トラックの陰に隠した。もたもたしては居られん。じきに夜が明けてしまう。

踵を返し、目的地へと走り出した。

発電所・南棟1F・送電回路施設

砕けたレンズから火花を散らすガンカメラを横目に、ハツシユピ  
ーを構えながら慎重に進む。壁に背を預け、覗き込んで確認。よし、  
階段の下に人影は見えない。

ここから先は、まだ行ったことがない場所だ。一時たりとも弛め  
たつもりはないが、ここで改めて、気をぐっと引き締める。

足音を立てないように、鉄筋で作られた簡素な階段を下りた。

ビビビッ、ビビビッ……カチャ

「こちらスネーク。送電回路施設に到着した」

『うむ……。多少のイレギュラーはあったが、許容範囲だ。わかっ  
ていると思うが、「変電機？」だけを破壊してくれ。街に被害を出  
すのは避けたい』

『サニーよ。今そちらに施設の地図を送るわ』

「了解……。よし、受け取った。ん？ 番号はわからないのか」

マップは、折り紙を縦二枚、横二枚に隙間無く並べたような正方  
形。各折り紙の真ん中に、変電機と思われる装置が赤く塗られてい  
る。

するとサニーは申し訳なさそうに声を落として、

『ええ、ごめんなさい。発電所の設計当時は順番に並べられていた  
ようなんだけど、改修と増設でごちゃごちゃになったのよ。初期の  
設計図には載っていたけど、それには変電機は三つしかなかった。  
不確定要素を信じるわけにはいかないの。ただ、「？」と呼ばれて  
いる物が施設に繋がっているのは確かよ』

「いや、その通りだな。幸い四つの内の一つを引き当てれば良いだけだ。確率はサイコロより高い、直ぐに終わらせる」

階下に降りた俺は一息ついて、ほのかに照らされる送電回路施設を睨み付けた。

#### 発電所・南棟B1・送電回路施設

敢えて言おう。

今日は厄日らしい。

「何故だ……三つともハズレってどんなん」  
『す、スネーク……ポジティブに考えるのよ！ 次で最後、外すことは絶対ないわ！』

励ましてるようで、声が小刻みに震えてやがる。……ナターシャさんに当たっても仕方ないことはわかってるんだが、はあ……………。

長時間の緊張は、精神的疲労は勿論、肉体的にも大きな負荷が掛かる。「心身一体」と言えばいいのだろうか、心から巻き起こる感情 怒り、恐怖、緊張……喜悦、愛情、歓楽 は、良くも悪くも肉体に影響する。

流石に疲労困憊とまではいかないが、俺のパフォーマンスが落ちてきていることは感じていた。銃の重みを、より感じやすくなっている。

ギリ貧はマズイ、長引けば撤退の時に支障が出るかもしれない。

しかし、美味しいなカロリーメイト。うん、特にメープル味は至高と言っても過言ではないな。数ある味の中で、唯一飲み物無しで食えるんじゃないか？

ちなみにコレ、さっき倒した敵兵から奪ったもの。軍用レーションは……昔に比べれば大分改良されたとは言え、コレには敵わないしな。一応ポーチに入っている。

他にはスモークグレネード二個、チャフグレネード一個。

ぼりぼりぼり……ゴクン。

よっ、と背を預けていた『変電機？』から立ち上がり、スニーカーングスーツにくつついたクツキーの滓を払い落とす。黄色い箱と包装をその場に放置し、俺はMk-22と『零落白夜・S』を手に、腰を屈めて歩き出した。

俯せで寝息を立てている敵兵を跨ぎ、最後の目的地　北西の変電機に向かう。

脚を忍ばせ、スルリと配電盤の影へ。

通路は細く、人一人通るのがやっとだ。とてもここで格闘戦なんぞしたくない。代わりと言っては何だが、その細い通路が暮盤のようになんとも走っている。大まかな地図はあるものの、ソリトンレーダーは機能していない。狭い通路に音が反響してしまうため、正確な座標が特定できないのだ。

五感＋第六感を頼りに、両側を継ぎ目が走る白い壁に挟まれながら、前へ前へと歩き続ける。心臓に悪いことこの上ないが、集中を乱すわけにはいかない。

血眼になりながらもリラックス　相反する所行を二分ほど続け。以降敵とは接触することなく、目的地へと転がり込んだ。

ここか……？　作業員も敵兵も居ないことを確認し、変電機があ

る、少し開けた場所へ滑り込んだ。機材を跳び越え、視界の端に捕らえた監視カメラを撃ち抜く。

警報装置が鳴らないことに、一先ず胸をなで下ろし。変電機を、正確には何処かに括り付けられたプレートを入念に探し　あつた！

そこにはきつちりと、『変電機？』の文字が。

よっしやーーーーー！！

ニヤツと口角を吊り上げ、手頃な場所にC4をセット。軽い電子音が鳴り響く。

うっし、後は大佐に連絡取って、また二階に上がるだけ

「ッ！」

殺気。ではない。

無機質な、冷たい、嘗め回すような、「視線」。

反射的に振り返った先には、

真つ黒な球体から、腕が生えた物体。

「ふ、仔月光フシコロガシ……！！」

変電機？がある小部屋の入り口に、ソイツは佇んでいた。

小さな駆動音を響かせ、大きなレンズがせわしなく拡大・縮小を繰り返す。

マズッ！　彼我の差十メートル、間に合わない、Mk-22では破壊できない、反射的にチャフグレネードを取り出し、ピンを抜こうと

一瞬、あるいはもないのに、仔月光の身体が強張ったように見え  
た。

そして。

警報装置がけたたましくがなり散らす。

舌打ちを一つ、チャフグレネードを小月光に投げつけた。  
巻き起こる電波障害の中、呪詛と共に憎たらしい球体を蹴り飛ば  
す。

完全な八つ当たり、しかも右脚に激痛という割に合わない思いを  
しながら、俺は脱兎の如く駆け出した。遠くでは、野太い男の怒声  
が響いている。

どうする!?

間違いなく出入口は固められるはず。狭い通路では不意を打た  
れやすく、戦闘には不向き。CQCも満足に使えないだろう。何か  
無いか？ 脱出する方法は……

ポーチをまさぐると、覗いたのはスモークグレネード二個、暗視  
ゴーグル、予備のC4、起爆リモコン、軍用レーション、MAG A  
ZINE<sup>ほん</sup>……。

言い訳はしない。

使えそうなのは、スモークグレネードか。C4は下手すると他の  
変電機を傷つけて、街を停電にしてしまう。同様の理由でISも却  
下。

何かが、引つかかった。

「……………そうか、停電だ」



脳内でガチツ、と歯車が噛み合った音がして。

同時、俺は役立たずになったソリトンレーダーからバッテリーを取り外し、暗視ゴーグルにはめ込む。素早く頭に括り付け、スイッチをONにした。

自動明度調節で、明るい場所でも目を痛める心配はない。

次いで、ポーチから起爆リモコンを取り出す。

問題は、予備電源が付くまで、どれだけ距離を稼げるか。

不確定要素が苦みとなって口に広がる。その全てを噛み潰し、決意と共に、

ボタンを、押し込んだ。

後方で轟く、爆音。

そして、変電所は闇に落ちた。

018話 C4 (後書き)

済みませんでした(汗

隙を突いての投稿ですが、やはり今後も不定期に……。さすがに一ヶ月放置は回避したいと思っております。

一身上の都合で申し訳ありません。重ね重ね、お詫びを申し上げます。

019話 強襲(前書き)

「フォックス  
FOX.....」

「ダイ  
DIE.....」

「.....じゃな——いつ——!」

走る。

暗視ゴーグルによって、黄緑に塗り替えられた世界を、ひたすら走り続ける。

この暗闇に加え、変電機に傷は付けられない。無闇な発砲は控えるはずだ。

……何故だろう。不思議な感覚だ。

今まで感じたことのない、体の奥底からわき上がる、熱。

その熱に当てられながらも、いつもよりも冷え切っていく、思考。

子供っぽい感情はすべて脳の端に追いやられ、大部分を占拠するのは、兵士としてひたすらに、任務の達成と自らの生を求める粘り強い執着心。

俺の中身が変わっていく。

これも、この身体で五歳児という、俺の発育過剰の弊害か？

と、目の前がフラッシュした。

強烈な白。

懐中電灯……いや、フラッシュライト！

霞む視界の中、幾度も瞬きして咄嗟に物陰へ潜む。

フラッシュライトは、カメラのストロボの強力版。たとえばいいだろうか。強烈な光を照射する事で、相手の視界をくらます非殺傷武器。

暗視ゴーグル付けててよかった。急には無理だが、暗視ゴーグルには光量調節機能がついている。ライト自体直接向けられたわけじゃないが、幾分か視力は落とされていたはずだ。

敵兵が慌ただしく駆けていく間、じつと息を潜める。

空間に身を融かすのだ。軽く自己暗示をかけて、植物の下の土のように、木の枝にくっついた葉のように。そこにあるのが自然、当然のように、呼吸を同調させる。

世界に身を委ねる。

こつすると、自然と外界の情報も、こちらに入ってくるのだ。

世界が、俺に付いている。

……行ったな。

一息つき、身体を取り戻す。地を蹴って、駆け出した。

目指すは、ロックの外れた応接室。

発電所・南棟1F・廊下

『いたか！？ 警戒態勢を強化しろ！！』

『B班は待機！ A、C班は俺に続け！』

関の声と共に、多くの足音と金属の擦れ合う異音が、トイレの敷居に身を潜めている俺の耳に届く。二班はやり過ぎせるとして、B班は無理そうだな。

電気は未だ、回復しない。

ビビビッ、ビビビッ……

『スネーク！？』

『サニーか？ 悪いが今忙し』

『変電システムにハックをかけたの。後十数秒で電気が戻る……力ウント十秒……今！』 コーデックのデジタル時計を確認。

9

『了解、通信を終える』

8

『気を付けて』 『ああ』

7

足音は完全に通り過ぎた。素早くチェックし、廊下へ飛び出す。

6

視界は一面緑色で、熱を持った物体は何一つ無い。

5

Mk-22を構えて半身で前屈みになり、神経を研ぎ澄ませてサ  
イレントウォークを続ける。

4

壁に背を預け、呼吸を整える。ただ胸の内にある、『己への忠  
だけを信じ。』

3

人間の視力が極端に下がるのは、何も急に明所から暗所へ移った  
ときだけではない。

その逆もまた然りだ。虹彩の調節を待たなければならぬ。

2

しかし、それ相応の対策……暗視ゴーグルを使えば、ごく僅かな  
アドバンテージが得られる。が、それもほんの数秒にも満たないだ  
ろ。

1

だが、俺にはそれで十分だ。

0

地を蹴って、角から飛び出す。

視界の緑がパツと薄くなった。電気が付いたのだ。

左腕で暗視ゴーグルを跳ね上げる。どのみち、バッテリーがもう無い。クリアな視界の中、浮かび上がった敵影は、

五人。

予想以上に多い！ 舌打ちすらする余裕もなく、手近な覆面兵士に突っ込む。

敵全員が抱えるM4カービンの銃口は、全て下がったままだ。こちらは予想通り、目眩ましが成功したようだ。

肉薄。敵の背後に右脚を滑り込ませ、右腕を伸ばしきって、敵兵の胸板に叩き付けた。勢いそのまま俺の右脚に引っ掛かり、敵は面白いくらいあっけなく突き倒される。防弾服に弾倉複数、M4カービンに各種装備の重量も加速を手伝い、もの凄い勢いで白い床にひっくり返った。情けない悲鳴が漏れる。

先ずは、一人。



今度は、俺から見て左側の壁に近い敵兵に狙いを定める。ようやく状況を飲み込みだしたのか、慌てて銃を構えだした。これが、不意打ちの限界か。

走り込み、右脚を突き出す。今度は、壁と敵の間に差し入れるように。俺は一瞬立ち止まり、走ったスピードを、腰の回転に移して、「ふっ！」

駒のように右腕を振り回し、敵の首を刈り取る。引き倒された敵は、地面に辿り着く前に壁と熱いキスをした。ズリズリと、壊れた人形のように崩れ落ちる。

すかさず拳銃を構え、細かい狙いは付けずに引き金を絞った。案の定、敵には当たらず、白い壁に注射器が突き刺さり、麻酔液が飛び散る。問題無い。撃った目的は無力化ではなく、時間稼ぎなのだから。

向けられた銃口と近距離の着弾。差し迫る死の恐怖からか、敵は一瞬動きを鈍らせた。敵兵に躍りかかり、抵抗される前に身体の自由を奪う。今度は直ぐに投げ飛ばしたりしない。奇襲のアドバンテージは消失し、今は数の面で不利な状況に立たされている。

捕まえた敵の喉に《零落白夜・S》を突きつけ、Mk-22は抜け目なく敵二人を狙う。M4カービンを構えてにじり寄る敵兵。

その時。

パッと一人がM4を下ろし、駆け出しながら腰に手を当てていた。

ナイフ……近接攻撃か。

だが、やらせんよ！

敵が俺に斬りかかる前に、拘束した敵兵の脚を引っかけ、押し倒す。走り込んだ敵を、巻き込むように調整して。

「うわああああ！！」

間髪入れずに、俺もしゃがむ。

くんずほぐれつで倒れ込む敵兵、その向こうで輝くマズルフラッシュ。

頭上を火線が駆け抜けた。

遅れて響く銃声。

素早くMk-22で狙いを定め、掃射した敵のシルエットへダブルタップをお見舞いした。高速で放たれた二つの麻酔弾は、胸と首筋に音もなく突き刺さる。

銃声が止んだのを確認し、警戒しながら立ち上がる。平衡感覚が鈍って居るであろう敵二人には、銃床で眠って貰った。

荷物漁りでもしたいが、今は時間がない……

敵影は皆無。

皆、変電機の方へ行っただろう。が、研究者はいるかもしれない。見つければ悲鳴を上げられるだろう。敵の行動が不規則に変化した状況でのスニーキングは、困難を極める。

かといって、隠れてほとぼりが冷めるのを待つ、というのは無しだ。

無論、敵I Sの所為。

奴が現れる前に、フロリダへ舞い戻る必要がある。

これさえなければ……。ぼやいても仕方がないが。

さつさと『ハッカー』を確保してトングラしよう。そうしよう。

発電所・南棟2F・応接室2前

チェックとクリアを繰り返し、問題なく件の監禁室に到着した。

……けど、ホントに開けていいんだろうか。これで爆発とかしたら……いや、流石にそれはないだろう。けど……今日厄日みたいだしな。

C A L L

頼んだぞ、サニー！！

「スネーク？」

「サニー、本当に爆弾は大丈夫なんだろうな？」

「ちよつと待って……」

「サーは切れてる」

「けど、ブービートラップもあるかもしれないわ、気をつけてね」

「成る程な……。助かった。サニー、ナターシャ」

「ガンバって、スネーク」

そうだな……。何も、センサーだけがトラップの全てじゃない。

監禁室にトラップ、というのも解せないが、二重で爆薬を仕掛ける連中だ。注意するに越したことはないからな。

唯一回復していたドアロックに、青いカードをスキャンさせる。

小さな電子音の後で、カチャツとロックの外れる音がした。

横方向にスライドする扉。

薄暗い室内を、埋め込まれた蛍光灯が照らし出している。奥に人影。背筋に冷や汗が伝うのを感じながら、そつと踏み込む。トラップの気配は無し。

「君は、スネーク？」

男の声だ。

「ああ。待たせたな『ハッカー』、助けに来た。怪我は？」

「大丈夫だ、やたら強力なスタンガンを食べらったがね」

ぬつ、と現れた長身の人影。なんとまあ、さえない男だ。

よれよれの白衣に身を包み、おぼつかない足取りでひよこひよこ  
とやってくる。くせつけのある黒髪は、監禁生活の所為か、ただず  
ぼらなのか、絡まって大変な事になっている。

CALL

「こちらスネーク」

『サニーよ』『私もいるわ』

「『ハツカー』を確保した。五体満足で」

無線機越しに、安堵の溜息が漏れる。

『……良くやつてくれたわ、スネーク』

『サニー、スネーク。気を緩めちゃダメ。ちゃんと、五体満足で帰  
ってくるまでは』

「ああ」

そうだ。これから、大一番の大脱出劇が待ち構えている。

腹の奥底に力が入るのを感じながら、俺はゆっくりと息をついた。

数秒の間があり、ナターシャから通信が入る。

『ソリトンレーダーの限り、と言つか状況もだけど、送電回路施設  
には敵が集中しているわ。倉庫を通って裏口まで行くのは、困難だ  
と言わざるを得ない』

俺は、チラッと、もやしっこ『ハツカー』を盗み見る。

一人なら何とかなるが、彼と一緒にでは、どちらかが、死ぬ。

頷き、先を促した。

『正面玄関にも、敵は張り付いたままよ。地上ルートは使えない』

『そこでだスネーク。屋上に上がれ』

「大佐？　だがどうやって？」

『ああ。その部屋を出た左側に、応接室1があるだろう。その窓を突き破って、縁へ移れ。備え付けの梯子があるから、それを伝って屋上へ行ける。一度倉庫の屋根に降りてから、地上へ降りろ。フエンスの裂け目から、抜け出せるはずだ』

「潜入時に使った、抜け穴か」

『そうだ』

脳裏に、示されたルートを思い描く。

……外に身を躍らせるのは危険な気もするが、闇に紛れば、その限りじゃない。日の出までは、空が白むまでは、まだ猶予がある

「わかった。応接室の1だな」

『頼んだぞ、スネーク……。ところでナターシャ、何故そんなに不満そうなんだね』

『私の出番をかすめ取っていく男は嫌いです』

『えっ、ちよ』

『サイテーですね』

『ええ』

『……………』

『……………』

……………

ピッ。

なんか、帰りたくないな。

心の中で、大佐へ合掌。気を取り直して、『ハツカー』へと向き直る。

男は真つ白な指で、フレームが細い長方形の眼鏡のブリッジを、くいつと押し上げた。

「単身で敵地に乗り込んできた特殊作業員、スネーク……………。見間違いだっただかと思っただが、やはりまだ子供じゃないか。どこそその名探偵のだよまったく。それにしても、僕と同じ年くらいか……………。いやはや、感服したぞ」

「お眼鏡にかなったようで何よりだ」

レンズがきらりと光った。

互いに軽口を叩いて、ニイツと口元を歪める。

だが、親睦を深めている時間は、もはやない。

「早速だが『ハツカー』、お前をここから連れ出す。話はそれからだ」

焦げ目の付いた白衣のシワを伸ばしながら、『ハツカー』は答える。

「諒解だ。しかし、『ハツカー』と呼ばれるのは気に入らん。僕の仕事は、ハッキングだけではない」

何でも良いが、さっさとしてほしいな。

応接室のドアから、廊下を見渡す。

……人影は、無し。

『ハツカー』に手招きし、俺はそのまま応接室1へと向かう。

ドアを開け放ち、チェック。白衣に身を包んだ研究員二人をハツシューパピーで無力化し、中に踏み入れた。眠っているのを確かめながら、豪華なソファとガラスのテーブルを迂回し、窓際へと身を寄せる。

小走りで駆けてくる『ハツカー』は、いくらか顔を強張らせていた。

「初めて見るが……、上手い物だな」

それはそつだ。出来なきや、今俺はここに居ない。

戦場で死ぬか、またはサイファーに捨てられて……

やめろ。頭を振って、その顔を脳裏から追い払う。



窓の鍵を開け、警戒しながらスライドした。夜風が頬をくすぐり、喧騒が耳を掠める。

俺が見付からなくて、焦ってるんだろうな。これ以上警戒が強まったらたまらない、早く逃げおおせるに限る……。

「まさかと思うが、高所恐怖症、なんて事は」

「安心してくれ、スネーク。飛行機くらいは乗れる」

関係ありそうで、実際ないのでは？

身を乗り出して、外を確認する。そこには黒い闇がぼつかりと、底の見えない大口を開けていた。落ちたら奈落の底、と言われれば、ここが二階だと分かっても信じてしまつかもしれない。

じっと目を凝らし、辛うじて、ヒト一人がやっと歩けそうなくらいの縁を確認。踏み外したら厄介だな……。

「出来るだけ、目立つ動き、声を出したりするな。行くぞ、『ハツカー』」

「オーケー、……そうだ。僕の事はハツカーではなく、……そうだな、師匠の名を借りて、オタクンとでも呼んでくれ」

「オタクン？ それに、師匠って」

「……今度ゆつくり、お茶でも飲みながら語り合いたい物だ」

「ああ、わかった。さっさと脱出しよう」

ソリトンリーダーも合わせて確かめる。人の気配は皆無だ。

先ず俺が足場を確かめながら降りて、後に『ハツカー』、いや、オタクンが続く。意外にバランス感覚が良いのか夜目が利くのか、

危なげなく歩を進めている。

心配しすぎだったかな。

右手を見ると、確かに梯子がかかっていた。慎重に歩いて、しっかりと掴む。

風化して錆びてはいるけど、耐久性に問題は無さそうだ。腕を引き上げ、足場に意識をやりながら、一段ずつ上っていく。

下では、オタコンが大した気負いもなくするとくつついてきていた。

……いよいよ、最終段。

身長に頭だけだし、素早く屋上の様子を確認。

一気に身体を引き上げて躍り出ると、片膝立ちでMk-22を構える。一通りチェックを済ませ、安全を確かめた。オタコンに手招きし、屋上へと誘う。取りあえず、建物から脱出できた事に安堵した。

屋上はどうやら、コンクリート製らしい。音が響かない分、ありがたい。

ジメツとした生温かい風が、屋上に吹き荒れる。ラピスラズリーのバンダナが、バタバタとはためいた。オタコンは白衣の裾を押さえ、ひよこひよこ付いて来る。

あっという間に反対側へ。一階分屋根が下がっていて、どうやら

ここが倉庫のようだ。正確には、この建物の内側が倉庫。

先ず俺が縁にエルドぶら下がりをして、密やかに階下へと降りる。膝でシヨックを和らげて、音を殺した。オタクコンに手を貸し、ゆっくりと降ろす。

そしてまた、サイレントウォーク。階下に耳を澄ませれば、微かに喧騒が聞こえてくる。警備が拡大する前に逃げないと……。だが、このペースで行けば余裕だな。

何事も無く縁に付いた俺達は、またさっきの手順で降りようとする。

今まで潜入していた、戦場からの脱出。帰路が残っているとはいえ、緊張感からの解放は心地好い。ようやく、胸がすいた感じが味わえた。

ホッと、安堵の溜息をつきかけたその時

視界の端で、何かが光った。

「オタクコンッ！」  
「ん なっ」

咄嗟に飛びかかり、暗がりで見開くオタクコンに覆い被さる。

刹那。

閃光が頭上を駆け抜け、ビリビリと大気を震わせた。

湿気とは違う、焼けるような熱波が髪を焦がす。

レーザー兵器?!

南からの攻撃。右手は素早くMk-22を抜き、思わず左手で、エメラルド色のペンダントを握り締める。だけどそれだけで、俺は動揺を沈める事が出来た。

CALL

「スネークっ！ ISよ」

「サニー、機種はわかるか!？」

「今解析中だけど、衛星だけじゃ無理。明確な情報がないと……」

「スネーク、私だ。現時刻を以て、ISの起動を許可する。アードで撃退してくれ」

「了解。オタコンを逃がす。拾ってやってくれ」

「ナターシャお姉さんに任せなさいっ。気を付けてね」  
「ああ」

ガチャッ

「オタコン、お前は今から一人で逃げる。俺が敵を食い止める」

腕からコーデック、ソリトンレーダーを外し、未だに視線が定まらないオタコンに押しつける。Mk-22も手に握らせ、「銃の撃ち方はわかるな」「な、なんとか」踵を返した。

戦闘になれば、否が応でも目に付く。敵兵も集まってくるだろうから、何とかしてオタコンは距離を稼ぐべきだ。それに、逃走距離の分だけ、俺が戦闘することによって発生するであろう爆音や閃光で、敵の目を引き付ける事が出来る……。

「そこを降りたらフェンスの裂け目がある。ホフクでくぐって、西へ走れ！」

アード、展開。

時間にして、コンマ四秒で装着完了。今日も安全に平常運転だ。

スラスターは使わず、脚力だけでサイドステップ。

瞬間、オレンジ色の光線が照射され、コンクリートが熱で溶解した。

南米の風に、明らかな熱波が追加される。

ISは展開時に、必ず光を発する。理論はよくわからないけど、このエフェクトはとにかく厄介だ。とりわけ、暗闇での戦闘では、敵に己の位置を教えてしまう。

間髪入れず、SMGパトリオットを展開。左手は《零落白夜・S》を握る。

暖まってきたスラスターに火を入れ、一気に跳び上がった。

眼下を薙ぐレーザーを傍目に、ハイパーセンサーを起動 敵の

影を探す。

「……………タリホー目標視認」

高速接近する熱源反応探知。ISと確認。機種、不明。所属国、不明。……

所属国、不明？ ならば、フリーファイティング作戦会議で聞いていた、イギリス製の新型じゃない、と。

確かに、事前に見ていた写真と、シルエットが異なる。非固定武装の四枚羽根は、全てにスラスタを積んでいるのか、やけにごつい。何より特徴的なのは、パイロットの倍はあるであろう、一対の翼か。……何か生き物めいた物を感じる。プテラノドンの翼、と言った風体の、翼膜を持った飛行補助ユニットだった。

腰から伸びる、二本のレール。さっきも見たが、アレがレーザー兵器の元凶だろう。

『スネーク、ハイパーセンサーで得た情報を、こちらに回して欲しい。私が解析して、スネークのディスプレイに送るわ』

耳小骨振動を使った無線機よりも明瞭なサニーの声が、脳に直接響く。

了解。

返事に重なるように、



019話 強襲（後書き）

まことじっ

誠に申し訳ありませんでした！

前回の投稿日とか、夏休み中じゃん。12月24日（自宅警備の日）ももうすぐじゃあないか……

待っていて下さった読者の方々に、深くお詫び申し上げます……。

次話は年内には上げたいなと思っておりますが、まだどうなる事やら。

ですが、

途中で挫折することはありませんっ（キリッ

（ここで言っとかないと、折れそうな気がするという……）

駄作ですが、今後ともよろしく願いたいします



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4419t/>

---

MG『I』S ~蛇を継ぐ者~ 《IS×MGS》

2011年12月1日01時51分発行